埋蔵文化財調査報告書36

朝日遺跡（第7～10次）
茶臼山古墳（第3次）
千音寺遺跡（第3次）
H-113号窯
付　朝日遺跡（第5・6次）
　　名古屋城三の丸遺跡（第11次）

2001

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書 36

朝日遺跡（第７～10次）
茶臼山古墳（第３次）
千音寺遺跡（第３次）
H-113号窯
付　朝日遺跡（第５・６次）
　　名古屋城三の丸遺跡（第11次）

2001

名古屋市教育委員会

例　言

1　本書は、平成11～12年度に名古屋市教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査のうち、4遺跡7件の報告書である。

2　収録したのは、名古屋市下水道局（平成12年度より名古屋市上下水道局）の下水道整備事業に伴って実施した、朝日遺跡（第7～10次）、茶臼山古墳（第3次）、名古屋市住宅都市局の住宅建設工事に伴って実施した千音寺遺跡（第3次）の発掘調査報告、および名古屋市交通局の地下鉄建設工事に伴って実施したH-113号窯の立会調査報告である。

3　各調査に関する事項は、調査毎の例言に記した。

4　朝日遺跡第7・8次調査の報告に関連して、朝日遺跡第5・6次調査の成果を引用するため、平成11年度刊行の「下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」を転載した。

5　本書では、海抜高はT.P.（東京湾の平均海面）を、方位は国土座標第Ⅶ系による座標北を示した。なお、名古屋港基準海面（N.P.）は、東京湾平均海面（T.P.）＋1.4119mである。

6　調査記録・出土遺物は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

7　各調査および本書の作成は、名古屋市見晴台考古資料館学芸員が担当した。調査および執筆担当者は、各編の例言に記した。本書の編集は、伊藤正人が担当した。

もくじ

I　朝日遺跡第７・８次発掘調査 …… 1
1　はじめに …… 3
2　調査の経過等 …… 6
3　土層と遺構 …… 9
4　遺物 …… 18
5　小結 …… 23

II　朝日遺跡自然科学分析 …… 25
朝日遺跡の花粉化石群集 …… 26
朝日遺跡から出土した大型植物化石 …… 33
朝日遺跡のプラント・オパール …… 37

III　朝日遺跡第９次発掘調査 …… 41
1　調査の経過 …… 43
2　基本層序 …… 43
3　遺構と遺物 …… 43
4　まとめ …… 45

IV　朝日遺跡第10次発掘調査 …… 51
1．調査の経過 …… 53
2．遺構と遺物 …… 53
3．まとめ …… 57

V　朝日遺跡第５・６次発掘調査 …… 59
1　遺跡の概要 …… 63
2　第５次発掘調査 …… 65
3　第６次発掘調査 …… 71

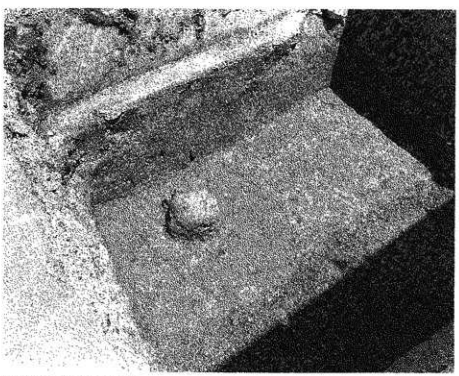
付　名古屋城三の丸遺跡第11次発掘調査 …… 77

VI　茶臼山古墳第３次発掘調査 …… 83
1．位置と環境 …… 85
2．これまでの調査 …… 86
3．調査の経過 …… 88
4．遺構と遺物 …… 88
5．まとめ …… 88

VII　千音寺遺跡第３次発掘調査 …… 93
1　位置と環境 …… 95
2　調査の経過 …… 97
3　調査の成果 …… 98
4　小結 …… 104

VIII　II-113号窯立会調査 …… 105
第１章　調査の経過 …… 107
第２章　古窯の位置と立地環境 …… 108
第３章　調査概要 …… 110
第４章　まとめ …… 123

Ⅰ　朝日遺跡第７・８次発掘調査



8次303Gr.遺物出土状況

もくじ

1　はじめに …… 3
2　調査の経過等 …… 6
3　土層と遺構 …… 9
4　遺物 …… 18
5　小結 …… 23

例　言

1　本編は、名古屋市教育委員会がおこなった朝日遺跡第７次および第８次発掘調査の記録である。

2　発掘調査は、名古屋市下水道局（平成12年度より名古屋市上下水道局）の下水道築造工事に伴って実施した。原因となった工事件名は、第７次が「第２次～第５次西区長先町付近下水道築造工事」、第８次が「第３次・第４次西区中沼町付近下水道築造工事」である。

3　第７次発掘調査は、平成11年度（期間＝平成12年１月11日～３月30日）に計約240㎡を対象とした。

4　第８次発掘調査は、平成12年度（期間＝平成12年４月５日～５月31日）に計約130㎡を対象とした。

5　発掘調査は、名古屋市見晴台考古資料館が担当した。担当者は、第７次が伊藤厚史・伊藤正人、第８次が伊藤（厚）・伊藤（正）・藤井康隆であった。

6　調査に関して次の方々から御教示をいただいた。お名前を記して謝意に代える（敬称略）。
赤塚次郎、石黒立人、鈴木正貴、藤山誠一、坂野俊哉、宮腰健司、財愛知県埋蔵文化財センター、国際航業㈱朝日遺跡発掘調査事務所

7　本編の執筆は、遺物を藤井が、その他を伊藤（正）が担当した。

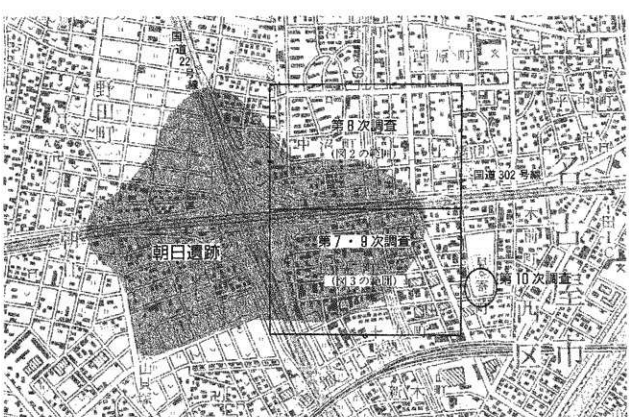


図１　朝日遺跡と調査範囲（1：12,500）

1　はじめに

本編は、朝日遺跡第7・8次発掘調査の報告であるが、朝日遺跡第5～10次発掘調査の報告を収載する本書の冒頭にあたるため、これら全体の関連についてふれておく。

朝日遺跡は、濃尾平野最大の弥生時代集落として知られ、国道建設等に伴う発掘調査が、愛知県教育委員会等により繰り返されてきた。本来、遺跡の地理・地形・歴史等の概要を以て導入とすべきであろうが、本書では、第Ⅴ編の記述（p.63）に代える。

第7～9次（以下、第を略）調査は、水場川以西における下水道整備事業を原因として実施した。7次調査は、国道302号線（名古屋環状2号線）以南のマンホール築造部分（図3）を対象とし、8次調査は、同以北のマンホール築造部分（図2）を対象とした。7・8次調査地点をつなぐ管路部分のうち、名古屋市教育委員会が直営調査を実施した範囲が、9次調査である。管路部分の調査は、平成11年度末の7次調査と平成12年度当初の8次調査の成果に基づいて、調査対象範囲が確定したため、名古屋市の発掘調査実施機関である名古屋市見晴台考古資料館の平成12年度調査体制の確保が困難であった。このため、管路部分については、民間調査機関へ発掘調査を業務委託することで対処することとなったが、委託のための調整・準備期間中の施工範囲については、直営で調査をおこなった。これが9次調査であり、よって一連の管路の途中で、本書に収録した報告部分（Ⅲ編）と、別途民間調査機関により報告される部分に分割されることとなった[註]。

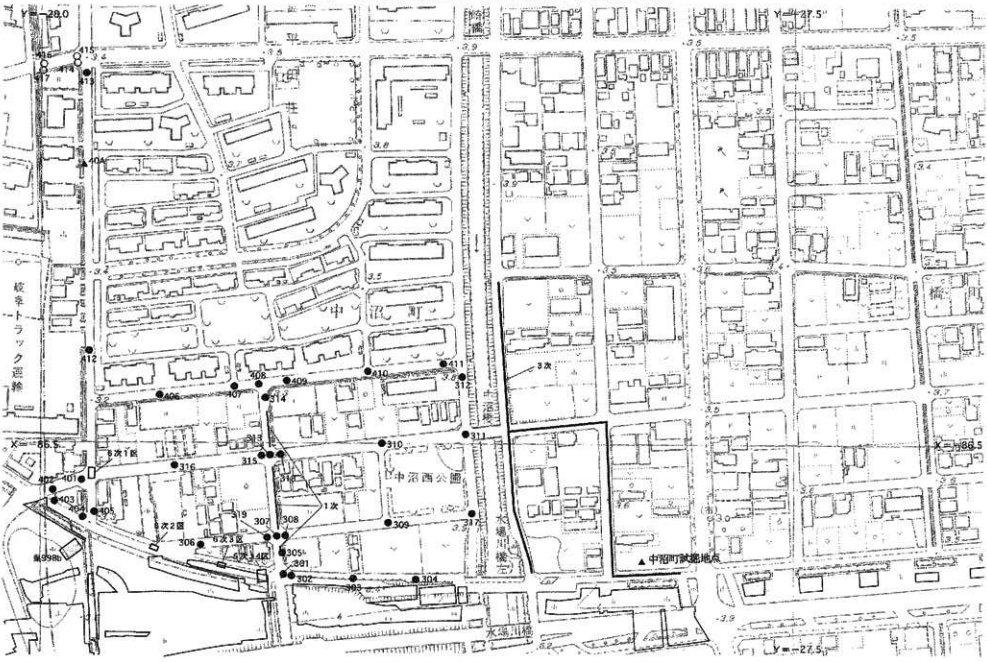
水場川以西の朝日遺跡範囲内における下水道築造工事は、平成11年度に着手され、地下8m付近に幹線下水道管を布設する工事からはじまった。この工事のうち、マンホールを設置する部分については、地表付近の掘削を伴い、埋蔵文化財に影響が及ぶため、名古屋市教育委員会が発掘調査あるいは立会調査により対応した。本書（Ⅴ編）に転載したのは、これらの発掘調査（5・6次）の記録である。調査範囲が重複するため、遺構・土層が関連する可能性があり、また8次調査時に実施した自然科学分析調査（Ⅱ編）では、6次調査の土壌サンプルも合せて分析している。

10次調査（Ⅳ編）は、5～9次調査とは別途の下水道幹線に伴うもので、現在の遺跡地図では、「朝日遺跡群東南部」として記載されている地点にあたる。

各調査は、全体的な計画に依らず、個別に実施せざるを得ず、担当者も一定しなかった。このため、各調査の整理作業等も、単独で進めることとなり、編括の余裕を持たないまま本書の作成に至った。同一遺跡の報告でありながら、記載方法や表現が不統一である点を、ここにおわびしておく。以下、本（Ⅰ）編～Ⅴ編に、上記の朝日遺跡発掘調査に関連する報告を掲載する。

註　9次調査に引き続いておこなわれた管路部分の調査報告は、平成12年度に別途報告される予定である。

図2　第8次調査地点位置図（地点名は最初の8を省略、1：2,500）



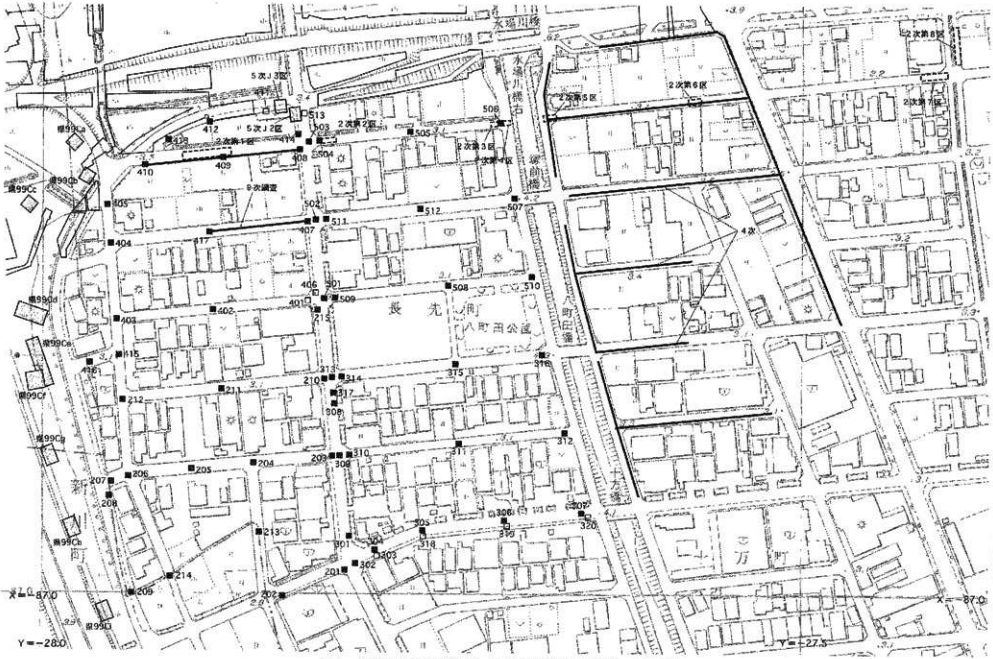


図3　第7次調査地点位置図（地点名は最初の7を省略、1：2,500）

2　調査の経過等

朝日遺跡第７・８次調査は、ともに下水道の人孔（マンホール）部分が対象であり、各地点は、２m 四方の正方形（４m²）が基本であった。

７次調査の準備作業等を含めた調査期間は、平成 12 年１月 13 日～３月 21 日で、約 240 m² が対象であった。８次調査は、同じく平成 12 年４月５日～５月 31 日で、約 130 m² であった。

調査は、下水道局による工事用の試掘を兼ねて掘削した。掘削は、作業用の人員・機材等の提供を受けて、これを見晴台考古資料館学芸員が指示し、必要に応じて記録作成を行い、調査終了後に工事深度までの試掘掘削がおこなわれた。現用道路上での掘削であるため、薄アスファルトをはがすところから着手し、その日のうちにアスファルトの仮復旧を終了することを原則とした。このため、調査時間にはかなりの制約があったが、必要があれば翌日に継続することを前提として下水道局施工業者の協力のもと、無事予定期間内で作業を終了した。

７次調査では 65 地点、８次調査では 36 地点が、調査対象であった。このうち計７地点については、既設管による著しい撹乱が予測される等、調査は不要と判断した。また計５地点については、別件の先行工事との関連で、期間中の調査が不能であったため、７・８次調査の対象外（延期）とした。

下水道築造工事は、７次調査が４つの工区に、８次調査が２つの工区に分れており、各工区ごとに施工業者が異なった。各工区の工事件名は、例言（p.2）に示したように、７次調査区に「２～５次」、８次調査区に「４・５次」が割り振られており、各工区ごとに調査対象となるマンホールに通番がつけられていた。すなわち、「掘立てマンホール」を表す記号Ｐに通番を付した「Ｐ１」「Ｐ２」「Ｐ３」と続く名称が、各工区ごとに用いられていた。工事側との整合性を考えて、調査時には工事件名の次数を頭に付けて、例えば４次工区のＰ10 であれば「４Ｐ10」と呼び、写真ボードや図面類にもこれを用いた。

報告にあたり、独自名称により単純化することも考えたが、混乱をきたす可能性もあり、基本的には工事名称を踏襲するかたちで、次のような名称を用いた。各地点は、４桁数字で表し、最初（４桁目）の数字は、発掘調査次数（７か８）を記す。次の数字は、各工区の件名次数を示し、７次調査では２～５、８次調査では３か４を記す。下２桁は、各地点のＰ番号である。従って、７次調査をおこなった２次工区のＰ１は、調査記録等で７次２Ｐ１としていたものを、本書では「7201」と表記する。同様に、８次調査をおこなった３次工区のＰ12 は、８次３Ｐ12 を「8312」と表記する。なお、各地点（調査区）をグリッド（Gr.）と呼んだ場合がある。

調査区の施工順序は、現場の周辺事情や周辺の関連工事状況に応じて、施工業者が予定を組み、これに合せて作業をおこなった。撹乱が著しかったり、土層状況が単純で、掘削や記録作業が順調に進む場合は、１日に２箇所を対象とした場合もあった。表１に、７次・８次を通しての現場作業進行状況をまとめた。

各調査区の位置は、事前に測量業務委託により設置した測量点網を用いて、国土座標値および標高を割り出した。調査区は、各辺がほぼ東西南北に沿った正方形を基本とすることから、四隅の点を測定した。北西隅をＡとし、時計回りにＢ・Ｃ・Ｄと呼んで全調査区に共通させた。この数字を示したのが表２である。

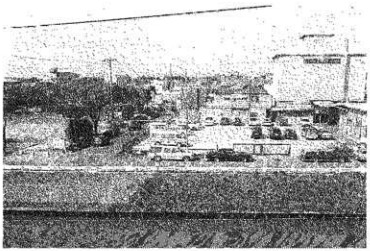


写真1　7次調査地区（東から）

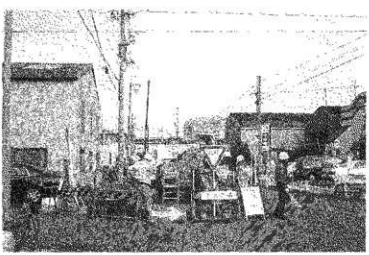


写真2　7203作業風景（南から）

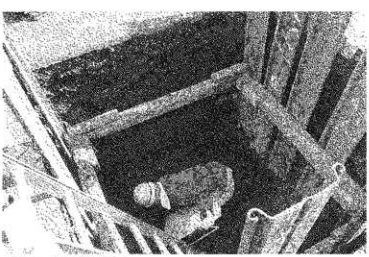


写真3　7208作業風景

次数	日付	調査区	備考
7	1月13日(水)	201	
	14日(金)	203・211	
	17日(日)	210・212	
	18日(火)	204・205	各ピット1基
	19日(水)	205・207	
	20日(木)	208・209	
	21日(金)	213・214	
	24日(月)	202・215	
	25日(火)	3次学館E	
	26日(水)	313・316	
	27日(木)	304・305	
	28日(金)	301・302	
	31日(月)	306・307	
	2月1日(火)	309・310	
	2日(水)	311・312	
	3日(木)	308・317	
	4日(金)	314・315	
	7日(月)～18日(金)	休止	
	21日(月)	503・504	
	22日(火)	510	
	23日(水)	506	
	24日(木)	508	
	25日(金)	505・512	
	28日(月)	507	
	29日(火)	502・511	第H(400平面)
	3月1日(水)	501・509	
	2日(木)	403	
	3日(金)	404・405	405=土坑・ピット多数
	6日(月)	416	溝2＋土器
	7日(火)	415	土器
	8日(水)	410	
	9日(木)	413	土坑(溝)
	10日(金)	414	溝・ピット多数
	13日(月)	409	ピット1基
	14日(火)	408	
	15日(水)	412	溝・ピット多数
	16日(木)	前天休止	
	17日(金)	402・417	417=土坑（住居？）
	21日(火)	407	
8	4月6日(水)	405	
	7日(金)	401	
	10日(月)	前天休止	
	11日(火)	409	溝1東側
	12日(水)	306	平明造構・溝2条
	13日(木)	310	
	14日(金)	307	溝・土坑群
	17日(月)	308	土坑(溝？)他
	18日(火)	301・305	301=溝等
	19日(水)	309	土坑群
	20日(木)	前天休止	
	21日(金)	317	土坑・溝
	24日(月)	316	
	25日(火)	315・318	
	26日(水)	313	
	27日(木)	314	土坑(溝？)2基
	28日(金)	310	
	5月1日(月)	311	
	2日(火)	312	土坑(溝？)2基
	8日(月)	302	土坑？
	9日(火)	303	土坑・ピット
	10日(水)	304	
	11日(木)	403・404	403=土坑1基
	12日(金)	前天休止	
	15日(月)	402・407	402=ピット4基・407=土坑等
	16日(火)	410	溝1東
	17日(水)	前天休止	
	18日(木)	408	土坑等
	19日(金)	406	ピット1基
	22日(月)	412	土坑数基・溝
	23日(火)	413	
	24日(水)	411	ピット数基

表1　調査経過一覧

次	調査区	点	X	Y	Z
7	201	A	-86980.165	-27740.74	2.721
		B	-86979.399	-27739.560	2.819
		C	-86981.262	-27739.467	2.921
		D	-86982.069	-27740.91	2.79
	202	A	-86999.526	-27846.219	2.771
		B	-87000.968	-27848.501	2.71
		C	-87000.895	-27841.856	2.677
		D	-87001.601	-27840.261	2.686
	203	A	-86907.71	-27806.117	2.779
		B	-86907.432	-27807.758	2.81
		C	-86909.457	-27807.568	2.936
		D	-86909.081	-27809.202	2.871
	204	A	-86917.31	[illegible]	2.871
		B	-86917.117	-27800.64	2.812
		C	-86916.711	-27800.432	2.875
		D	-86918.37	-27802.436	2.881
	205	A	-86916.068	-27963.274	2.979
		B	-86915.871	-27961.356	2.954
		C	-86917.832	-27961.401	3.009
		D	-86918.311	-27962.071	3.071
	206	A	-86919.534	-27944.665	3.223
		B	-86919.29	-27942.697	3.217
		C	-86921.275	-27941.766	3.234
		D	-86921.[illegible]	-27942.907	3.153
	207	A	-86921.849	-27955.375	3.205
		B	-86921.172	-27953.422	3.177
		C	-86925.071	-27952.806	3.139
		D	-86923.70	-27954.83	3.232
	208	A	-86931.275	-27859.156	3.277
		B	-86931.602	-27857.177	3.222
		C	-86932.734	-27856.677	3.156
		D	-86933.176	-27858.698	3.[illegible]
	209	A	-86997.952	-27811.319	3.167
		B	-86997.378	-27809.111	3.146
		C	-86999.235	-27538.793	3.162
		D	-86999.80	-27540.731	3.190
	210	A	-86833.772	-27815.468	2.879
		B	-86837.537	-27813.47	2.[illegible]
		C	-86837.307	-27813.109	2.827
		D	-86837.807	-27816.167	2.[illegible]
	211	A	-86862.813	-27881.761	2.932
		B	-86864.651	-27879.117	2.947
		C	-86861.673	-27879.211	2.984
		D	-86864.695	-27881.252	2.956
	212	A	-86860.978	-27917.972	3.132
		B	-86860.771	-27915.365	3.133
		C	-86871.724	-27945.302	3.140
		D	-86871.968	-27947.828	3.181
	213	A	-86952.036	-27868.166	2.815
		B	-86954.867	-27868.171	2.864
		C	-86956.87	-27866.006	2.884
		D	-86957.03	-27868.004	2.816
	214	A	-86981.215	-27916.314	3.176
		B	-86985.465	-27915.005	3.187
		C	-86985.362	-27914.273	3.092
		D	-86984.113	-27916.397	3.175
	215	A	-86810.261	-27819.938	2.915
		B	-86810.677	-27815.330	2.911
		C	-86813.345	-27818.095	2.902
		D	-86811.272	-27819.615	2.786
	301	A	-86940.319	-27729.113	2.793
		B	-86945.166	-27727.405	2.703
		C	-86946.211	-27727.137	2.717
		D	-86946.145	-27729.142	2.786
	302	A	-86977.614	-27795.832	2.844
		B	-86976.8	-27793.967	2.812
		C	-86978.769	-27794.161	2.921
		D	-86979.519	-27796.126	2.897
	304	A	-86966.368	-27791.374	2.694
		B	-86966.420	-27783.549	2.672
		C	-86960.31	-27782.139	2.69
		D	-86967.137	-27784.389	2.624
	305	A	-86955.464	-27751.870	2.559
		B	-86954.55	-27749.527	2.605
		C	-86956.582	-27749.495	2.675
		D	-86956.968	-27751.742	2.622
	306	A	-86948.981	-27899.195	2.559
		B	-86948.730	-27897.116	2.[illegible]
		C	-86950.807	-27896.965	2.631
		D	-86950.549	-27899.046	2.621
	307	A	-86943.702	-27545.3	3.35
		B	-86545.596	-27544.305	3.416
		C	-86645.452	-27544.305	3.436
		D	-86645.644	-27549.278	3.242
	308	A	-86874.474	-27897.935	2.777
		B	-86874.293	-27899.652	2.737
		C	-86876.788	-27896.306	2.722
		D	-86876.451	-27897.778	2.768
	309	A	-86897.166	-27801.316	2.823
		B	-86898.965	-27802.314	2.777
		C	-86900.60	-27802.029	2.785
		D	-86899.278	-27804.33	2.823
	310	A	-86906.013	-27798.465	2.729
		B	-86906.378	-27796.307	2.712
		C	-86908.208	-27796.10	2.719
		D	-86908.316	-27798.467	2.767
	311	A	-86908.917	-27727.946	2.738
		B	-86898.216	-27725.865	2.778
		C	-86906.617	-27725.642	2.777
		D	-86908.895	-27727.744	2.77
	312	A	-86851.679	-27837.423	3.065
		B	-86851.225	-27835.398	3.131
		C	-86853.17	-27835.203	3.13
		D	-86853.465	-27837.227	3.078
	313	A	-86854.972	-27899.96	2.875
		B	-86854.81	-27897.562	2.807
		C	-86856.891	-27897.71	2.801
		D	-86857.102	-27899.800	2.831
	314	A	-86824.75	-27831.731	2.69
		B	-86841.915	-27831.622	2.663
		C	-86856.054	-27831.434	2.719
		D	-86826.3	-27833.537	2.737
	315	A	-86846.247	-27729.185	2.67
		B	-86846.122	-27727.140	2.682
		C	-86848.181	-27725.809	2.719
		D	-86848.432	-27728.914	2.71
	316	A	-86840.77	-27871.414	2.691
		B	-86836.92	-27869.545	2.301
		C	-86841.719	-27868.544	2.898
		D	-86841.[illegible]	-27871.402	2.727
7	317	A	-86867.55	-27908.321	2.781
		B	-86857.41	-27907.395	2.738
		C	-86859.40	-27907.131	2.71
		D	-86860.525	-27908.224	2.8
	401	A	-86841.[illegible]	-27808.488	[illegible]
		B	-86841.[illegible]	-27806.906	[illegible]
		C	-86843.062	-27806.455	[illegible]
		D	-86843.231	-27808.52	3.254
	403	A	-86818.06	-27952.377	3.259
		B	-86817.872	-27950.225	3.260
		C	-86820.011	-27950.064	3.272
		D	-86820.253	-27952.183	3.301
	404	A	-86766.738	-27966.513	3.321
		B	-86765.376	-27961.364	3.298
		C	-86767.[illegible]	-27961.707	3.353
		D	-86767.664	-27965.77	3.261
	403	A	-86740.958	-27958.742	3.258
		B	-86740.738	-27956.[illegible]	3.241
		C	-86742.772	-27956.733	3.211
		D	-86742.922	-27958.565	3.301
	405	A	-86771.752	-27829.781	2.858
		B	-86767.177	-27827.31	2.804
		C	-86769.642	-27811.335	3.511
		D	-86769.608	-27826.511	3.529
	406	A	-86767.253	-27811.320	3.064
		B	-86763.456	-27830.127	2.161
		C	-86765.157	-27830.10	2.065
		D	-86765.4	-27831.78	2.368
	409	A	-86708.882	-27832.582	3.163
		B	-86709.716	-27880.446	3.15
		C	-86710.348	-27880.316	3.113
		D	-86710.506	-27882.356	3.109
	410	A	-86711.181	-27001.166	3.246
		B	-86714.186	-27001.076	3.236
		C	-86716.621	-27000.592	3.299
		D	-86716.245	-27003.007	3.219
	412	A	-86086.361	-27880.867	3.23
		B	-86085.003	-27888.644	3.229
		C	-86087.543	-27888.352	3.166
		D	-86086.107	-27890.273	3.121
	413	A	-86658.861	-27009.901	3.229
		B	-86665.665	-27012.516	3.252
		C	-86657.423	-27015.306	3.302
		D	-86700.581	-27016.33	3.217
	411	A	-86653.693	-27832.870	2.786
		B	-86652.488	-27831.021	2.884
		C	-86695.735	-27831.868	2.88
		D	-86693.814	-27832.68	2.826
	415	A	-86639.196	-27997.[illegible]	2.309
		B	-86626.009	-27948.5	2.302
		C	-86611.161	-27048.3	2.242
		D	-86641.361	-27049.439	3.398
	416	A	-86845.522	-27905.75	3.3
		B	-86843.504	-27907.005	2.206
		C	-86846.951	-27907.065	3.329
		D	-86847.612	-27909.[illegible]	2.238
	417	A	-86758.919	-27892.23	3.011
		B	-86778.702	-27880.056	3.068
		C	-86760.515	-27886.991	3.061
		D	-86760.731	-27890.066	3.066
	501	A	-86660.219	-27815.562	2.912
		B	-86665.074	-27813.565	2.937
		C	-86665.211	-27813.274	2.844
		D	-86665.421	-27814.352	2.912
	502	A	-86751.10	-27827.321	2.862
		B	-86750.902	-27829.18	2.885
		C	-86753.065	-27828.83	2.919
		D	-86753.307	-27831.072	2.941
	503	A	-86699.121	-27826.97	2.97
		B	-86698.901	-27824.802	2.979
		C	-86701.091	-27824.032	2.95
		D	-86701.26	-27826.722	2.953
	504	A	-86692.691	-27820.344	2.860
		B	-86698.727	-27818.4	2.83
		C	-86700.29	-27818.261	2.892
		D	-86700.479	-27820.424	2.865
	505	A	-86697.7	-27730.164	2.981
		B	-86697.766	-27727.766	2.962
		C	-86693.307	-27727.461	3.02
		D	-86694.067	-27730.806	3.019
	506	A	-86685.615	-27598.536	3.07
		B	-86685.226	-27606.414	3.123
		C	-86687.413	-27598.67	3.126
		D	-86687.727	-27598.363	3.081
	507	A	-86737	-27606.164	3.981
		B	-86736.69	-27661.[illegible]	4.068
		C	-86736.832	-27661.269	4.096
		D	-86739.157	-27666.178	4.09
	508	A	-86728.562	-27734.756	2.766
		B	-86794.317	-27732.661	2.77
		C	-86796.418	-27732.464	2.793
		D	-86798.053	-27734.504	2.792
	509	A	-86902.78	-27609.3	2.679
		B	-86902.526	-27607.170	2.681
		C	-86904.[illegible]	-27606.970	2.701
		D	-86801.62	-27605.118	2.731
	510	A	-86798.596	-27678.698	3.768
		B	-86798.164	-27676.522	3.422
		C	-86790.286	-27676.043	3.427
		D	-86790.710	-27678.137	3.387
	511	A	-86750.85	-27813.499	2.878
		B	-86750.894	-27811.430	2.895
		C	-86752.079	-27811.201	2.915
		D	-86752.391	-27813.428	2.91
	512	A	-86741.227	-27732.388	2.99
		B	-86743.908	-27730.385	2.987
		C	-86745.75	-27740.328	3.022
		D	-86745.879	-27742.387	3.018
8	301	A	-86582.443	-27842.226	3.21
		B	-86582.577	-27836.313	3.247
		C	-86584.795	-27838.821	3.229
		D	-86584.88	-27842.377	3.279
	302	A	-86584.383	-27820.883	3.357
		B	-86584.581	-27824.678	3.373
		C	-86586.358	-27824.774	3.429
		D	-86586.32	-27827.071	3.3
	303	A	-86585.979	-27794.565	3.491
		B	-86586.986	-27792.811	3.511
		C	-86587.766	-27795.741	3.518
		D	-86587.789	-27790.628	3.502
8	304	A	-86586.725	-27749.516	3.556
		B	-86585.722	-27747.315	3.72
		C	-86587.485	-27747.392	3.741
		D	-86587.455	-27749.390	3.685
	305	A	-86566.238	-27841.754	3.342
		B	-86565.90	-27841.67	3.34
		C	-86567.146	-27841.517	3.307
		D	-86568.382	-27843.514	3.316
	306	A	-86564.08	-27896.734	3.196
		B	-86563.865	-27896.614	3.326
		C	-86565.494	-27896.403	3.243
		D	-86565.97	-27898.326	3.212
	307	A	-86558.175	-27815.317	3.3
		B	-86557.[illegible]	-27811.[illegible]	3.302
		C	-86560.61	-27813.849	3.302
		D	-86560.294	-27816.349	3.316
	308	A	-86557.376	-27839.506	3.311
		B	-86557.114	-27837.926	3.284
		C	-86559.35	-27837.751	3.318
		D	-86559.51	-27839.143	3.243
	309	A	-86556.279	-27772.614	3.414
		B	-86556.073	-27770.476	3.417
		C	-86557.771	-27770.337	3.422
		D	-86558.165	-27772.[illegible]	3.419
	310	A	-86462.907	-27777.006	3.290
		B	-86457.877	-27774.846	3.264
		C	-86499.779	-27774.8	3.300
		D	-86500.01	-27776.805	3.315
	311	A	-86481.512	-27718.553	4.463
		B	-86481.295	-27716.179	4.497
		C	-86483.559	-27716.34	4.516
		D	-86483.671	-27718.487	4.456
	312	A	-86457.165	-27721.922	3.455
		B	-86457.38	-27714.959	3.346
		C	-86454.303	-27714.818	3.347
		D	-86454.679	-27721.712	3.549
	313	A	-86595.805	-27849.876	3.336
		B	-86567.891	-27846.402	3.439
		C	-86565.872	-27848.741	3.282
		D	-86569.075	-27850.318	3.255
	314	A	-86466.876	-27854.988	3.337
		B	-86466.556	-27853.17	3.311
		C	-86468.906	-27852.875	3.352
		D	-86468.939	-27854.715	3.324
	315	A	-86506.732	-27836.254	3.307
		B	-86506.351	-27833.795	3.331
		C	-86508.219	-27833.317	3.354
		D	-86508.580	-27850.779	3.346
	316	A	-86512.875	-27913.500	3.242
		B	-86517.836	-27911.16	3.336
		C	-86514.[illegible]	-27911.16	3.326
		D	-86511.785	-27913.398	3.330
	317	A	-86544.107	-27716.8	2.675
		B	-86543.831	-27714.21	2.667
		C	-86545.986	-27713.951	3.061
		D	-86546.251	-27716.273	3.051
	318	A	-86504.767	-27644.376	3.239
		B	-86504.525	-27641.980	3.228
		C	-86506.925	-27641.634	3.242
		D	-86507.181	-27643.897	3.264
	319	A	-86558.967	-27651.177	3.197
		B	-86558.737	-27649.[illegible]	3.224
		C	-86560.652	-27649.0	3.242
		D	-86560.823	-27651.18	3.225
	401	A	-86529.942	-27971.636	3.568
		B	-86526.398	-27973.08	3.53
		C	-86527.07	-27973.242	3.504
		D	-86527.663	-27975.099	3.516
	402	A	-86526.365	-27988.69	3.466
		B	-86525.156	-27990.631	3.672
		C	-86527.425	-27990.967	3.630
		D	-86528.05	-27992.64	3.420
	403	A	-86533.294	-27993.079	3.363
		B	-86536.215	-27991.305	3.298
		C	-86537.532	-27992.011	3.353
		D	-86536.015	-27993.728	3.365
	404	A	-86544.056	-27977.036	3.252
		B	-86546.016	-27973.206	3.225
		C	-86546.643	-27976.990	3.297
		D	-86545.6	-27977.688	3.282
	405	A	-86541.103	-27568.056	3.216
		B	-86541.068	-27966.252	3.230
		C	-86543.123	-27966.162	3.181
		D	-86543.213	-27907.994	3.185
	406	A	-86467.312	-27925.822	3.432
		B	-86467.097	-27921.524	3.43
		C	-86469.517	-27921.758	3.391
		D	-86469.772	-27923.362	3.379
	407	A	-86161.991	-27873.540	3.46
		B	-86161.774	-27871.826	3.467
		C	-86463.558	-27871.532	3.363
		D	-86463.794	-27873.774	3.372
	408	A	-86400.256	-27656.777	3.421
		B	-86400.017	-27656.703	3.421
		C	-86402.914	-27656.454	3.379
		D	-86407.259	-27658.861	3.368
	409	A	-86446.297	-27659.762	3.379
		B	-86446.89	-27637.7	3.389
		C	-86458.662	-27637.4[illegible]	3.391
		D	-86450.033	-27630.464	3.396
	410	A	-86451.416	-27786.768	3.426
		B	-86451.153	-27784.0	3.454
		C	-86452.974	-27784.42	3.475
		D	-86453.153	-27786.537	3.443
	411	A	-86446.804	-27727.2[illegible]	3.365
		B	-86444.82	-27725.100	3.469
		C	-86446.82	-27724.926	3.469
		D	-86446.89	[illegible]	3.332
	412	A	-86438.695	-27970.69	3.367
		B	-86438.563	-27968.257	3.361
		C	-86440.667	-27968.107	3.390
		D	-86440.763	-27970.38	3.356
	413	A	-86254.665	-27972.020	3.523
		B	-86254.621	-27970.300	3.531
		C	-86256.71	-27970.[illegible]	3.567
		D	-86256.763	-27977.719	3.539

表2　第7・8次調査区の座標データ

3　土層と遺構

7・8次調査の各地点に関する基礎的データを、次の順で表3にまとめた。左から調査次数と地点名に次いで、遺構を検出した場合はその名称（土坑状＝SK、溝状＝SD、ピット＝P）、出土遺物の概略、現地表面の標高（表2のAデータ）、弥生時代の堆積層と推定される黒色土層を検出した場合の標高最大値、地山を確認した場合の標高最大値、土層断面図を作成した壁面数、遺構平面図を作成した面数、遺構（土層）図（図4～6）の掲載の有無、遺構写真の掲載番号、遺物図（図7～9）の掲載の有無である。

土層について概略を述べる。調査範囲における層序は、おおむね以下のように大別される。

I＝現代の舗装・路盤等、II－現代の水田耕作土、III＝中～近世の耕作土、IV＝古墳時代～古代の堆積土、V－弥生時代の堆積土、VI＝地山。

IIとIIIの区分、IIIとIVの区分は必ずしも明確ではなく、IVとして確実なのは、一部の遺構埋土のみである。IIIは、灰色の粘性土、IVは暗褐色の粘性土、Vは黒色の粘性土を基本とする。VI（地山）は、灰青色の砂シルトであり、これを掘り込んだ遺構の埋土（V）は、やや砂がちな粘性土となっている。

各地点の層位は、おおむねこの大別を基本として標準化されるものと思うが、7・8次調査は、離れた地点の比較でしかなく、単純化の弊害も予想されるため、本書では現場記録をそのまま掲載した。ただし、大別への対比は推定し、図4～6の土層註記の末尾にI～VIの記号を付した。

弥生時代の遺構は、8次調査では市営住宅平田荘南部（8412）以南の、ほぼ全域で検出された。大半が、土坑あるいは溝の一部と推定されるやや大型の遺構で、住居跡の存在を予測させるものは認められなかった。これらの多くは、方形周溝墓を区画する溝の一部と推定されるが、周溝墓と確認できるものやや全体の規模を推測できるものはなかった。個別の時期も確定できないが、出土遺物から8302・8306・8312・8412の検出遺構は弥生時代中期、8304・8307・8308・8317の検出遺構は同後期のものと思われる。

7次調査では、7405・7412・7413で弥生時代中期の遺構が検出されている。これより南東の7次調査範囲では、黒色土が広範囲に見られ、わずかな遺物を含む地点もあるが、明確な遺構は認められない。なお、表2で上面高を示した黒色土とは、色調において黒色(註)を呈するものを指す。遺物の項で、出土層位を示した「黒色土」とは、暗褐色土等を含む広義の意味で使用したものを、そのままに記している。

旧河道が、7次と8次でそれぞれ1条確認された。いずれも、従来の調査で発見された旧河道につながるもので、位置の概略を把握できたのみである。7次調査区では、7415で東(南)岸肩部を検出し、7403・7404・7416が河道内の堆積層と考えられた。7415・7416では、河道上層から全形を推定できる土器が出土しており、河道の埋没時期を把握することができる。8次調査区では、8316で北岸肩部、8405で南岸肩部を検出した。8310・8311・8313・8315・8318・8404が、河道内にあたる。8405の埋土上層からは、土器が出土しているが、7次調査区の河道埋没時期と大略同時期と捉えられる。

古墳時代の遺構としては、7417と8303で住居跡の可能性がある遺構を検出した。遺構・遺物の分布とも希薄である。古代～中世の遺構は、確認していない。

註　原則として『標準土色帖』の土色名が「黒」であるもの。後述の広義とは、色名に「黒」を含むものを一括したが、厳密なものではない。

調査	調査地点	遺構等	出土遺物	地表高 (m)	黒土面高 (m)	地山高 (m)	1層面	2層面	遺構面	調査方法	遺物面
	7201			2.78	1.13	1.08	2	—			
	7202			2.72		1.05	2				
	7203		灰釉陶器片 1	2.80	1.25	1.15	2	—			
	7204	Pit1(以下P1)		2.84	1.25	1.17	2	1			
	7205	P1		2.98	1.35	1.15	2	1			
	7206			3.23	1.37	1.20	2	—			
	7207		土器片 1	3.21		1.25	2	—			
	7208			3.25	1.54	1.40	1	—			
	7209		土器片 2 (黒色土)	3.19	(1.80)		1	—			
	7210		土器片 1	2.82		1.15	2				
	7211			2.95	1.39	1.27	2	—			
	7212	旧河道		3.19		1.63	2	—			
	7213		土器片 3 (黒色土)	2.88	(1.30)	1.08	2	—			
	7214			3.18		1.05	2				
	7215			2.92	1.38	1.24	1				
	7301			2.78	1.18	1.07	2	—			
	7302		磁器片 1	2.84	1.18	1.10	2	—			
	7303	調査不要					—	—			
	7304		陶器片 1	2.68	1.21	1.14	2				
	7305			2.60	1.30	1.13	2	—			
	7306			2.56	1.22	1.13	2	—			
	7307			3.35	1.15	1.09	1	—			
	7308			2.78	1.20	1.10	2	—			
	7309	全体撹乱		2.82			1	—			
7次	7310			2.73	1.20	1.12	1	—			
	7311			2.74	1.18	1.16	2	—			
	7312		土器片 2 (黒色土 1)	3.07	1.23	1.18	2	—			
	7313			2.83		1.15	1	—			
	7314			2.69	1.22	1.15	2	—	○	4	
	7315			2.67	1.17	1.16	2	—			
	7316			3.69			1	—			
	7317			2.78	1.24	1.10	2				
	7318~20	調査不要									
	7401	調査不要					—	—			
	7402		山茶碗片 1	3.12	1.63	1.52	2	—			
	7403	旧河道	土器片 7	3.30			2				
	7404	旧河道		3.37			2				
	7405	SK1・P1~8	土器片12(土坑・黒色土)	3.26	1.96	1.70	3	1	○	5	○
	7406	調査不要					—	—			
	7407			2.90		1.52	2	—			
	7408			3.00		1.73	2				
	7409	P1	土器片 2 (黒色土)	3.16	1.68	1.68	3	1			
	7410	SK2	土器片 3	3.25	1.86	1.74	1	—	○	6	
	7411	調査延期									
	7412	SD1、ピット群	土器片11(SD1)他土器片等13	3.23	1.99	1.87	1	1	○	7	○
	7413	SD1	土器片 8 (SD1)他土器片10	3.28	2.36	2.12	2	1	○	8	○
	7414	SK1~3	土器片15(SK1)他土器片 5	2.79	1.75	1.75	2	1	○	9	○
	7415	旧河道河付近	土器片 6 (暗灰色砂)	3.31		1.36	2	1	○	10	○
	7416	旧河道	土器片約20	3.30			3	1	○	11	○

表3　朝日遺跡第7・8次調査区の基礎データ

調査	調査地点	遺構等	出土遺物	地表高(m)	黒土面高(m)	地山高(m)	土層断面	遺構断面	遺構図	遺構写真	遺物図
7次	7417	SK1,P1	土器片1(SK1)	3.01		1.65	2	1	○	12	
	7501			2.91			1	—			
	7502			2.90		1.45	1				
	7503	全体攪乱		2.94			1	—			
	7504	全体攪乱		2.87			1	—			
	7505		土器片1・陶器片1	2.98		1.67	2	1			
	7506	遺構内?		3.07		(0.96)	1				
	7507			3.98			1	—			
	7508			2.77		1.34	2	—			
	7509		土器片1(灰色盛土)	2.68	1.42	1.25	2	—			
	7510			3.37		1.28(?)	1	—			
	7511			2.88		1.46	2				
	7512			2.99		1.52	2	—			
	7513	調査不要					—	—			
8次	8301	SK1~3,P1		3.24	1.95	1.95	1	1	○	13	
	8302	SK1(SD?)	弥生土器片約50(SK1)	3.36	1.94	1.86	1	1	○	14	○
	8303	SK1, P1~5	土器片3(SK1)・24(包含層)等	3.50		2.43	2	1	○	15	○
	8304	SD?	土器片約70(黒砂土層等)・河原石3	3.60	2.50	2.02	2	—			○
	8305	SK?		3.24	2.30	2.21	2	—			
	8306	SX1,SD1~2	土器片約50(褐色土等)・火打石1(1層)	3.20		1.66	2	1	○	16	○
	8307	SK1	土器片約30(SK1・3・4・暗灰青色粘土)等	3.30	2.17	1.91	1	2	○	17	○
	8308	SK1, P1~2	土器片約100(SK1・黒色土等)	3.31	2.12	1.80	2	2	○	18	○
	8309	SK1~5,P1	土器片約30(SK1・黒色土等)	3.41	2.75	2.60	3	1	○	19	
	8310	旧河道		3.30			2	—			
	8311	旧河道		4.46			2	—			
	8312	SK1~2	土器片7(SK1・2)	3.50	2.40	2.21	2	1	○	20	○
	8313	旧河道	陶器片1	3.34			1	—			
	8314	SK1~2	山茶碗片1(SK1)他土器片等4	3.33	2.28	1.93	2	1	○	21	○
	8315	旧河道	土器片2	3.30			2				
	8316	旧河道肩部	土器片8(暗灰色等)等	3.34		1.51	2	—			
	8317	SK1~2, SD1~3	土器片等約50(SD1~3・SK1等)等	3.63	2.69	2.40	2	2	○	22	○
	8318	旧河道		3.24			2	—			
	8319		土器細片2(3層)	3.19		1.79	2	—			
	8401		土器片6・陶器片2	3.57		2.32	2	—			
	8402	P1~4	土器片3(黒色シルト)	3.67	2.40	2.14	2	1			
	8403	SK1	土器片5(4層)	3.30	2.30	2.01	2	1	○	23	
	8404	旧河道?	土器片1(黒色シルト)	3.25			2	—			
	8405	旧河道肩部	弥生土器片約30・陶器片2(主に肩部)	3.22		1.00	2	—			○
	8406	P1~3	土器片約50(包含層等)	3.43		2.23	2	1			
	8407	SK1~2, P1~3	土器片6(黒色土等)	3.45	(2.40)	2.41		1	○	24	
	8408	SK1, P1~2		3.42	2.46	2.25	2	1	○	25	
	8409	SK1~2	土器片2(SK2)・山茶碗片等3(SK1)	3.38	2.45	2.36	4	1	○	26	
	8410	SD1	土器片・陶器片9(SD1等)	3.44		2.34	2	1	○		
	8411	P1~3		3.31	2.36	2.32	2	1			
	8412	SK1~4,P1~3	土器片約30(SK1・4,ピット等)	3.36	2.48	2.26	2	2	○	27	○
	8413		陶器片2・粘板岩1	3.52		?	1	—			○
	8414~17	調査延期									
	840A	試掘		3.47							

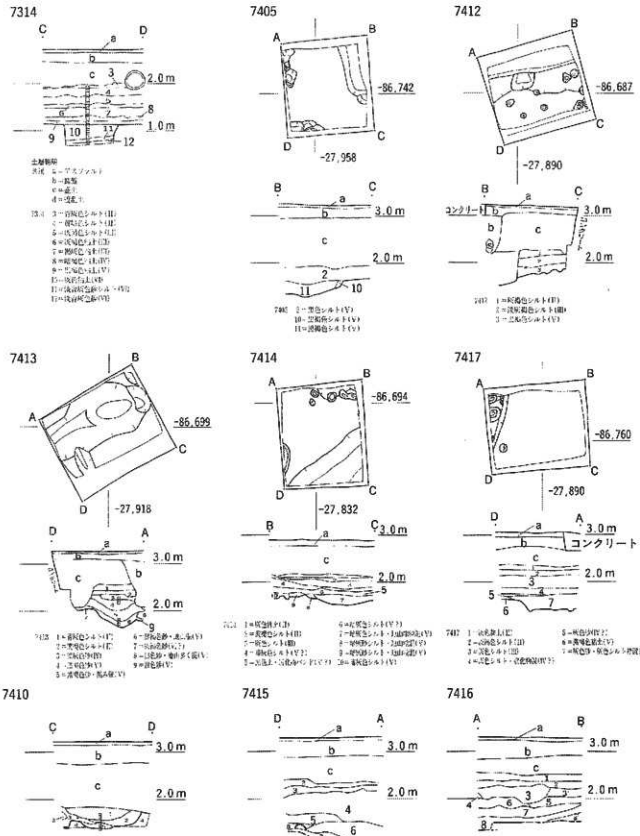


図4　朝日遺跡第7次発掘調査主要 Gr.図

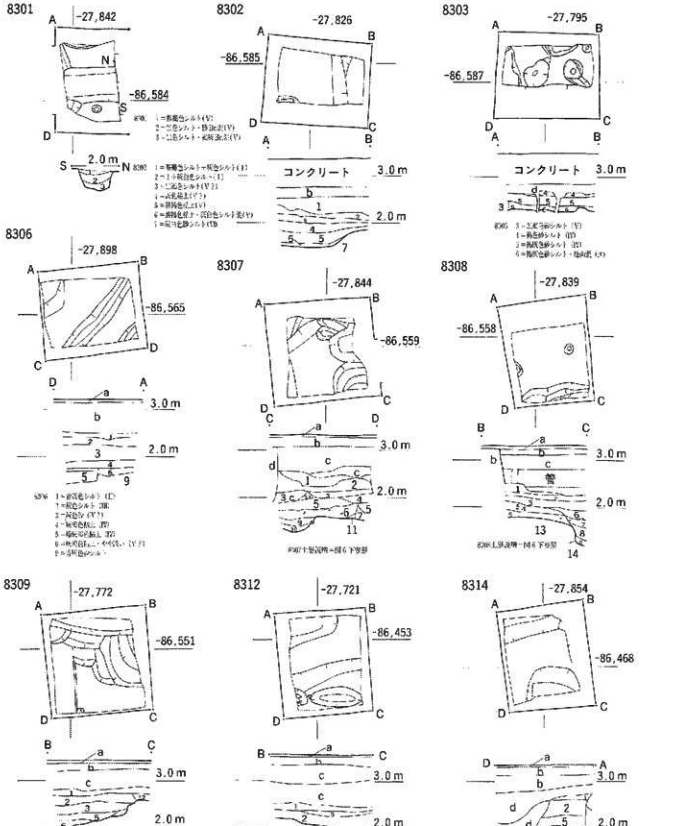


図5 朝日遺跡第8次発掘調査主要Gr.図(1)

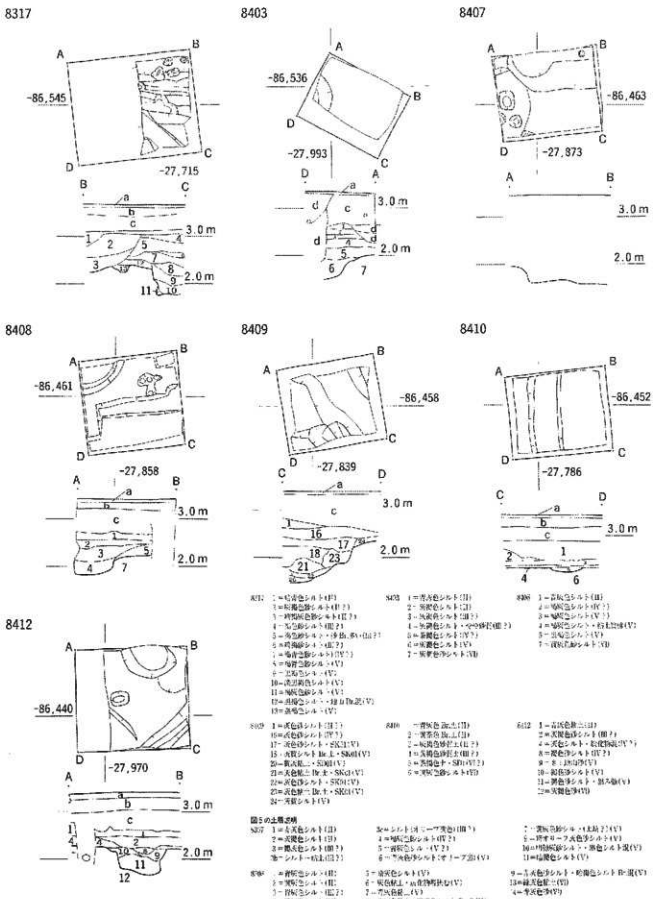


図6　朝日遺跡第8次発掘調査主要Gr.図(2)

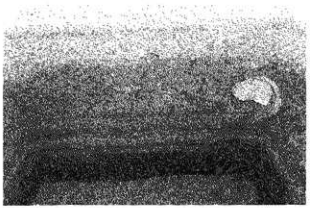


写真4 7314（北から）

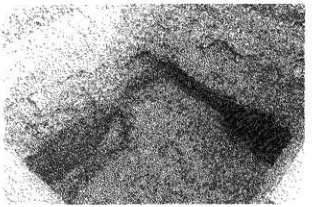


写真5 7405（北西から）

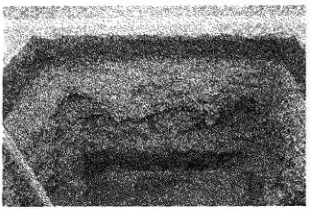


写真6 7410（北から）

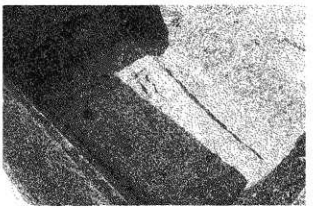


写真7 7412（南東から）

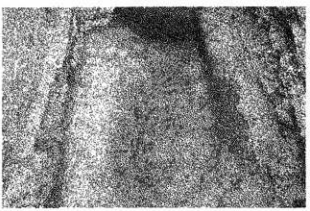


写真8 7413（北東から）

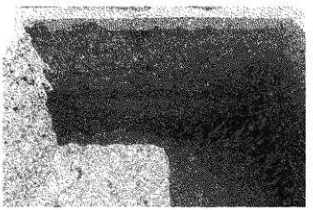


写真9 7414（西から）

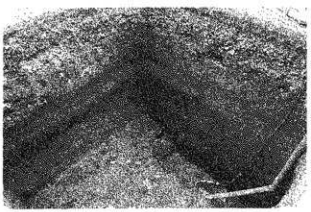


写真10 7415（北東から）

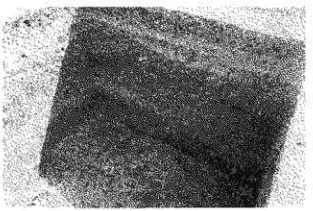


写真11 7416（北西から）

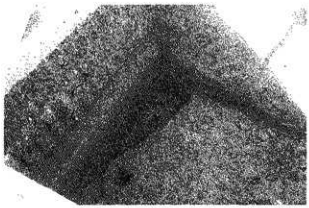


写真12　7417（南東から）

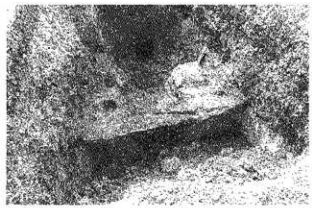


写真13　8301（東から）

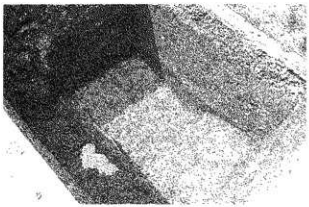


写真14　8302（南東から）

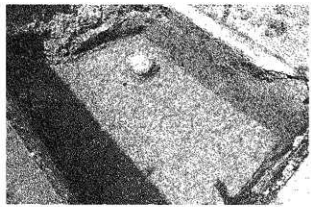


写真15　8303（南東から）

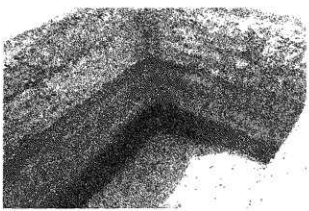


写真16　8306（北東から）

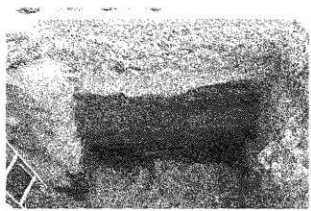


写真17　8307（北から）

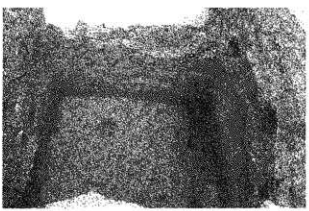


写真18　8308（西から）

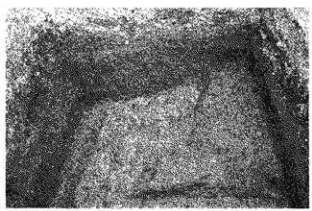


写真19　8309（西から）

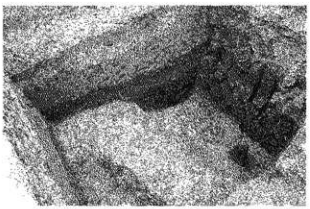


写真20　8312（北西から）

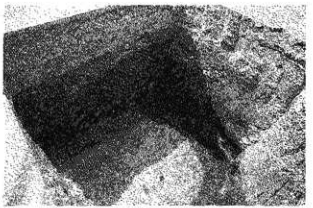


写真21　8314（南東から）

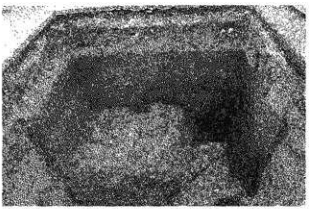


写真22　8317（西から）

写真23　8403（南東から）

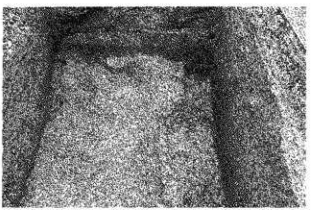


写真24　8407（東から）

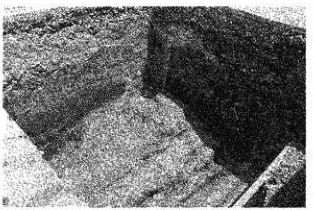


写真25　8408（南西から）

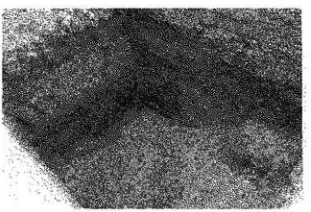


写真26　8409（北西から）

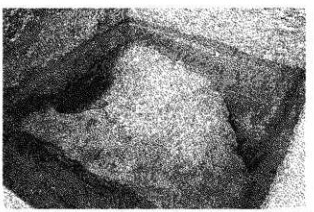


写真27　8412（南西から）

4　遺物

第7次調査出土遺物（図7）

7405(6・15)　6・15ともに、SK1より出土した。6は甕口縁、15は壺口縁。

7412(5・9・11)　5はSK1より、9は表土ちかくの撹乱土より、11はSD1より出土した。9は中世焼締め陶器壺の頸部付近とおもわれる。5は甕口縁、11は壺胴部だろう。

7413(4・10)　4・10ともにSD1より出土。4は甕口縁、10は条痕状の調整の甕。

7414(3・8・13・14)　3・13・14はSK1より出土した。8は調査区東壁面より出土の土器No.1である。3は鉢の口縁、13は壺頸部、14は甕の口縁。

7415(1・7・12)　1は、土器No.1、No.2としてとりあげたのが接合したもの。7・12は暗灰色砂層より出土した。1は欠山期の台付甕。7は甕口縁。12は、廻間Ⅰ式期のS字状口縁台付甕a類の口縁部。

7416(2)　2は、S字状口縁台付甕c類。

第8次調査出土遺物（図8・図9）

8302(1～5)　1・2はSK1上・中層から、3・4はSK1下層からの出土である。5は排土から採集した。1は、高蔵期の甕の口縁である。復元口径約33.6cmをはかる。2は、大地型壺の口縁である。内外面に文様がみられる。3は、壺の底部である。4は深鉢。5は壺の頸部下半。当調査区SK1の遺物相は、

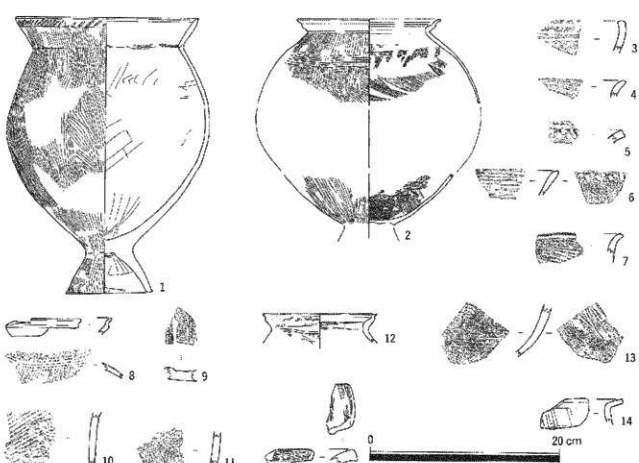


図7　朝日遺跡第7次調査出土遺物

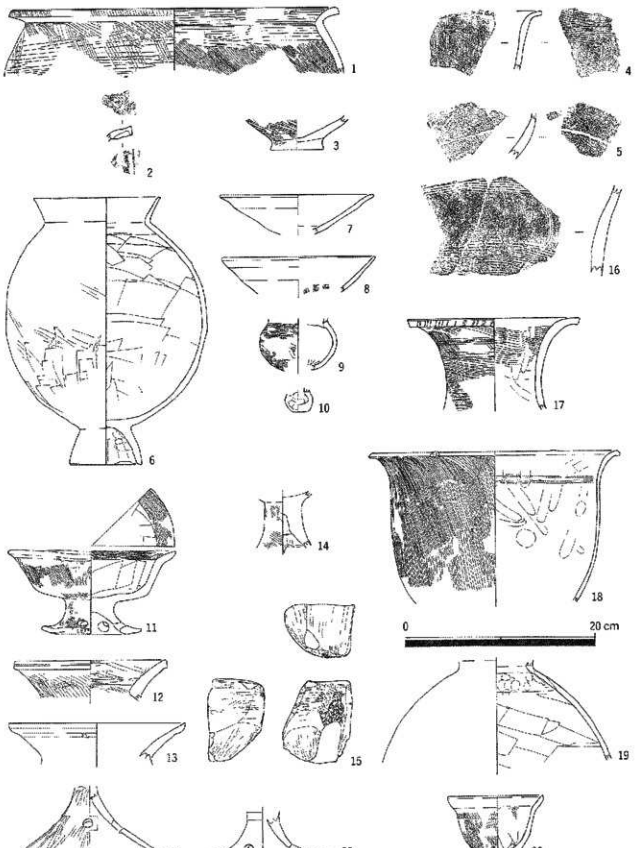


図8　朝日遺跡第8次調査出土遺物(1)

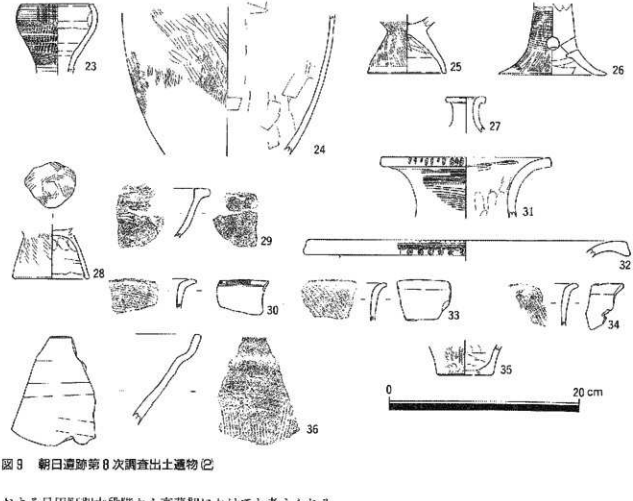


図8　朝日遺跡第8次調査出土遺物(2)

およそ貝田町期古段階から高蔵期にかけてと考えられる。

8303(6～10)　6はSK1上層からの出土、7～10は包含層からの出土である。7・8は、高坏口縁部。9は小型丸底壺。外面はミガキ、内面はナデ調整をほどこしているが、頸部内面に口縁接合痕をのこすなど、ややつくりは粗い。10はミニチュアの壺形土器である。手づくねでつくっており、内外面にユビナデ、ユビオサエの痕跡がある。これらは、5世紀前半代に属するものと考えられる。

8304(11～15)　11～14は黒砂層上面からの出土、11は異形の高坏。全体に器形の歪みがいちじるしく、つくりは粗い。口縁を外方へ緩く屈曲させた内面に、綾杉文状のハケメをほどこしている。外面はハケ調整、坏部内面は板ナデである。脚には5方向に円形透孔が穿く。また、脚端部には、部分的に円形刺突をほどこす。12・13は、壺口縁。14は、高坏脚部。15は、河原石をもちいた砥石。敲き石としても使用したようである。これらの遺物は、山中期から欠山期にかけての時期のものとおもわれる。

8306(16～18)　16・17は下層包含層より、18は5層上方より出土した。16は壺胴部から頸部付近の破片だろう。17は、壺の頸部から口縁部にかけてで、口縁端部に貝殻腹縁による刺突文がほどこされている。18は、甕である。口縁直下のくびれ部の内面に粗いヨコハケがほどこされている。以上の遺物の時期は、貝田町期と考えられる。

8307(19・20)　19は暗青灰色層上層より、20は暗青灰色層下層より出土した。19は壺である。内面は板状工具によりケズリ風のハケをほどこしている。内面の頸部下辺だけは、粘土紐接合痕がのこり、調整はユビオサエである。頸部内面は明瞭な稜をなす。20は、小型の鉢形土器である。19・20ともに、欠山期とおもわれる。

8308(21・22)　21・22は、ともに高坏脚部である。欠山期から元屋敷期とおもわれる。

8312(23)　23は、SK1埋土中位より出土した。いわゆる受口状口縁の細頸壺。内面調整はユビナデ。

8314(24)　24は、SK2から出土した甕胴部である。外面にススの付着が顕著にみとめられる。刷毛目状の調整痕があるが、時期は不詳である。

8317(25～27)　25・26は、SD2・SD3から出土。27は、調査区上層から出土した。25は、台付甕の台部。26は、高坏脚部。山中期だろう。27は、近世以降の灰釉徳利。

8405(28)　28は、台付甕台部。底部の粘土を内面へ押しこむ点や、重さがきわめて軽いといった特徴から、S字状口縁台付甕とおもわれる。

8406(29・30)　29・30ともに包含層より出土。いづれも甕口縁である。

8412(31～35)　31・35は、ピット4から出土。32はSK1上面より、33はSK4より、34は遺構検出面より出土した。31・32は壺口縁。33・34は甕口縁。35は小型の鉢形土器底部。

8413(36)　36は、近世前半ごろの鉄釉すり鉢。

中沼町試掘地点出土遺物（図10）

名古屋市教育委員会文化財保護室が、2000年6月1日、住宅建設予定地（西区中沼町＝p.4図2参照）でおこなった試掘調査の出土品である。

1は、受口状口縁壺の頸部から口縁である。外面は口唇部をナデ、そのほかはハケ調整である。頸部に櫛描きの沈線文がほどこされている。内面は口縁ちかくにハケ、ほかをナデ調整とする。2も、受口状口縁壺の胴部とおもわれる。外面に櫛描きの沈線文がほどこされている。1、2は直接的な接合関係はなく、同一個体ではないとおもわれる。ほかに、弥生土器片が多数出土している。いづれも、貝田町期新～高蔵期とおもわれる。

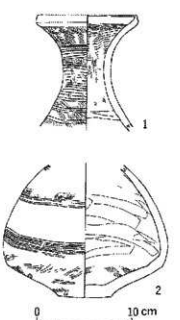
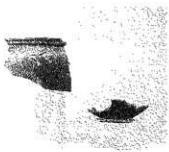


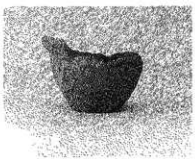
図10　中沼町試掘地点出土遺物



(図7-2)

(図7-12)

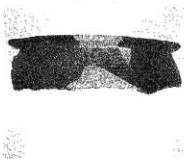
(図9-23)



(図8-20)

(図8-9)

(図8-10)



(図8-1)

(図8-18)

(図8-17)

(図9-33・34)

(図8-2)

(図8-11)

(図9-26)

(図8-21)

(図8-14・22、図9-25・28)

写真28　明日遺跡第7・8次調査出土遺物

5 小結

7・8次調査は、朝日遺跡東縁部に多数の試掘グリッドを設定した形となった。既に水場川以東の3・4次調査[註1]によって、国道302号線以南には遺構が希薄で、通常でいう遺跡範囲には含まれない様相が把握されている(4次)。一方、国道302号線以北では、水場川を越えて墓域が展開するものと推定されている(3次)。これらは、302号線建設に伴う、愛知県教育委員会等による調査成果や、遺物分布による現況の範囲推定ともほぼ一致している。名古屋市教育委員会の一連の調査による新たな成果としては、調査データの多い国道22号線・国道302号線の路線からはずれた地域の遺跡の広がりを、かなり明確にした点が挙げられよう。そして、これと同時に新たな課題も提示された。図11をもとに、以下略述する。

7314の自然科学分析の結果は、この付近に弥生時代の水田が存在した可能性を示した。各地点の調査規模が小さく、面的調査が十分だったとは言えないため、水田遺構の有無は不明である。今後、水田の確認を目的とした調査方法の導入が、検討されるべきであろう。7次調査範囲のかなりの部分に認められた黒色土が、弥生時代の水田に関わるものであったのか、結論の出る日が待ち望まれる。水田遺構が確認され、遺跡範囲が少なくとも南東方向へ広がる場合は、現時点では別遺跡として捉えるべき様相の第10次調査地点付近の評価も、再考することになるであろう。

南北2条の旧河道の位置は、従来の推定を基本的に確認したものと言える。図11に、7・8次調査のみに基づく推定ラインを破線で示した。幅や条数については、仮の表現である。また、従来の推定河道について、把握できなかった部分は多い。例えば8次調査の8405と8306の間には、愛知県埋蔵文化財センター等の調査[註2]によって、中期中葉以降の河道が北東～南西方向に存在するはずであるが、今回の調査ではこの河道に関する情報は得られなかった。この河道は、破線で示した河道から分流したものか、平行していたものか、現状では不明である。検出した河道は、いずれも弥生時代後期末頃に、洪水性の堆積によって埋没したと考えられる。埋没時期の想定は、従来の調査成果から示された時期と、おおむね共通する。

8次調査範囲では、旧河道をはさんで北側では、弥生時代中期の遺構がかなり密に展開する。河道以南では、中期～後期の遺構が混在する点で、河道以北とはやや様相を異にする。旧河道以北の様相は、遺跡の北東部に、中期の墓域を推定させるものである。こうした遺構の展開が、北および東方への程度の広がりを見せるのか、今後把握されるべき点である。

7次調査範囲では、従来「谷B」として知られる河道の続きを検出した。北西から南下した河道は、かなり急なカーブを描いて南西方向へ向かうものと推定された。これは、平成10年度の愛知県埋蔵文化財センター調査によって推定[註3]された位置にあたり、この河道が南居住区南東の墓域を取り巻くものと考えられる。当然、河道が推定ラインに示した単純な1条では無く、7次調査区のグリッド間をぬって分流していた可能性も考えられる。7次調査範囲の北西隅に限定された弥生時代中期遺構の分布は、東墓域の南縁付近を示すものと考えられるが、河道等の自然地形による区画は伴わないようである。

広範囲に渡る「試掘」の成果が、今後に活かされることを期待して、不十分ながらまとめとする。

註1 名古屋市教育委員会 1999『朝日遺跡第3・4次発掘調査報告書』

註2 愛知県埋蔵文化財センター 2000『朝日遺跡VI—新資料絵地点の調査—』

註3 愛知県埋蔵文化財センター 1999『年報 平成10年度』

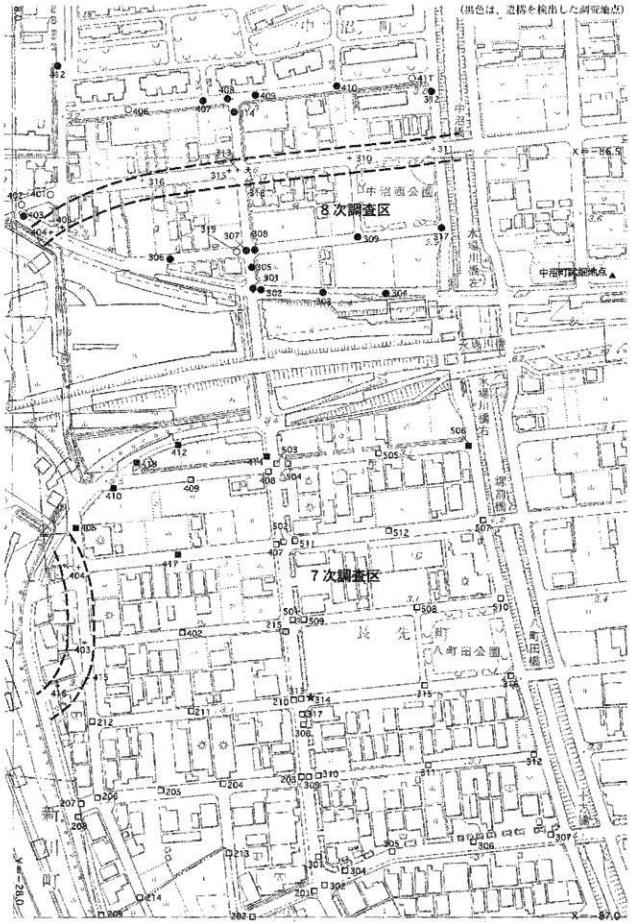


図11　遺構分布と旧河道の推定

II　朝日遺跡自然科学分析

付記

○本編は、平成12年度の朝日遺跡第8次発掘調査に伴い、株式会社パレオ・ラボに業務委託した「朝日遺跡第8次発掘調査に伴う土壌分析業務委託」の成果報告書である。
○分析にあたって、6～8次調査でサンプリングした試料を吟味の上、対象試料を決定した。試料の状態等から、対象試料は6・7次調査時に採取したものを用いた。
○本編の記述のうち、考古学的評価および年代観については、本編以外の記述が優先する。
○本編の記述のうち、調査地点・遺構等の名称は、調査時のままである。本編中の記載は、以下のように読み替えるものとする。
SK-1（土坑）　→　6次SK-1（土坑）
3P14　→　7314（7次314Gr.）
4P10　→　7410（7次410Gr.）
4P13　→　7413（7次413Gr.）

もくじ

朝日遺跡の花粉化石群集 …… 26
朝日遺跡から出土した大型植物化石 … 33
朝日遺跡のプラント・オパール…… 37

朝日遺跡の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

1．はじめに

朝日遺跡は、愛知県清洲町、春日町、新川町、名古屋市西区に所在する弥生時代の集落遺跡である。ここでは、方形周溝墓（弥生時代中期）の溝埋土、土坑（弥生時代中期～後期初め）埋土、遺構外堆積物などの花粉化石群集を検討し、遺跡周辺の古植生や栽培状況の推定を試みた。

2．試料

花粉化石群集の検討は、SK-1（土坑）、3P14（遺構外堆積物）、4P10（土坑？）および4P13（方形周溝墓）から採取された合計10試料について行った（表1）。これら10試料は、大型植物化石の検討も行われ、一部の試料を除きプラント・オパール分析も行われた。試料番号（名）は、それぞれ対応している。以下に、各試料の記載を簡単に示す。

（Po：花粉、Se：大型植物化石、P1：プラント・オパール、○印：分析を行った試料）

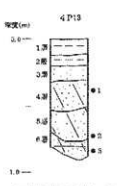
遺構・地点名	層位名	試料番号	Po	Se	P1	時代
SK－1（土坑）			○	○	○	弥生時代中期～後期初め
3P14（溝構外）	5層	1	○	○	○	中・近世？
	7層	2	○	○	○	古墳時代以前？
	9層	3	○	○	○	弥生時代中期
	10層	4	○	○		弥生時代中期
	11層	5	○	○		弥生時代中期以前
4P10（土坑？）	1層		○	○	○	弥生時代
4P13（方形周溝墓）	4層	1	○	○		弥生時代中期
	5層	2	○	○		
	6層	3	○	○	○	

表1　分析試料一覧

SK-1（土坑、1試料）：試料が採取されたのは、6次調査の2区で検出されたSK-1（土坑）埋土である。試料は黒褐色粘土であり、時代は弥生時代中期ないし弥生時代後期初めと考えられている。

3P14（遺構外堆積物、5試料）：試料が採取されたのは、7次調査の3P14地点の遺構外堆積物である。試料1（5層）は黄灰色シルト～粘土で時代は中・近世？。試料2（7層）は褐灰色～黒褐色粘土で砂をごく僅か含み、植物遺体を含む。時代は古墳以前？。試料3（9層）は黒褐色～黒色粘土で砂、植物遺体を少し含み、時代は弥生時代中期。試料4（10層）は灰色粘土。試料5（11層）は青灰色砂質シルト～粘土質砂で褐鉄鉱が発達し、植物遺体を少し含む。

4P10（土坑？、1試料）：試料が採取されたのは、7次調査の4P10地点で検出された土坑？埋土である。本地点は、5層に層位区分され、1、2層が土



第1図　4P13（方形周溝墓）の地質柱状図と試料採取層準

坑?、3層は自然堆積?と考えられている。試料は、1層より採取され、褐色砂質粘土～砂質シルトで砂を多く含み、植物遺体を含む。時代は弥生時代と考えられている。

4P13(方形周溝墓、3試料):試料が採取されたのは、7次調査の4P13地点で検出された方形周溝墓の溝(SD1)埋土である(図1)。試料1(4層)は黒褐色砂、試料2(5層)は黒褐色砂、試料3(6層)は黒褐色砂～粘土質砂であり、時代はいずれも弥生時代中期と考えられている。

3．方法

花粉化石の抽出は、試料約2～4gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に撹拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート1～4枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

4．花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉37、草本花粉24、形態分類を含むシダ植物胞子3である。以下に、各地点(遺構)ごとに花粉化石群集の記載を示す。

SK-1(土坑):産出した花粉化石は非常に少ない。樹木花粉は全く産出せず、草本花粉のイネ科、クワ科、アカザ科―ヒユ科、アブラナ科が僅かに産出した。

3P14(遺構外堆積物):14(遺構外堆積物)の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率により、下位より4つの花粉化石群集帯を設定することができる(I～IV帯)。I帯(試料5)は、樹木花粉の占める割合は、約70%と比較的高率である。その中で、アカガシ亜属が約40%で最優占し、次いでブナ属、コナラ亜属、シイノキ属が約10%で出現する。他に、マツ属複維管束亜属、クマシデ属―アサダ属、ニレ属―ケヤキ属が約4～5%で出現する。一方、草本花粉は分類群数が少なく、イネ科が約11%、ヨモギ属が約5%、カヤツリグサ科が約2%、マメ科、他のキク亜科、タンポポ亜科が1%未満で出現する。II帯(試料4)は、十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分帯図として示すことができなかった。樹木花粉のクマシデ属―アサダ属、カバノキ属、草本花粉のイネ科のみが僅かに産出した。III帯(試料2、3)は、樹木花粉の占める割合は、約34～38%で低率である。その中で、アカガシ亜属が約19～25%で最優占するが、I帯に比べて減少する。次いで、コナラ亜属が約18～19%で出現し、上部ではアカガシ亜属と共に最優占する。他に、スギ属(約12～13%)、イチイ科イヌガヤ科―ヒノキ科(約3～10%)、エノキ属―ムクノキ属(約5～6%)が増加して比較的高率となり、シイノキ属(約7～11%)も引き続き比較的高率である。また、1%未満の低率ではあるが、ヤマモモ属、ユズリハ属も特徴的に随伴する。一方、草本花粉では、

和名	学名	3P14					4P13		
		SE-1	1	2	3	4	5	4P10	1	2	3
裸本											
マキ属	*Podocarpus*	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
モミ属	*Abies*	–	–	2	3	–	1	–	–	–	–
ツガ属	*Tsuga*	–	6	1	2	–	3	–	–	–	–
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	–	1	11	10	–	9	5	–	–	–
マツ属（不詳）	*Pinus* (Unknown)	–	1	1	5	–	2	–	–	2	1
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	–	11	3	6	–	2	10	–	–	–
スギ属	*Cryptomeria*	–	3	39	26	–	6	10	–	1	–
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	T.-C.	–	–	21	7	–	2	1	–	–	–
ヤナギ属	*Salix*	–	–	–	–	–	1	1	1	–	–
ヤマモモ属	*Myrica*	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–
クルミ属	*Juglans*	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
サワグルミ属ークルミ属	*Pterocarya-Juglans*	–	1	–	–	–	5	–	–	–	–
クマシデ属ーアサダ属	*Carpinus - Ostrya*	–	11	3	6	1	9	7	–	–	–
ハシバミ属	*Corylus*	–	1	–	–	–	1	–	–	–	–
カバノキ属	*Betula*	–	5	1	3	1	5	1	–	–	–
ハンノキ属	*Alnus*	–	15	2	3	–	4	1	–	–	–
ブナ属	*Fagus*	–	–	11	4	–	21	1	–	–	–
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	–	20	41	39	–	21	31	5	2	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	–	15	41	54	–	86	12	–	2	1
クリ属	*Castanea*	–	1	5	–	–	3	7	–	–	–
シイノキ属	*Castanopsis*	–	2	18	24	–	21	4	2	–	1
ニレ属ーケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	–	1	13	4	–	11	2	–	–	–
エノキ属ームクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	–	–	12	10	–	2	3	–	–	–
キハダ属	*Phellodendron*	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–
アカメガシワ属	*Mallotus*	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ウルシ属	*Rhus*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
モチノキ属	*Ilex*	–	1	–	–	–	1	–	–	–	–
カエデ属	*Acer*	–	4	–	–	–	–	1	–	–	–
トチノキ属	*Aesculus*	–	2	–	3	–	–	2	–	–	–
ブドウ属	*Vitis*	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
ツタ属	*Parthenocissus*	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
マタタビ属	*Actinidia*	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ヒサカキ属近似種	cf. *Eurya*	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
ウコギ科	Araliaceae	–	–	–	1	–	–	4	–	–	–
トネリコ属	*Fraxinus*	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ガマズミ属	*Viburnum*	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
草本											
ガマ属	*Typha*	–	–	1	6	–	1	–	–	–	–
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	–	–	9	–	–	–	–	–	–	–
サジオモダカ属	*Alisma*	–	–	2	1	–	–	–	–	–	–
オモダカ属	*Sagittaria*	–	–	9	18	–	–	–	–	–	–
クワモ	*Hydrilla verticillata* Royle.	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
イネ科	Gramineae	1	22	198	116	1	35	43	12	8	9
カヤツリグサ科	Cyperaceae	–	5	69	26	–	7	4	–	–	–
イボクサ属	*Aneilema*	–	–	1	3	–	–	–	–	–	–
ミズアオイ属	*Monochoria*	–	–	6	3	–	–	–	–	–	–
クワ科	Moraceae	1	–	5	–	–	–	2	–	1	–
サナエタデ節ーウナギツカミ節	*Polygonum* sect. *Persicaria-Echinocaulon*	–	15	–	6	–	–	–	–	–	–
他のタデ科	other Polygonum	–	1	–	–	–	–	1	–	–	–
アカザ科ーヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	6	1	1	–	–	–	6	–	–	–
カラマツソウ属	*Thalictrum*	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–
アブラナ科	Cruciferae	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–
バラ科	Rosaceae	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ノアズキ属	*Dumbaria*	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
他のマメ科	other Leguminosae	–	–	1	1	–	1	–	–	–	–
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
セリ科	Umbelliferae	–	1	5	3	–	–	1	–	1	1
ゴキヅル属	*Actinostemma*	–	–	6	1	–	–	–	–	–	–
ヨモギ属	*Artemisia*	–	8	14	36	–	17	18	24	52	38
他のキク亜科	other Tubuliflorae	–	1	1	4	–	1	1	5	7	7
タンポポ亜科	Liguliflorae	–	–	–	–	–	1	1	3	–	3
シダ植物											
サンショウモ	*Salvinia natans* All.	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–
単条型胞子	Monolete spore	5	55	15	186	1	27	75	9	3	1
三条型胞子	Trilete spore	–	8	2	2	–	2	9	–	2	–
樹木花粉	Arboreal pollen	0	102	217	313	3	318	110	9	7	4
草本花粉	Nonarboreal pollen	9	58	332	324	1	63	75	45	69	48
シダ植物胞子	Spores	5	63	18	192	1	29	84	9	5	1
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	14	223	567	829	4	310	273	63	81	53
不明花粉	Unknown pollen	0	11	15	6	2	6	23	5	10	6

表2　花粉化石一覧表

イネ科（約18～35%）、カヤツリグサ科（約5～12%）が増加し、特に上部試料で高率となる。他に、水生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモや湿地性草本のイボクサ属、ゴキヅル属が1%未満～3%程度で特徴的に随伴し、上部の試料2では、流水中などに生育するヒルムシロ属、クロモも出現する。IV帯（試料1）は、樹木花粉の占める割合は、約46%でやや低率である。その中で、コナラ亜属が約20%で最優占し、次いでハンノキ属（約15%）、アカガシ亜属（約15%）、コウヤマキ属（約11%）、クマシデ属―アサダ属（約11%）が出現する。コウヤマキ属、クマシデ属―アサダ属、ハンノキ属が増加する一方、下位帯で比較的高率であったスギ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、シイノキ属、エノキ属―ムクノキ属は、大幅に減少するか全く出現しなくなる。他に、ツガ属（約6%）、カエデ属（約4%）などがやや目立つ。一方、草本花粉では、分類群数が大幅に減少し、高率であったイネ科（約10%）、カヤツリグサ科（約2%）は大幅に減少する。他に、サナエタデ節―ウナギツカミ節（約9%）、ヨモギ属（約4%）などが出現し、サナエタデ節―ウナギツカミ節はやや突出する。

4P10（土坑？）：樹木花粉の占める割合は、約40%とやや低率である。その中で、コナラ亜属が約28%で最優占し、次いでアカガシ亜属（約11%）、コウヤマキ属（約9%）、スギ属（約9%）、クマシデ属―アサダ属（約6%）、クリ属（約6%）が出現する。一方、草本花粉では、イネ科（約16%）、ヨモギ属（約7%）が比較的高率であり、カヤツリグサ科、アカザ科―ヒユ科、カラマツソウ属などが1%未満～2%程度で出現する。

4P13（方形周溝墓）：十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。樹木花粉では、コナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属などが僅かに産出し、草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が比較的多産した。

5．考察

[弥生時代中期以前の古植生（3P14・1帯）]

遺跡周辺では、アカガシ亜属を主体にシイノキ属などをまじえた照葉樹林が優勢であったと予想される。この時期の3P14地点付近は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが茂っていたと思われる。

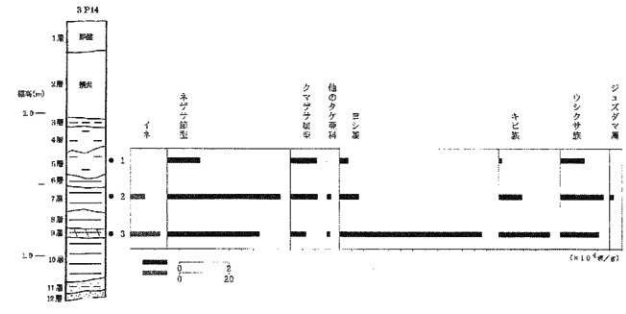
[弥生時代中期～古墳時代以前の古植生（SK-1、3P14・II帯、4P10、4P13）]

引き続き、照葉樹林は優勢であったが、幾分林分を縮小したと予想され、コナラ亜属を主体にニレ属―ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属などをまじえた落葉広葉樹林も優勢であったと思われる。また、針葉樹のスギ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科も主要な構成要素であっただろう。3P14のII帯の組成からは、このように予想されるが、同時期と考えられる4P10の組成からは、コナラ亜属を主体にクマシデ属―アサダ属をまじえた落葉広葉樹林が優勢でコウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属を主要な構成要素とした森林が予想される。このような違いは、地点による局地的な植生の違いを示す可能性も考えられるが、4P10は樹木花粉数が非常に少なく（プレパラート4枚で樹木花粉数110個）、組成がやや歪んでいるためではないかと思われる。この時期の3P14地点付近では、イネ科が比較的高率であり、いわゆる水田雑草のサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモなどが随伴する組成から、水田稲作が行われていた可能性が考えられる。このことは、プラント・オパール分析の結果でも示されており、3P14地点付近は水田であった可能性が高いと考えられる。4P10（土坑？）地点付近は、イネ科、ヨモギ属を主体とした草本類が茂っていたと思われる。4P13（方形周溝墓）地点付近は、十分な花粉化石が産出しなかったが、

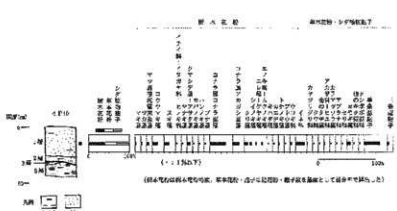
イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などが茂っていたと思われ、イネ科についてはプラント・オパール分析の結果から、ネザサ節型のササ類が主体であったと思われる。なお、花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、十分な花粉化石が産出しないことから、試料とした堆積物は水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。従って、この周溝は、常時湛水した環境ではなかったことが予想される。試料とした堆積物は、黒色土であり、十分な花粉化石が保存されていなかったことから、土壌と考えられ、おそらく周辺部に発達した土壌が堆積したのであろう。

[中・近世？の古植生（3P14・IV帯）]

コナラ亜属を主体にクマシデ属ーアサダ属などをまじえた落葉広葉樹林が優勢であったと予想される。また、コウヤマキ属、アカガシ亜属も主要な構成要素であり、低地部ではハンノキ属からなる林分もみられたであろう。この時期は、照葉樹林は更に林分を縮小したと思われ、また、スギ属、イチイ科 イヌガヤ科ーヒノキ科も大幅に林分を縮小したと思われる。弥生時代中期～古墳時代以前に3P14地点付近に存在していたと予想される水田は、この時期にはみられなくなり、イネ科、サナエタデ節 ウナギツカミ節、ヨモギ属などが茂る草地的景観になったことが予想される。



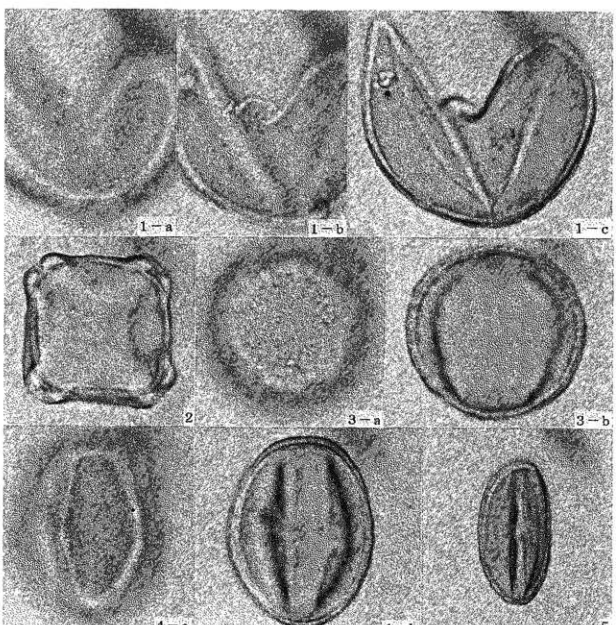
第2図　7次調査4P13地点のプラント・オパール分布図



第3図　4P10（土坑？）の花粉化石分布図

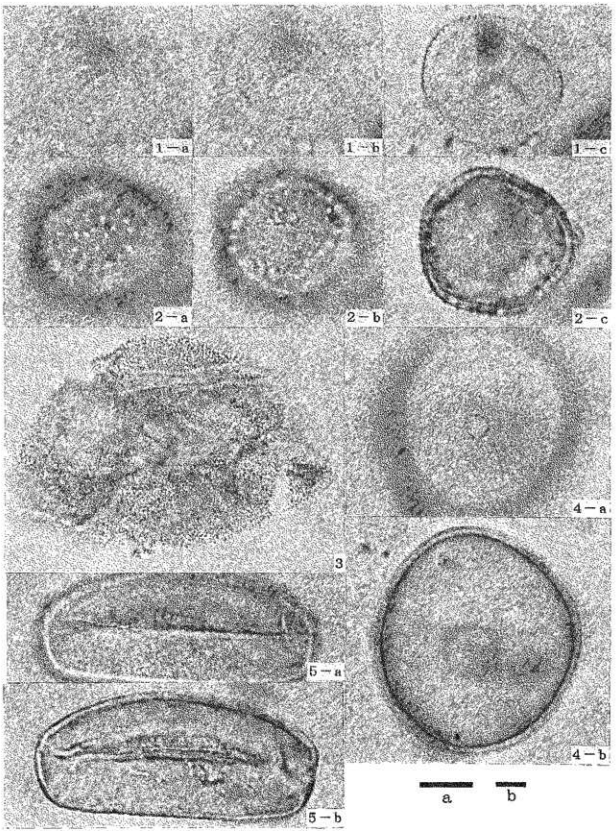
参考文献

名古屋市教育委員会（2000）下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（朝日遺跡5次・6次、名古屋城三の丸遺跡11次），26p.



図版Ⅰ　産出した花粉化石（scale bar：10μm）

1．スギ属，3P14-2，PAL. MN 1448
2．ハンノキ属，3P14-3，PAL. MN 1452
3．コナラ属コナラ亜属，3P14-2，PAL. MN 1456
4．コナラ属アカガシ亜属，3P14-3，PAL. MN 1453
5．シイノキ属，3P14-3，PAL. MN 1455



図版2　産出した花粉化石 (scale bar : 10μm　a : 1, 2, 4, 5　b : 3)

1．ヒルムシロ属、3P14-2、PAL. MN 1449
2．オモダカ属、3P14-3、PAL. MN 1454
3．クロモ、3P14-2、PAL. MN 1447
4．イネ科、3P14-2、PAL. MN 1450
5．ミズアオイ属、3P14-2、PAL. MN 1451

朝日遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

1．はじめに

朝日遺跡は、愛知県清洲町、春日町、新川町、名古屋市西区に所在する弥生時代の集落遺跡である。ここでは、方形周溝墓（弥生時代中期）の溝埋土、土坑（弥生時代中期～後期初め）埋土、遺構外堆積物などの大型植物化石を検討し、遺跡周辺の古植生や栽培状況の推定を試みた。

2．試料

大型植物化石の検討は、SK-1（土坑）、3P14（遺構外堆積物）、4P10（土坑？）および4P13（方形周溝墓）から採取された合計10試料について行った。これら10試料は、花粉化石群集の検討も行われ、一部の試料を除きプラント・オパール分析も行われた。試料番号（名）は、それぞれ対応している。以下に、各試料の記載を簡単に示す。

SK-1（土坑、1試料）：試料が採取されたのは、6次調査の2区で検出されたSK-1（土坑）埋土である。試料は黒褐色粘土であり、時代は弥生時代中期ないし弥生時代後期初めと考えられている。

3P14（遺構外堆積物、5試料）：試料が採取されたのは、7次調査の3P14地点の遺構外堆積物である。試料1（5層）は黄灰色シルト～粘土で時代は中・近世？。試料2（7層）は褐灰色～黒褐色粘土で砂をごく僅か含み、植物遺体を含む。時代は古墳以前？。試料3（9層）は黒褐色～黒色粘土で砂、植物遺体を少し含み、時代は弥生時代中期。試料4（10層）は灰色粘土。試料5（11層）は青灰色砂質シルト～粘土質砂で褐鉄鉱が発達し、植物遺体を少し含む。

4P10（土坑？、1試料）：試料が採取されたのは、7次調査の4P10地点で検出された土坑？埋土である。本地点は、5層に層位区分され、1、2層が土坑？、3層は自然堆積？と考えられている。試料は、1層より採取され、褐色砂質粘土～砂質シルトで砂を多く含み、植物遺体を含む。時代は弥生時代と考えられている。

4P13（方形周溝墓、3試料）：試料が採取されたのは、7次調査の4P13地点で検出された方形周溝墓の溝（SD1）埋土である。試料1（4層）は黒褐色砂、試料2（5層）は黒褐色砂、試料3（6層）は黒褐色砂～粘土質砂であり、時代はいずれも弥生時代中期と考えられている。

3．方法

大型植物化石の採集は、堆積物試料の洗い出しにより行った。洗い出しの方法は、0.25 mm 目の篩を用いて約 100～220 cc の堆積物試料を水洗篩い分けしたが、SK-1 試料については、3 mm 目の篩を用いて数リットルの堆積物試料の洗い出しも行った。大型植物化石は、残渣から肉眼および実体顕微鏡下で採集を行った。

4．出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を表1に示した。3P14-2は、分類数・個数共に豊富であり、3P14-3は

数次は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

分類群名	部位	SK-1	3P14					4P10	4P13		
			1	2	3	4	5		1	2	3
アカメガシワ	種子							1			
ヒルムシロ属	種子			3							
イトトリゲモ	種子			4							
サガミトリゲモ	種子			7(1)							
オオトリゲモ近似種	種子			2							
ヘラオモダカ	果実			1							
オモダカ属	果実			1							
オモダカ科	種子			2							
イネ	炭化胚乳	4(1)									
スゲ属A	果実			2							
スゲ属B	果実			1							
スゲ属C	果実			1							
カヤツリグサ属	果実			1							
ウキヤガラ	果実			2							
ホタルイ属A	果実			11(1)			1				
ホタルイ属B	果実			4							
ハリイ属	果実			1							
イボクサ	種子			1							
コナギ	種子			45	52						
ミズユキノシタ	種子			1							

表1　大型植物化石一覧表

コナギのみが多産した。その他は、SK-1、3P14-5、4P10から1分類群ずつ僅かに出土したが、それ以外の試料は全く出土しなかった。

5．考察

古墳時代以前？の3P14-2（7層）から出土した大型植物化石は、分類群数・個数共に豊富であった。出土したのは全て草本であったが、その組成は、水生植物ないし低湿地の雑草と考えられる分類群で大半が占められる。すなわち、ヒルムシロ属、イトトリゲモ、サガミトリゲモ、オオトリゲモ近似種、ヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、ウキヤガラ、ホタルイ属A、ホタルイ属B、ハリイ属、イボクサ、コナギ、ミズユキノシタといった分類群であるが、ヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、コナギなどは、現在の水田において普通にみられるいわゆる水田雑草である。このことから、3P14地点付近に水田が存在していた可能性があり、花粉分析、プラント・オパール分析の結果も合わせて考えると、その可能性は非常に高いと考えられる。また、弥生時代中期の3P14-3（9層）についてもコナギが多産しており、花粉分析、プラント・オパール分析の結果も合わせて考えると水田の存在が予想される。弥生時代中期ないし弥生時代後期初めのSK-1（土坑）からは、イネ炭化胚乳が出土しているが、生活の場で投棄されたものが流入したか、土坑周辺に直接投棄されたのであろう。

6．主な大型植物化石の形態記載

イトトリゲモ　Najas japonica Nakai　種子

側面観は針形、上面観は円形。表面には非常に縦長の細胞が認められる。長さ約1.7～2.0 mm、幅約0.2～0.3 mm。

サガミトリゲモ　Najas indica (Willd.) Cham.　種子

側面観は長楕円形、上面観は円形。表面にはほぼ正方形の細胞が認められる。長さ約2.3～2.9 mm、幅約0.5～0.6 mm。

オオトリゲモ近似種　Najas cf. oguraensis Miki　種子

側面観は針形ないし長楕円形、上面観は円形。表面には横長の細胞が認められる。長さ約2.8～3.0 mm、幅約0.3～0.4 mm。

ヘラオモダカ　Alisma canaliculatum A. Br. et Bouch　果実

側面観は歪んだ倒卵形、上面観は狭い扇型。背軸側に深い溝が1本ある。

オモダカ科　Alismataceae　種子

歪んだ逆U字形。オモダカ科の種子はいずれもこのような形態であり、識別はできない。

スゲ属　Carex　果実

スゲ属Aは淡褐色、三稜形で倒卵形、長さ約2.2～2.3 mm、幅約1.3 mm。スゲ属Bは濃い褐色、三稜形で細長い楕円形、長さ約1.4 mm、幅約0.8 mm。スゲ属Cは濃い褐色、三稜形で横幅のある楕円形～卵形、長さ約1.3 mm、幅約1.0 mm。

カヤツリグサ属　Cyperus　果実

黒色の三稜形。長さ約1.2 mm、幅約0.3 mm。

ホタルイ属　Scirpus　果実

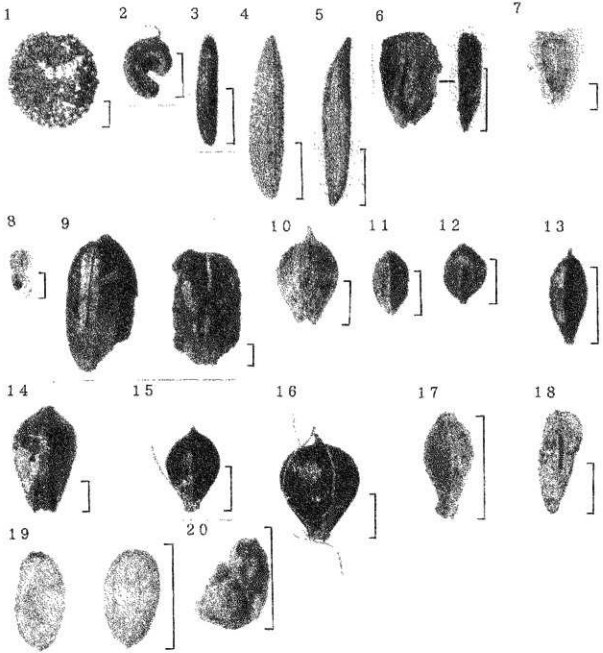
ホタルイ属Aは倒卵形で長さ約1.6～2.2 mm、幅約1.1～1.4 mm。ホタルイ属Bは広倒卵形で長さ約1.8～2.2 mm、幅約1.3～1.5 mm。

コナギ　Monochoria vaginalis (Brum. fil.) Presl　種子

側面観は楕円形、上面観は円形。長さ約0.7～1.0 mm。

参考文献

名古屋市教育委員会（2000）下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（朝日遺跡5次・6次、名古屋城三の丸遺跡11次），26 p.



図版1　出土した大型植物化石（スケールは1mm）

1．アカメガシワ、種子　2．ヒルムシロ属、種子　3．イトトリゲモ、種子　4．サガミトリゲモ、種子　5．オオトリゲモ近似種、種子　6．ヘラオモダカ、種子　7．オモダカ属、果実　8．オモダカ科、種子　9．イネ、炭化穎乳　10．スゲ属A、果実　11．スゲ属B、果実　12．スゲ属C、果実　13．カヤツリグサ属、果実　14．ウキヤガラ、果実　15．ホタルイ属A、果実　16．ホタルイ属B、果実　17．ハリイ属、果実　18．イボクサ、種子　19．コナギ、種子　20．ミズユキノシタ、種子（1は4P10、9はSK-1、その他は3P14-2）

朝日遺跡のプラント・オパール

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収し、葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。そうして形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）が土粒子となったものをプラント・オパールと言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原　1984）。朝日遺跡においても稲作の検討を中心にプラント・オパール分析を行い、合わせて上坑内？におけるイネの有無や遺跨周辺のイネ科植物についても検討した。

1．試料と分析方法

分析用試料は、流路堆土のSK-1（弥生時代中期か後期初）、4P10（弥生時代土坑の堆土？1層）、4P13（弥生時代の方形周溝墓）の最下部6層（試料No.3）、および遺構外地点3P14の3試料（試料No.1：3P14-6：中・近世？、No.2：古墳時代以前？、No.3：弥生時代中期）の総計6試料である。各試料について、SK-1は炭片が点在する黒灰色粘土質シルト、4P10は灰褐色のシルト質砂、4P13（No.3）は黒灰色粘土混じり砂である。また遺構外地点3P14の試料No.1（3P14-6：5層）は炭片が点在する灰オリーブ色のシルト、No.2（3P14-11：7層）は黒褐色粘土、No.3（3P14-16：9層）はヒゲ根？が多く含まれる褐色を帯びた黒色粘土である。なお、これら各地点の詳細については花粉分析の節を参照して頂きたい。プラント・オパール分析はこれら6試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

2．分析結果

同定・計数された各種物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表1）、それらの分布を図1、図2に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、4P13と3P14のNo.1の2試料を除く4試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、SK-1や4P10では3,000弱であるが、3P14の下2試料では多く、特にNo.3では約120,000個と多産している。

イネ以外ではネザサ節型が多く、特にイネが3,000個弱得られた2試料（SK-1、4P10）では300,000個を越えている。クマザサ属型は4P13や3P14のNo.3を除き10,000～20,000個ほどをかし、ウシクサ族は全試料10,000～20,000個を示している。その他、ヨシ属やキビ族が得られており、これらは3P14の

No. 3で多産している。

3．稲作について

上記したように、6試料のうち4試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安について示すと、福岡市の板付北遺跡ではイネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。遺構外の4P13地点ではNo. 2，3においてこれをはるかに超えるイネが検出されており、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。一方、No. 1ではイネは得られず、この時期には稲作は行われなくなったと推測される。本地点の花粉分析結果をみると、イネのプラント・オパールが検出されたNo. 2，3においてはイネ科の多産とともに水田雑草とみられるサジオモダカ属，オモダカ属，ミズアオイ属が検出されており、この稲作は水田稲作と考えられる。またNo. 3においてはヨシ属が多産していることから、ヨシやツルヨシなどのヨシ属が大群落を形成していた湿地的な所を切り開き、水田稲作を営むようになったとみられる。なおこのNo. 3においてはキビ族も多産しているが、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。しかしながら、多産は稲作にともなうものであることから、タイヌビエなどの水田雑草に由来するものである可能性が高いと考える。

以上のように、朝日遺跡では弥生時代中期（No. 3）には水田稲作が行われており、この稲作は7層堆積期（No. 2：古墳時代以前？）においても行われていた。しかしながら中・近世？の頃（No. 1）には稲作は行われなくなった。

一方、遺構部においてもSK-1（流路埋土）や4P10から多くはないがイネのプラント・オパールが検出されており、こちらからも弥生時代におけるイネの存在が示されている。

4．朝日遺跡のイネ科植物

ネザサ節型が多く検出されており、このネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）はウシクサ族（ススキ、チガヤなど）とともに遺跡周辺の空き地や周辺森林の林縁部などの開けた日のあたるところに生育し、草地的景観をみせていたと推測される。一方、クマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については森林下での生育が考えられる。花粉分析結果をみると、アカガシ亜属、シイノキ属の照葉樹林やコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林の存在が推測され、おもにこの落葉広葉樹林の下草的存在でクマザサ属型のササ類は分布していたと推察される。ヨシ属については先にも記したように、稲作が行われる以前には大群落を形成していたとみられ、稲作開始後には水田雑草として水田内や周辺水路などに生育し、水路には一部ジュズダマ属（ジュズダマなど）もみられた。また、キビ族はタイヌビエなど水田雑草にともなうものと推測される。

引用文献

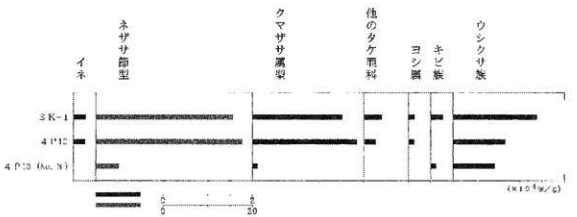
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学，9，p. 15-29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—．考古学ジャーナル，227，p. 2-7.

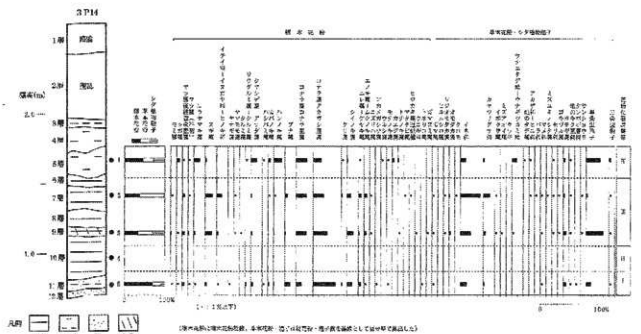
藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—．考古学と自然科学，11，p. 9-20.

試料番号	イネ（個/g）	ネザサ節型（個/g）	クマザサ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	ヨシ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	ジュズダマ属（個/g）	不明（個/g）
SK−1	2,700	306,000	20,200	4,000	1,300	2,700	18,900	0	12,100
4P10	2,600	326,500	23,400	2,600	1,300	0	11,700	0	7,800
3(4P13)	0	51,300	1,200	0	0	1,200	9,500	0	0
1(3P14−6)	0	13,200	10,800	0	3,600	1,200	9,600	0	6,000
2(3P14−11)	58,800	46,100	11,100	1,600	7,900	9,500	17,500	1,600	22,200
3(3P14−16)	129,100	37,400	6,500	1,300	58,100	20,700	15,500	0	43,900

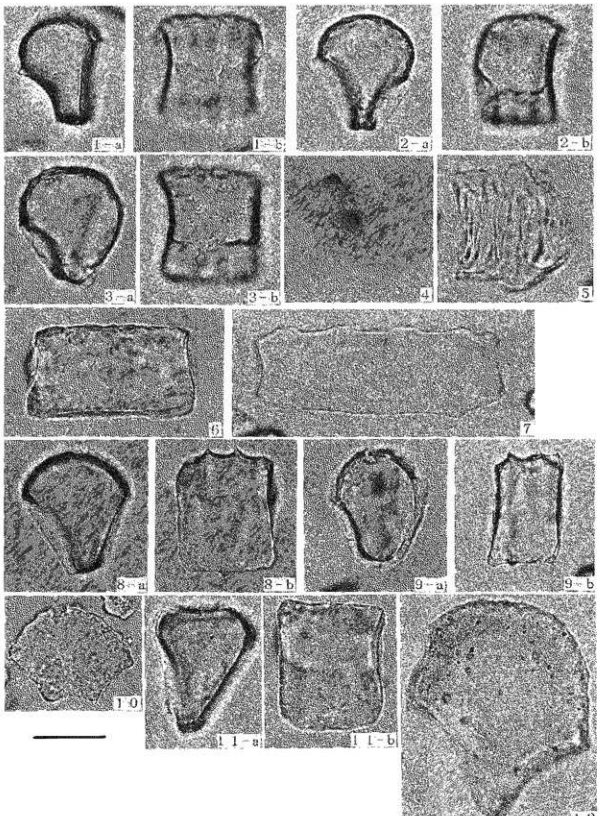
表1　試料1g当たりのプラント・オパール個数



第1図　プラント・オパール分布図



第2図　3P14（遺構外堆積物）の花粉化石分布図



図版　朝日遺跡のプラント・オパール (scale bar：30μm)

1～3：イネ（a：断面、b：側面）　1：SK 1、
2：3P14-11 (No. 2)、3：3P14-16 (No. 3)
4、5：イネ籾部破片　4：4 P10　5：SK-1
6、7：キビ族（側面）　6：SK 1、7：3 P14 16 (No. 3)
8：キザサ節型（a：断面、b：側面）4 P10　9：他のタケ亜科（a：断面、b：側面）4 P10
10：クマザサ属型（断面）3 P14-6　11：ウシクサ族（a：断面、b：側面）4 P13 (No. 3)
12：ヨシ属（断面）3 P14-11 (No. 2)

III　朝日遺跡第９次発掘調査報告

作業風景

もくじ

1　調査の経過 …… 43
2　基本層序 …… 43
3　遺構と遺物 …… 43
4　まとめ …… 45

例　言

1　本編は、名古屋市西区中沼町、長先町地内に所在する朝日遺跡の第９次発掘調査報告である。

2　発掘調査は、平成12年６月26日から平成12年７月14日まで実施した。

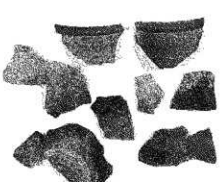
3　発掘調査は、「第４次西区長先町付近下水道築造工事」に伴い、名古屋市上下水道局の依頼を受けて、名古屋市教育委員会文化財保護室が調整し、名古屋市見晴台考古資料館の木村有作・野口泰子が担当して実施した。

4　発掘調査の実施にあたり、上下水道局建設工事事務所工事第四係からご協力を賜った。

5　本書は、館学芸員の助言を得て、野口が執筆した。遺物整理・図版作成等については、稲田望子の協力を得た。

図版目次

図１　包含層出土の甕 …… 42
図２　１：25,000　地形図　清洲　国土地理院発行 …… 46
図３　地形図　清洲（明治26年発行） …… 46
図４　入孔 408～410(1) …… 47
図５　入孔 408～410(2) …… 48
図６　入孔 408～410(3) …… 49
図７　入孔 407～417 …… 50



包含層出土の甕

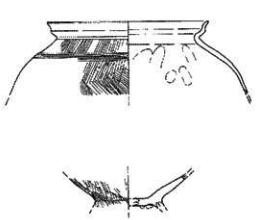
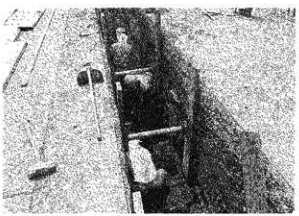


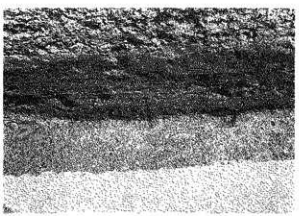
図１　包含層出土の甕

1　調査の経過

第9次調査は、下水管埋設工事に伴う調査である。調査地点は、国道302号線の南側に位置する東西方向の道路2箇所で、調査区は、幅1m、人孔の408から410までの長さ約98mと人孔の407から417までの長さ約62m、計約160m²である（p.5図3参照）。下水管埋設工事と並行して行うため、5～7mほどを単位に発掘調査をし、調査終了後、直ちに下水管の埋設に必要な深さまで掘削し、管を埋め、また、5～7mほどを発掘するという工法であった。1日に10～15mほどを調査し、調査期間は、平成12年6月26日～平成12年7月14日であった。



作業風景



土層断面

2　基本層序

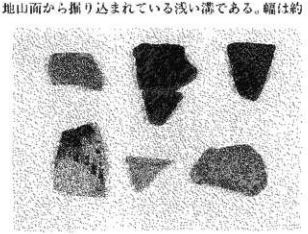
調査区の基本層序は、上から、道路に伴う舗装版、路盤、盛土・表土などが50～80cmの厚さあり、その下は近世～近代の水田耕土（厚さ3～20cm）と床土（厚さ3～8cm）がほぼ全体に広がっている。床土より下層が包含層と思われる。包含層は、上から淡灰褐色を基調とする粘質の強い土層、粘質の強い褐灰色土・黒褐色土で、地山は淡青灰色土である。淡灰褐色土からは、近世陶器や山茶碗の細片などが出土し、褐灰色土・黒褐色土からは弥生土器や土師器などが出土している。地山の標高は、1.5～1.6mである。

3　遺構と遺物

SD01

人孔の408から西へ13mほどの地点で検出された。地山面から掘り込まれている浅い溝である。幅は約

SD01



SD01 出土遺物

80 cm、深さは約 12 cm、明確ではないが、底部は幅が狭くなっている。北東から南西方向を向いている。埋土は黒褐色シルト、弥生土器、土師器片が出土している。

SD 02

SD 01 の 6 m ほど西側（408 から 20 m ほど西）で検出された。幅は約 4.2 m（地山面から）、完掘していないため深さは不明であるが、包含層の上から掘り込まれ、土層断面でみると幅は約 5.5 m、深さは 1 m ほどと推測される。溝の底部遺付近から丸太杭が出ており、SD 05 と同様と思われる。埋土は、上から黄色粘土ブロックを含む粘土質の淡灰褐色土・暗灰褐色土・灰褐色土・暗褐色土・暗青灰色土である。遺物は出土していない。

SD 03

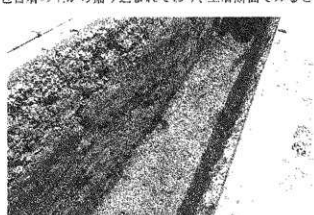
409 の 2 m ほど西側で検出された。幅は約 2 m、深さは約 50 cm、底部幅は約 70 cm、ほぼ南北方向を向いている。地山面から掘り込まれ、埋土は暗褐灰色土で灰白色粘土ブロックを含み、鉄分の沈着が目立っている。遺物は出土していない。

SD 04

SD 03 の 3 m ほど西側で検出された。幅は約 60 cm、深さは約 20 cm、埋土は黒味のある暗褐灰色土、鉄分の沈着が目立っている。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

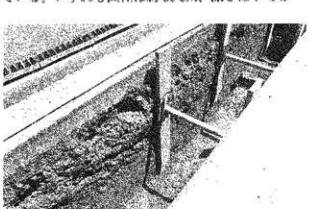
SD 05

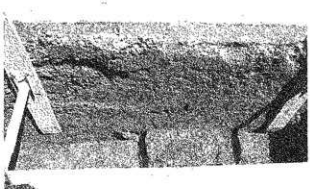
417 から 17 m ほど西側で検出されている。幅は約 3.6 m（地山面から）、深さは約 45 cm（地山面から）、底部の幅は約 3 m、更に中央で浅く落ち込んでいる。包含層の上から掘り込まれており、土層断面でみると幅は約 4.2 m、深さは約 1 m、やや西に傾く南北方向を向いている。底部の両端に直径約 10 cm、長さ約 90 cm の丸太杭が打たれている。埋土は、上から黄灰色粘土ブロックと灰色砂を含む灰色土、灰色砂と灰色粘土を含む暗灰色土で、近代陶磁器片などが出土している。

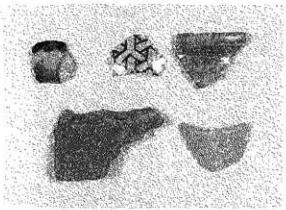

ピット

ピット

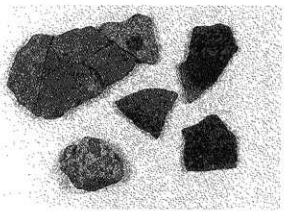
409 の 2 m ほど東側で 2 基のピットが検出されている。いずれも直径は約 30 cm、深さは P-1 が


SD05


SD05 杭



SD05 出土遺物



包含層出土遺物

約15 cm、P 2が約20 cm、埋土は粘質の強い暗褐色土、遺物は出土していない。

包含層出土の遺物

SD 01の西側地山面でS字状口縁甕が出土している。口縁部は外反し、面取りの跡が残る。体部にはヨコハケが施され、肩の張りは強く、C類に該当する。また、409の西側地山面上では、弥生中期後葉と思われる土器などが出土している。

4 まとめ

愛知県教育委員会や愛知県埋蔵文化財センターの調査では、今回の調査区の北側付近は東墓域にあたり、西側では河道の存在が予測されている。今回の調査区は、幅が1 mと狭いため溝等の方向や関連が不明であるが、地山面で検出された遺構は、弥生～古墳時代に属すると思われる。

包含層上面で検出されたSD 02・SD 05は、幅が4 m以上ある大きな溝で、ともに底面端に丸太杭が打たれ(SD 02は、原位置は不明)、近世～近代陶磁器等が出土し、近世以降の水田に伴う溝と思われた。調査区周辺は、現在は工場地帯であるが、それ以前は田園風景が広がっている。明治26年発行の地形図(図3)をみると、遺跡と推定している地域はほとんどが水田として利用されている。戦後まもなく移された写真(註1)をみると、やはり水田が広がっており、新川に流れる水場川の様子も明治時代と変わっていない。地形図の水場川は幅が狭く、複雑に曲がっている。このため、水位が上がった場合、排水力不足で灌水の地区がでたという。そこで、昭和28年に「水場川土地改良区組合」が認可され、水場川は排水専門の用水路に改修され(註2)、現在にいたっている。改修以前の水場川では、西に分かれ並行する更に細い支流があり、現在の遺跡推定範囲の中央部あたりを流れている。調査地点と地形図を合せると、SD 02・SD 05がこの支流の位置にあたる。

註1 1987 中村隆夫 「空から見た戦後40年の変貌」 株式会社航測写真センター

註2 1956 山田村誌編纂委員会 「山田村史」

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 1990 廻間遺跡 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

図2　1：25,000　地形図　清洲　国土地理院（□の中が発掘区域）

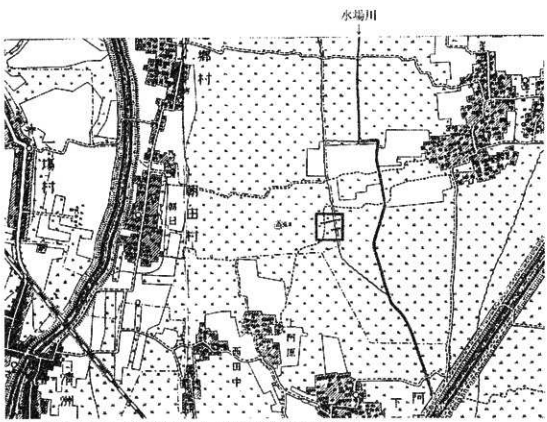
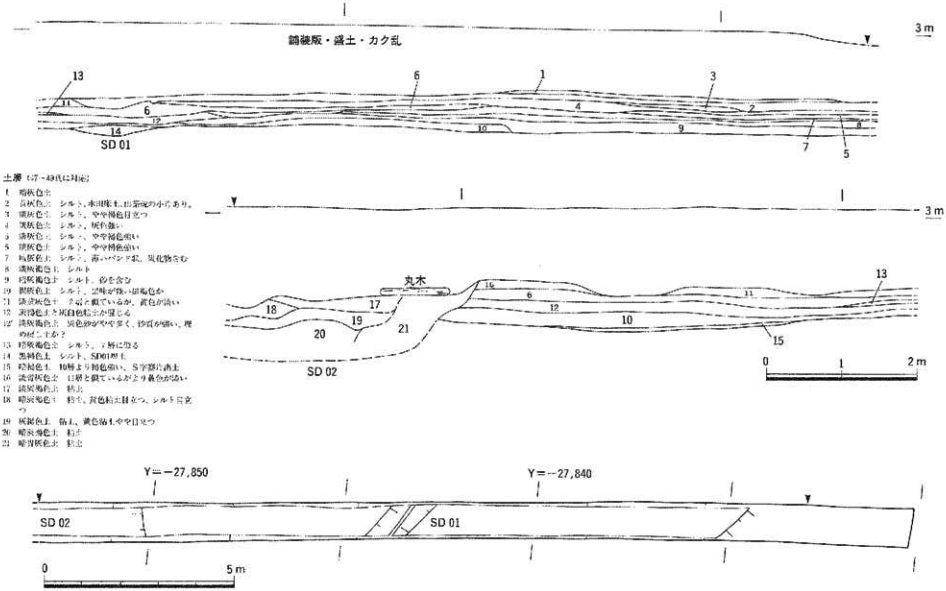


図3　地形図　清洲（明治26年発行）（発掘した道路の推定位置）

図4　人孔 408～410(1)



土層（17～40氏に対応）

1　暗灰色土
2　黄灰色土　シルト、水田耕土、出茶碗の小片あり。
3　黄灰色土　シルト、やや褐色目立つ
4　黄灰色土　シルト、灰色強い
5　黄灰色土　シルト、やや褐色強い
6　黄灰色土　シルト、やや褐色強い
7　暗灰色土　シルト、青いバンド状、黄化物含む
8　黄灰褐色土　シルト
9　暗灰褐色土　シルト、砂を含む
10　黄灰色土　シルト、黄味が強い黄褐色か
11　黄灰色土　2層と似ているが、黄色が強い
12　黄褐色土と黄白色粘土が混じる
13　黄灰褐色土　黄色砂がやや多く、砂質が強い、理めがこまか？
14　黄褐色土　シルト、7層に似る
15　暗褐色土　10層より褐色強い、S字器片出土
16　黄青灰色土　11層と似ているがより黄色が強い
17　黄灰褐色土　粘土
18　暗灰褐色土　粘土、黄色粘土目立つ、シルト目立つ
19　灰褐色土　粘土、黄色粘土やや目立つ
20　暗灰褐色土　粘土
21　暗青灰色土　粘土

図5　人孔 408〜410 (2)

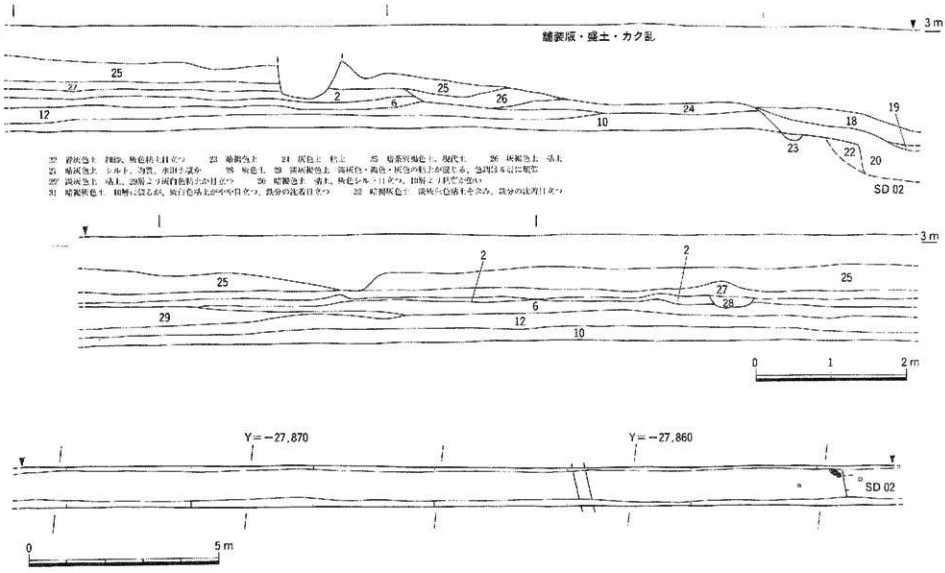


図6　人孔 408~410区

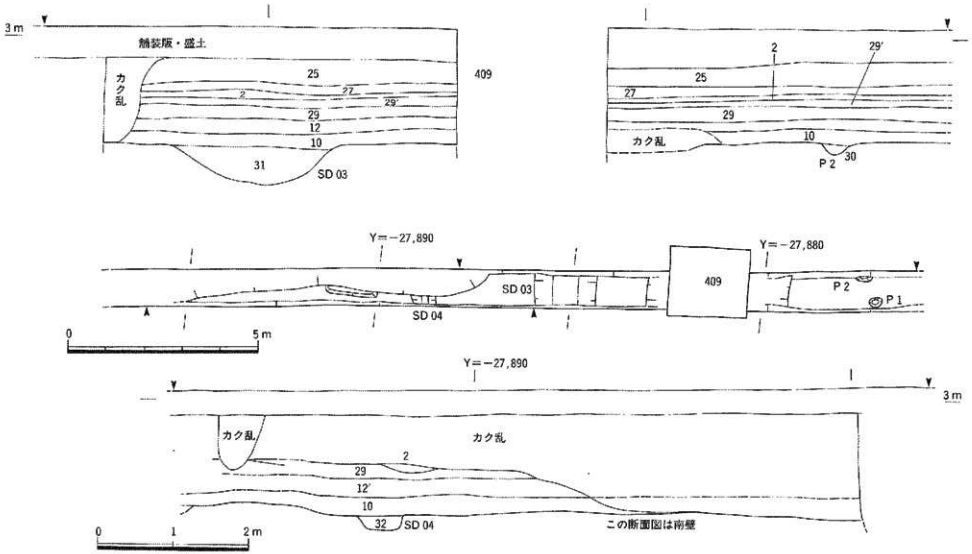
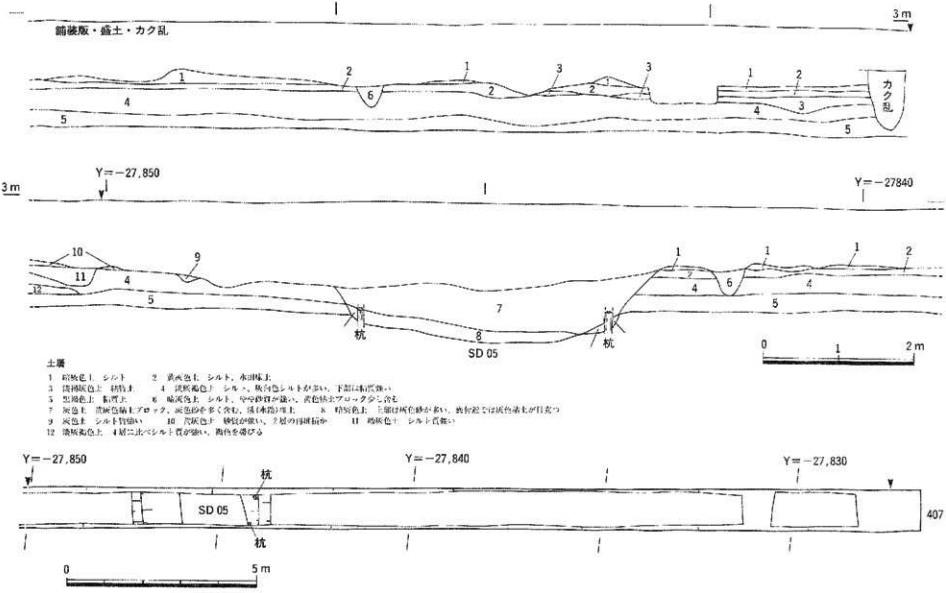


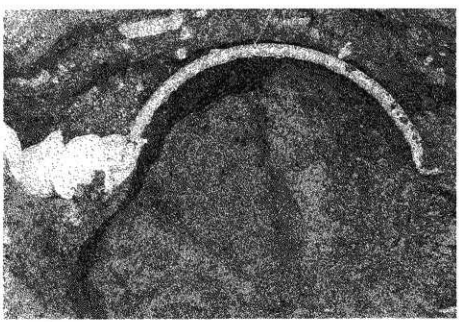
図7　人孔 407～417



土層

1　暗灰色土　シルト　　2　黄灰色土　シルト、水田様土
3　淡褐灰色土　粘質土　　4　淡灰褐色土　シルト、灰白色シルトが多い、下部は粘質強い
5　黒褐色土　粘質土　　6　暗灰色土　シルト、砂守砂質が強い、黄色粘土ブロック少し含む
7　灰色土　黄灰色粘土ブロック、灰色砂を多く含む、炭(木路)埋土　　8　暗灰色土　上部は灰色砂が多い、底部近くは灰色粘土が目立つ
9　灰色土　シルト質強い　　10　黄灰色土　砂質が強い、2層の再堆積か　　11　暗灰色土　シルト質強い
12　淡灰褐色土　4層に比べシルト質が強い、褐色を帯びる

Ⅳ　朝日遺跡第10次発掘調査



P-2地点 SK01

もくじ

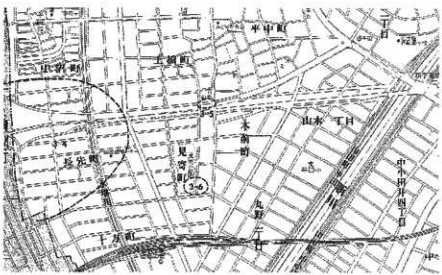
1．調査の経過 …… 53
2．遺構と遺物 …… 53
3．まとめ …… 57

例　言

1　本編は、名古屋市西区見寄町で実施した朝日遺跡第10次発掘調査の報告である。調査地点は、朝日遺跡群東南部として周知されている内、下の第1図の3-6にあたる。

2　調査は、名古屋市上下水道局の「丸野雨水準幹線他下水道工事（見寄町地内下水道築造工事）」に伴って実施した。調査期間は、2001年1月9日から同年2月23日までである。

3　調査は、事前の調整を文化財保護室、現地での調査を見晴台考古資料館が担当し、現地調査の担当者は、野澤則幸、村木誠であった。本編の執筆は村木が行った。



第1図　朝日遺跡群東南部（3-4, 3-5, 3-6）

1．調査の経過

10次調査は、下水道建設に伴い実施した。調査地点は、朝日遺跡群東南部として周知されている見寄町公園周辺一帯の道路部分である。マンホール部分が調査対称であり、4地点（以下、下水道工事の地点名通りP-1地点～P-4地点と呼ぶ）、合計約11 m²を対象として実施した（第1図）。下水道工事の進展に合わせて調査を実施したため、調査期間（2001年1月9日～2001年2月23日）の内、現地作業を実施したのはそれぞれの地点について数日程度であった。それぞれの地点について、地山面まで掘削した後、遺構の検出作業を行い、その後、写真撮影、平面図、断面図の作成を行った。

写真1　調査風景

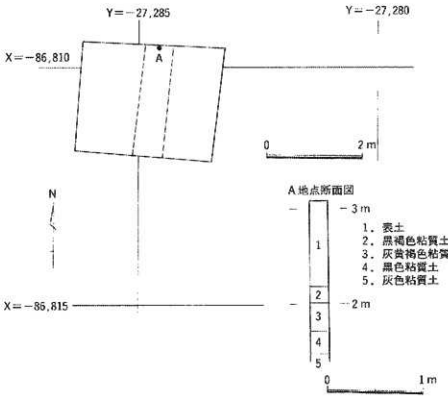
現地での調査終了後、見晴台考古資料館において、作成図面、遺物の整理作業を実施した。

第2図　調査地点位置

2．遺構と遺物

P-1地点（第3図）

見寄町公園の東側に位置する、3m×2mの方形の調査区である。掘削の途中で、調査区の大半が既設の水道管等によって、地山面以下まで撹乱されていると判断した。そのため、下水道工事のための掘削の都合等も考慮して、僅かに撹乱を受けていなかった調査区の中央部分についてのみ掘削し、断面図等を作成した。遺構、遺物共に認められなかった。



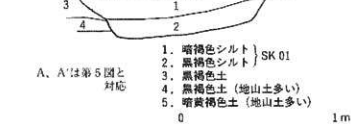
第3図　P-1地点平面図・断面図

撹乱を受けていなかった中央部分の層序は、図に示したとおり、約1m程の盛土の下に、黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土、黒色粘質土の順に堆積していた。これらの土からは遺物がまったく出土せず、堆積した時代は不明である。その下位の灰色の粘質土は、厚く堆積しており、この下位には遺構、遺物が存在しないと判断した。

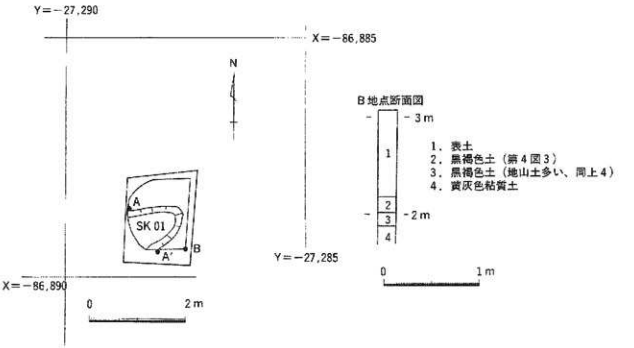
P-2地点（第5図）

見寄町の南東隅にあたる、1.5m×1.8mの方形の調査区である。現在の地表面から0.8m程盛土されているが、その下位には、シルト質の黒褐色土が堆積していた。この土の下半は、地山土を多く含んでおり、分層した。後述するように、この2層は、弥生土器の包含層であるが、今回の調査では、この地点でのみ認められた。その下位に堆積していた黄灰色の粘質土以下には遺構、遺物は存在しないと判断した。この黄灰色粘質土の上面で、土坑状の落込みSK 01を検出した。断面を観察した結果、この土坑は、黒褐色土から掘り込まれていると判断した。SK 01は、最大幅が1.2m、深さ0.3m程の土坑状であるが、調査区南西部分は調査区外に続いているため、本来の形状は不明である。埋土には、暗褐色、黒褐色のシルトであり、色調により分層したが、土の質などはあまり違いは見られなかった。掘削中は、SK 01の埋土とそれが掘り込まれた黒褐色土の識別ができなかったため、黒褐色土出土の遺物中には、本来SK 01のものも含まれている。

SK 01からは、S字状口縁台付甕（第6図1）、受口状口縁甕（3、4）、くの字状口縁甕（2）、小型の壺（6）等が出土している。小型の壺は、土坑の底の地山土に密着して出土した。



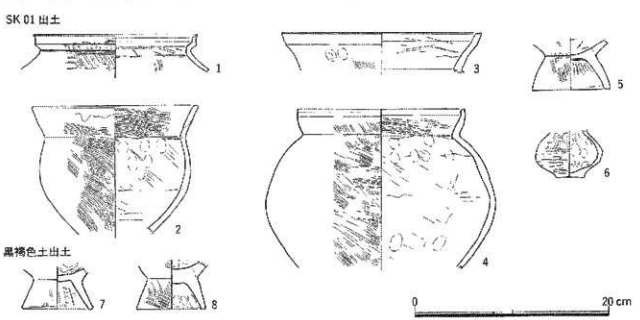
第4図　SK01断面図



第5図　P-2地点平面図・断面図

S字状口縁台付甕1は、口縁部外面にヘラ状の工具による刺突が施されており、赤塚次郎氏の分類によるA類(註1)にあたる。口縁部下段は短く、中段へは、屈折してほぼ垂直に立ち上がっている。中段から上段へはいくらか丸みをもって屈折し、上段には面をなしている。胴部外面は、左上がりの粗いハケメの後、横方向のハケメが施される。頸部内面は、ヘラ状工具による沈線が施されている。

2のくの字状口縁甕は、頸部がほとんど絞らない形態である。口縁の端部は丸く、キザミはない。外面と口縁部の内面にハケメを施している。胴部内面には、指頭によるオサエの他に、イタ状の工具によるナデが観察できる。3、4の受口状口縁甕は、口縁をヨコナデによって受口状にしてはいるが、口縁や胴部上位の刺突や、頸部直下の直線文といった、受口状口縁甕に特徴的な文様を欠いている。



第6図　P-2地点出土遺物実測図

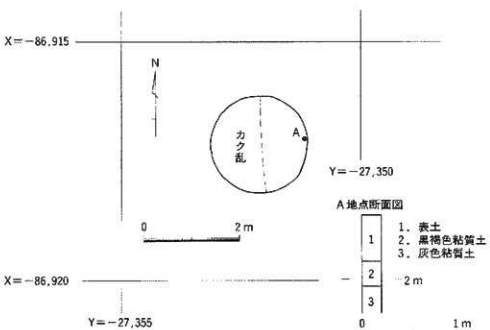
6の小型の壺は、胴部のみしか残っていないが、外面全体にヘラミガキが施されている。底部付近は、ミガキに先立って横方向にヘラケズリが行われている。

これらのSK 01の遺物は、あまり遺存度が高いとは言えず、この遺構に関わるものかどうかよくわからないが、朝日遺跡の編年案(注2)によるIX-2期ないしは3期に比定できるだろう。

また、黒褐色の包含層からの出土の甕の脚部2点も、やや内湾気味の形態から見てほぼ同じ時期と見ることができよう。先述の通り、確実に黒褐色土出土とできる遺物が不明のため、この包含層の堆積時期は特定できない。

P-3地点（第7図）

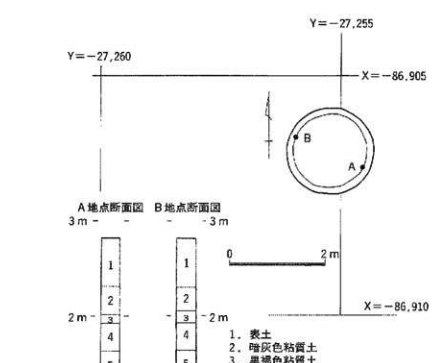
見寄町公園の南西隅にあたる、直径2mの円形の調査区であった。調査区の西半分は、既に撹乱を受けていた。残存していた部分では、地表から50cmほどの表土下に、25cm程度の厚さで黒褐色粘質土が堆積していた。その下位には、灰色の粘質土が厚く堆積しており、この土以下には遺構、遺物はないと判断した。遺構、遺物共に認められなかった。



第7図　P-3地点平面図・断面図

P-4地点（第8図）

見寄町公園の南東隅からやや東に位置する、直径2m弱の円形の調査区である。調査区は、撹乱を受けておらず、表土以下、地山と判断した灰色の粘質土まで、粘質土が厚く堆積していた。調査区の2ヵ所で断面を記録したが、何れも同様な状況であった。50cmほどの表土下には、暗灰色の粘質土が厚く堆積し、その下位には10cmほどの黒褐色土、更にその下に灰褐色粘質土が25cmほど堆積していた。その下位の黒褐色粘質土も30cm程の厚みであった。これらの各層から遺物の出土はなかった。その下位の、灰色粘質土以下には遺構、遺物はないと判断し、この面を精査したが、遺構はなかった。



第8図　P-4地点平面図・断面図

3．まとめ

今回の調査では、P-2地点で、弥生時代末の土坑を1基検出した。P-2地点以外では遺構、遺物とも見られなかったが、調査面積がごく限られたものであったことによるのであろう。ただ、かつて、見寄町公園東南隅付近で土器が出土した事が報告されているが(注3)、今回遺構が検出されたP-2地点も見寄町公園の東南隅であるから、あるいはこの地点付近には遺構が多いのかもしれない。

この見寄町公園周辺は、朝日遺跡群東南部として周知されており、いわゆる朝日遺跡(以下、第1図3-4を「朝日遺跡」と呼ぶ)と一連の遺跡として扱われてきた。今回検出した遺構の時期にも、朝日遺跡は存続しており、位置関係から見ても、何等かの関係を持っていた事は疑いない。しかし、名古屋市教育委員会が実施した第4次調査では、今回の調査地点と朝日遺跡の間には遺構の密度が低い地点があることが報じられている(注4)。

そうした事を考えると、朝日遺跡から今回の調査地点まで、一連の遺構が展開していたというよりは、例えば、分村のような小集落があった可能性や、やや離れた地点に墓域が設定されていたという可能性のほうが高いと言えるだろう。現在は、見寄町公園付近の遺跡の内容が不明のため、結論がでないが、今後調査の進展を待って、改めて考えてみる必要があろう。

(注1)　S字甕に関しては、以下の文献を参考にした。
赤塚次郎　1986「「S字甕」覚書'85」『年報　昭和60年度　財団法人愛知県埋蔵文化財センター』
赤塚次郎　1990「考察」『朝日遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

(注2)　宮腰健司編　1994『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

(注3)　名古屋市教育委員会　1980「朝日遺跡群　長先、見寄町地区発掘調査概要報告書」

(注4)　田原和美編　1999「朝日遺跡第3・4次発掘調査報告書」名古屋市教育委員会

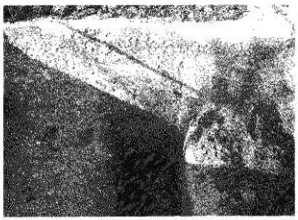


写真2　P-1 地点断面

写真3　P-2 地点 SK01 断面

写真4　P-3 地点全景

写真5　P-4 地点全景

写真6　SK01 出土遺物（第6図1）

写真7　SK01 出土遺物（第6図4）

写真8　SK01 出土遺物（第6図5）

写真9　P-2 地点出土遺物（第6図7・8）

V　朝日遺跡第５・６次発掘調査

付：名古屋城三の丸遺跡第11次発掘調査

付記

本編は、平成12年(2000)３月に名古屋市教育委員会が刊行した『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』の転載である。朝日遺跡第５・６次調査は、第７～９次調査と同じ一連の下水道整備工事を原因としている。調査地点も、第７～９次調査範囲と重複しており、報告内容が第７～９次調査に関連する場合も多い。『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』は単独で刊行されたため、本書の刊行にあたり、今後の利用の便を図るため、ここに転載した。

転載にあたっては、一部の構成を入れ替えたが、内容は原本のままである。ただし、原本の中扉頁（P.3およびP.19）と白紙頁（P.4およびP.20）は、割愛した。

報告書抄録

ふりがな	[illegible]
書名	下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 （朝日遺跡5・6次、名古屋城三の丸遺跡11次）
編著者名	伊藤正人・水野裕之
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268 FAX 052-972-4178
発行年月日	西暦2000年3月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡等号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
朝日遺跡 （5次）	愛知県名古屋市西区長先町、中沼町道路地内	23100	3-4	35度 13分 05秒	136度 51分 39秒	99.9.1～9.20	約180m²	下水道築造
朝日遺跡 （6次）	愛知県名古屋市西区中沼町道路地内	23100	3-4	35度 13分 10秒	136度 51分 36秒	99.12.6～12.15	約45m²	下水道築造
名古屋城三の丸遺跡	名古屋市中区三の丸一丁目地内（歩道、道路）	23100	7-27	35度 10分 37秒	136度 54分 10秒	99.12.13～00.1.17	約120m²	下水道築造

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝日遺跡 （5次）	集落跡	弥生	溝	弥生土器	
朝日遺跡 （6次）	集落跡	弥生	土坑	弥生土器 磨製石鏃	
名古屋城三の丸遺跡	城址 散布地	江戸 戦国 中世	溝、土坑	中世、近世陶磁器	

下水道工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（朝日遺跡5次・6次
名古屋城三の丸遺跡11次）

2000年3月28日発行

編集　名古屋市見晴台考古資料館
名古屋市南区見晴町47（笠寺公園内）

発行　名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号

印刷　㈱クイックス

例　言

1　本書は、平成11年度の名古屋市下水道局による下水道工事に伴って行なわれた朝日遺跡第5次、第6次発掘調査と名古屋城三の丸遺跡第11次発掘調査の報告書である。

【朝日遺跡】

［第5次発掘調査］（下水道局工事名：「平田西部幹線下水道築造工事」）

調査位置　名古屋市西区長先町、中沼町道路地内

調査面積　約180 m²（3地点）

調査期間　平成11年9月1日～平成11年9月20日

調査主体　名古屋市教育委員会

担 当 者　服部哲也・水野裕之（名古屋市見晴台考古資料館）

資料保管　名古屋市見晴台考古資料館

［第6次発掘調査］（下水道局工事名：「平田西部汚水準幹線下水道築造工事」）

調査位置　名古屋市西区中沼町道路地内

調査面積　約45 m²（3地点）

調査期間　平成11年12月6日～平成11年12月15日

調査主体　名古屋市教育委員会

担 当 者　伊藤正人・伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）

資料保管　名古屋市見晴台考古資料館

【名古屋城三の丸遺跡】

［第11次発掘調査］（下水道局工事名：「中区三の丸一丁目地内下水道築造工事」）

調査位置　名古屋市中区三の丸一丁目歩道、道路地内

調査面積　約120 m²

調査期間　平成11年12月13日～平成12年1月17日

調査主体　名古屋市教育委員会

担 当 者　服部哲也・水野裕之（名古屋市見晴台考古資料館）

資料保管　名古屋市見晴台考古資料館

2　朝日遺跡第6次調査に際して、鈴木正貴氏・藤山誠一氏をはじめとする愛知県埋蔵文化財センターの方々、並びに坂野俊哉氏をはじめとする国際航業㈱朝日遺跡発掘調査事務所の方々には、種々のご教示をいただいた。厚くお礼申上げる。

3　本書は、各次調査担当者および館職員の協力を得て、水野裕之（朝日遺跡第5次、名古屋城三の丸遺跡第11次）、伊藤正人（朝日遺跡第6次）が執筆した。編集は水野が担当した。

目　次

第Ⅰ章　朝日遺跡第5次・6次発掘調査

1　遺跡の概要……5
2　第5次発掘調査
(1)　調査の概要……7
(2)　J2区……8
(3)　J3区……9
(4)　J4区……10
(5)　小結……12
3　第6次発掘調査
(1)　調査の経過……13
(2)　1区……14
(3)　2区……14
(4)　3区……17
(5)　小結……18

第Ⅱ章　名古屋城三の丸遺跡第11次発掘調査

1　遺跡の概要……21
2　調査の経過……21
3　調査の概要……24
4　小結……26

第Ⅰ章　朝日遺跡第5次・6次発掘調査

1　遺跡の概要

朝日遺跡は、愛知県清洲町、春日町、新川町そして名古屋市西区にまたがる尾張平野の中核となる弥生時代の集落遺跡として有名である。

当遺跡は、これまで国道建設工事関連の発掘調査が、愛知県教育委員会および(財)愛知県埋蔵文化財センター等によって、大規模に行なわれてきた。これらの成果によると、弥生前期に清洲町の貝殻山貝塚付近で営まれた遺跡は、中期初頭には北東方向に集落が展開し、中期後半には、北居住域に複数の環濠と逆茂木、乱杭などが設けられ、緊張が高まった状況を示している。後期になると北居住域と谷を挟んだ南居住域にも環濠が造られるが、後期後半には集落が衰退する。

また、方形周溝墓群に特徴づけられる墓域については、中期初頭には居住域の西側に形成されるが、中頃から後半には、墓域の中心が居住域の東側に移り拡大する。

今回の調査は、第5次、6次とも遺跡の東側墓域付近にあたる。

図1　遺跡の位置（黒丸印が調査地付近）5万分の1地形図「名古屋北部」による

図2　調査地点の位置（5次・6次）

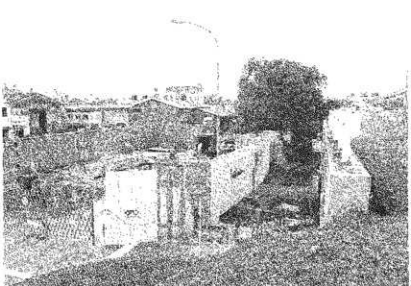


写真1　5次（J2・J3）地点（東から）

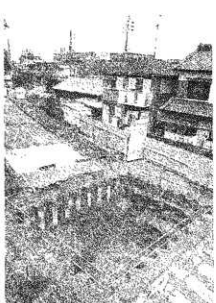


写真2　5次（J4）地点（東から）

2 第5次発掘調査

(1) 調査の概要

今回の発掘調査は、市下水道局による下水管ジョイント部分の工事箇所を3地点(J2～J4区)行なった。現状は、各区とも国道302号線を挟んだ側道にあたる部分である。現地表から1mあまりは撹乱土で覆われており、以前の道路工事等によって、地山面よりも下位におよぶ撹乱部分も多く、各区とも面積の半分以上を占める状況であった。また、地盤補強のための注入孔などもあって包含層や遺構の残存状態は良好とはいえなかった。

平成11年9月1日からJ2、J3区の表土および撹乱土層を除去し調査したところ、遺構が希薄であったことからJ2、J3区は、9月3日に記録等の調査が終了した。また、J4区の調査着手は、下水道工事作業の関係で、9月13日から入った。雨天のために作業が中断したものの、9月17日には現場作業を終了することができた。

以下、調査区ごとに遺構、遺物の概要を記す。

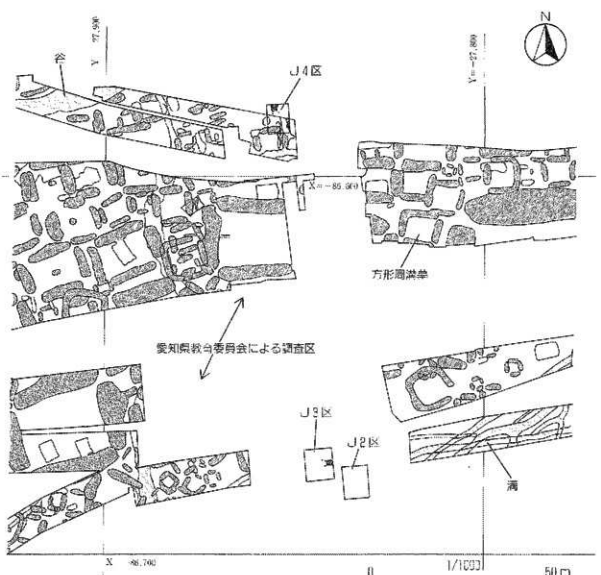


図3 E次調査地点(J2～J4区)と周辺の遺構(1)

(2) J2区

当調査区は約60 m²あり、その約半分が電気ケーブルや水道の埋設溝など撹乱部分であった。それ以外の部分では、現地表から110 cmまでが、表土または撹乱土であった。その下位には、15~25 cmの層厚で暗褐色土層(シルト質)が部分的に検出された。これが遺物包含層であるが、僅かな土器片が検出されただけであった。包含層の下は、黄灰色シルト層となり、これが当地点付近の地山である。この上面での遺構は小規模なピット3基(P1~3)が検出されただけであり、出土遺物は無かった。

包含層出土の土器片は、5 cm以下の小破片ばかり7点であった。多くは、弥生時代中期後半頃のものと思われるものであるが、甕の口縁部片や深鉢底部片などのほかは、器種等がはっきりしない。

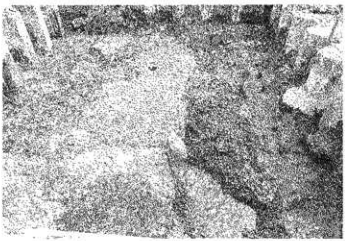


写真3 J2区全景(北から)

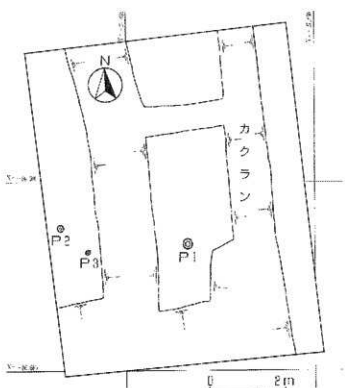


図4 J2区平面図(S=1/100)

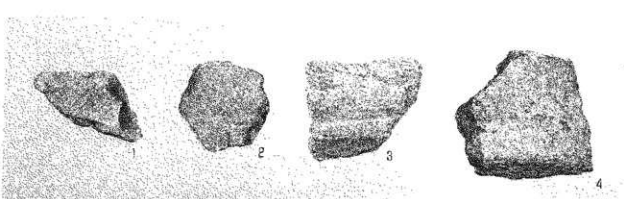


写真4 J2区出土遺物(弥生土器片)

(3) J3 区

当調査区は、J2 区から 10 m ほど北西方向の位置にあたり、面積は約 64 m² である。基本的な上層堆積は J2 区と同じであった。また、調査区の中央部分およびその西側部分は、現代の廃棄物を捨てた大型の攪乱土坑があり、ここでも面積の半分あまりを調査することができなかった。

包含層中からは、弥生時代中期後半頃の甕の胴部片等が僅かに出土した。また、黄灰褐色シルト層の地山面では、幅 1 m 前後、深さ 15 cm ほどの溝状遺構の一部（SD01）と、溝または土坑状の遺構の一部（SK01）のほか、小規模なピット（P 1～5）が検出された。各遺構埋土は、包含層とほぼ同一の暗褐色土であったが、出土遺物が無く時期の特定は難しい。

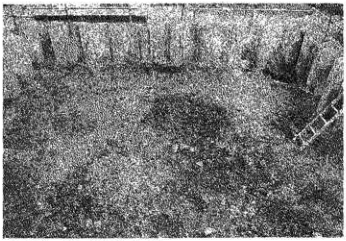


写真 5　J3 区全景（西から）

図 5　J3 区平面図（S=1/100）

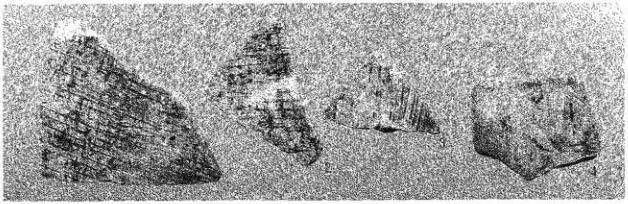


写真 6　J3 区出土遺物（弥生土器片）

(4) J4区

当調査区は、J2、J3区とは国道302号線を挟んでその北側に位置し、面積は約48㎡である。J4区では、現地表下約1mまでの表土、撹乱土層の下に約30cmの灰褐色土層が、地山である黄灰白色シルト層までの間に堆積していた。これが遺物包含層であるが、残存状況は悪く、撹乱部分の範囲が調査区のおよそ三分の二を占めた。

検出遺構は、幅0.3m、深さ0.1mほどの小規模な溝状遺構（SD01）と幅約1.5m、深さ0.7mの溝状遺構の一部（SD02）、そして、深さ40cm以上で溝状と思われる遺構のごく一部が検出された。

SD02の埋土下位から、弥生時代中期後葉頃の壺（残欠）が出土したが、埋土上位には後期後半頃の高坏片が含まれていた。他の遺構からは、遺物が検出されなかった。

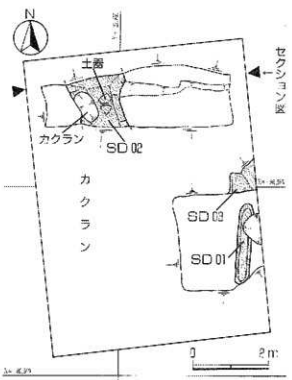


図6　J4区平面図（S=1/100）

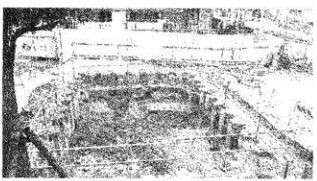


写真7　J4区全景（南から）

写真8　J4区SD02埋土断面

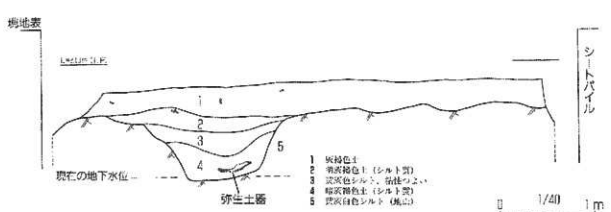


図7　J4区SD02埋土断面図

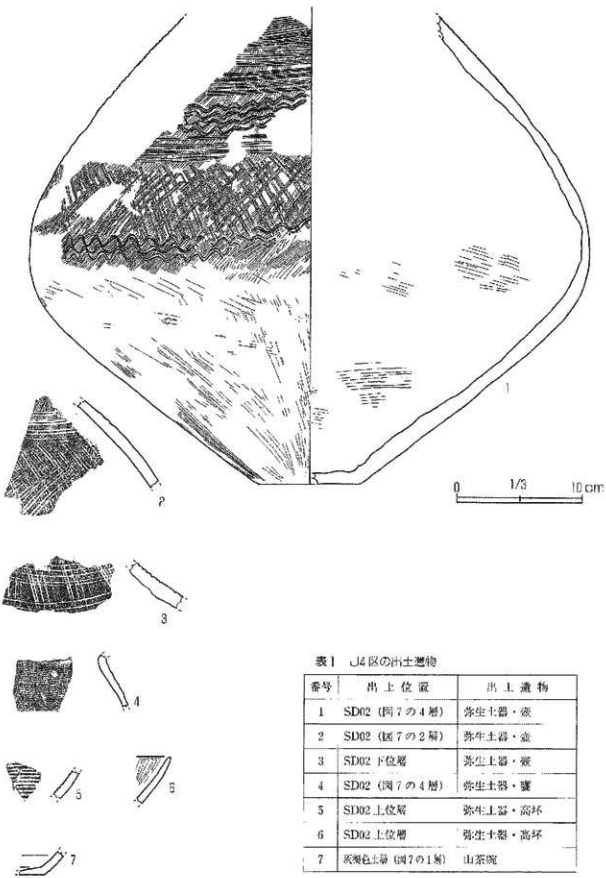


図8 J4区出土遺物

表1 J4区の出土遺物

番号	出土位置	出土遺物
1	SD02（図7の4層）	弥生土器・壺
2	SD02（図7の2層）	弥生土器・壺
3	SD02下位層	弥生土器・甕
4	SD02（図7の4層）	弥生土器・甕
5	SD02上位層	弥生土器・高坏
6	SD02上位層	弥生土器・高坏
7	灰褐色土層（図7の1層）	山茶碗

(5) 小結

朝日遺跡では、はじめにもふれたように、これまで国道建設工事関連の発掘調査が愛知県教育委員会および財愛知県埋蔵文化財センター等によって大規模に行なわれていて、これらの調査成果からみると今回の調査地点付近は、遺跡の「東葛城」とも呼ばれている弥生時代中期を主体とした方形周溝墓群が検出されている部分にあたる。

今回の調査では、いずれの調査区も工事掘乱部分が多くあって包含層や地山面の残存状態が良くなかったものの、J2区とJ4区では溝状遺構が検出された。これらの遺構は、周溝墓の溝か、その他の溝状遺構の一部であると思われるが、J4区のSD02は、昭和53年に愛知県教育委員会が行なった発掘調査の第6区、SD073[註2]と位置的に近く[註3]、規模や形状も類似している。ともに中期後葉(高蔵式)の壺が出土している。J3区のSD01は、出土遺物が無く時期が特定できないが、同じく昭和53年の県教委の成果からみると、やや離れてはいるが、東西に同方向の溝(後期など)が検出されている(図3参照)。

図3をみても明らかなように、弥生時代の拠点的な大集落に伴う墓域付近にあたる位置での調査であり、過去の空白を埋めるといった成果があったのであるが、遺跡の広がりについては、これまでの県教委および県埋蔵文化財センターの発掘調査や当市教委による調査でも、まだ推定の域を出ていない状況である。

このようななかで、現在では遺跡の縁辺部と思われているあたりでも、調査を行なうことができれば、とりわけ遺跡の範囲を把握するために貴重な資料を提供することになろう。

今回、関係当局と工事にあたるJVの方々から事務所の使用等、多くの協力を得て調査をすることができた。末尾ながら謝意を表する。

註 1 財愛知県埋蔵文化財センター 1991 付図「朝日遺跡弥生時代全体図」『朝日遺跡』I 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集を参考にして作成した。
2 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡』Iおよび1による。
3 註1文献による遺構位置と今回の調査区(遺構)位置との関係でずれが生じていると思われるが、現在のところ検証できていない。

3　第6次発掘調査

(1)　調査の経過

下水道のマンホール築造部分3か所で調査をおこなった。現地調査期間は、平成11年(1999)12月6日から15日までであった。位置は、図2に示したように、国道22号線の東方、国道302号（現状2号）線の北側の道路上である。築造工事による各区の名称は、北西から順にM-3・M-1・M-7であったが、発掘調査にあたっては、これを1区・2区・3区と呼んだ。過去の発掘調査地点・範囲や主な遺構との位置関係は、図9のようになる。

下水道工事はすでに着工しており、発掘に着手した時点では、各地区には掘矢板が建て込まれていた。市内の他の遺跡調査との関係で、朝日遺跡第6次調査は、当初予定より時期を遅らせることとなった。このため、表土掘削と地盤改良のためのセメント注入が先行した。結果として、一部の遺構・包含層の撹乱や、噴出したセメントの浸透により、遺跡の状況を把握できない部分があった。

調査は、1区・2区・3区の順に進めた。各区の調査日程は、1区が12月6日(月)、2区が7日(火)から13日(月)、3区が14日(火)であった。1・3区の残存状況が悪かったため、24日までの予定よりも早く、15日に風景写真撮影と撤収をおこなって、現地作業を完了した。

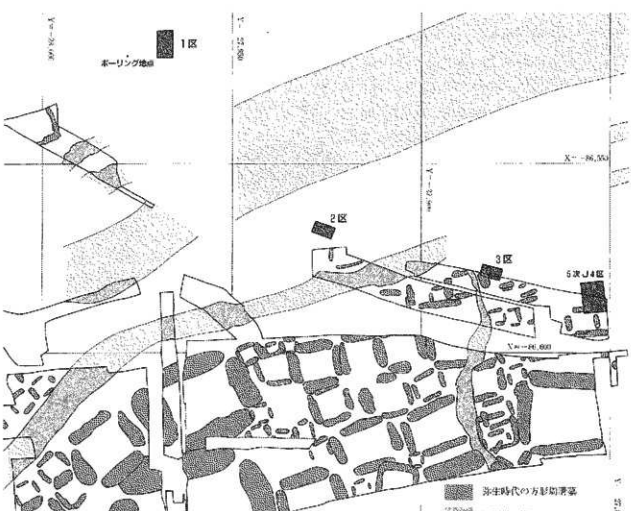


図9　第6次調査地点（1～3区）と周辺の遺構（1：1,000縮小）

(2)　1区

東西約4m、南北約7mの長方形の区画である。ただし、この数値は、写真9に見える覆鋼板のフレームの内法であり、掘削範囲はこれより狭くなる。現況道路面の標高は約3.5mで、着手時点ですでに地表下1.5m(標高2m)前後まで掘削されていた。これ以下の土層を確認したところ、標高2m～1.5m前後が灰色シルト、1.5m以下が灰色砂層で、朝日遺跡の基盤を成す土層と考えられた。区画内では、これ以上の土層に関する情報は得られなかった。

たまたま西方約8mの地点で、県道関連のボーリング調査がおこなわれ、そのデータの概略を教えていただいた。この地点では、標高2.3～2.5m付近に黒色土が捉えられ、同1.6～2.3m付近が青灰色シルト、同約1.6m以下が細砂層となる。穴の直径が20cmの範囲ではあるが、黒色土中からは、図11に示した弥生時代中期の土器片が出土しており、黒色土は、遺構埋土あるいは包含層であると考えられる。1区東壁（図10の■部分）でも、支保鋼材調整時にわずかに上部の土層を観察できたが、ここでも標高2.8m以下に、黒色土が認められた。

1区周辺では、地表下70cm程度の深さで、良好な包含層の上面が確認されるものと考えられた。

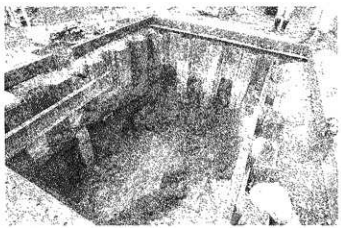


写真9　1区全景（南東から）

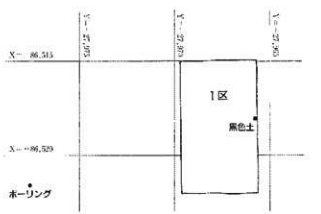


図10　1区およびボーリング調査位置図（1：200）

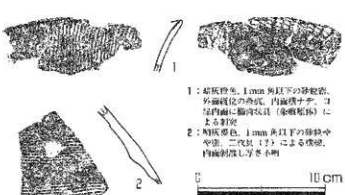


図11　1区西（ボーリング調査）出土土器（1：3）

(3)　2区

東西約5.4m、南北約3mの長方形の区画である。ただし、この数値は、鋼矢板の最内面を結ぶ線の交点を測ったものであり、掘削範囲はこれより広くなる。図12に示した調査区の形状も同様であり、このため遺構等が調査区形状外へ出る場合がある。1区の南東約60mに位置している。現況道路面の標高は約3.2mで、着手時点では地表下0.9m（標高2.3m）前後まで掘削されていた。これ以下の土層を確認したところ、標高2.3m～2.0m前後が水成と思われる粗砂層、2.0～1.7m前後が砂利を主体とする黄褐色土であった。これらは、この地点の道路工事に関連して埋没・整地された痕跡と考えられた。

黄褐色土の直下で、黒色土・暗灰色土を検出した。黒色土は、散漫に遺物を含んでおり、上面および層中で、4基の土坑を確認した。掘削は、図12のW～Eの北側に幅30cmのトレンチを掘り、図13の断面を手がかりに平面プランを確認した。ただし、特に北半では、注入されたセメントの影響で土層状態が不良であり、遺構の詳細を把握できなかった。また、矢板を廻て込んでいるため、矢板に近い部分では上層の変形やひずみがみられた。以下に述べる遺構の形状等についても、同様な影響を受けているはずである。

SK1は、長径1.7m、短径1.4mの楕円形プランを検出した。埋土は、おおむね上下二層に区分でき、両層の間は、3層をはさむなど不整合を成していた。上層(図13の2層)の下部に、遺物がやや多く含まれていた。小片が多いが、2点の台付甕(図14-2・3)は、ほぼ原形を保った土器が、この付近で埋没・破損したものと考えられた。いずれも表面に黒々とススが付着し、顕著な使用の痕跡を留めている。この2点も、埋土上層の下部に含まれていたものと捉らえられる。この他に特筆すべき遺物として、磨製石鏃(図14-1)がある。埋土下層から出土したものである。

SK2は、地山の細粒を含む暗灰色土が埋土で、形状は捉らえにくかった。長さ2.2m、幅1.1mの長方形のプランを検出した。南西の壁は、

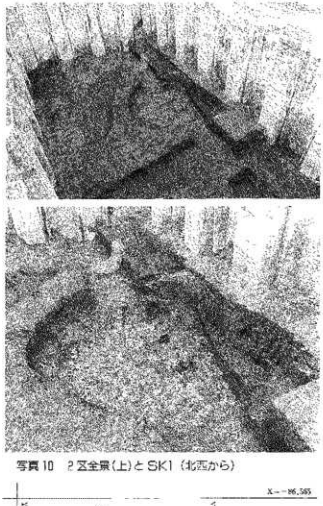


写真10　2区全景(上)とSK1(北西から)

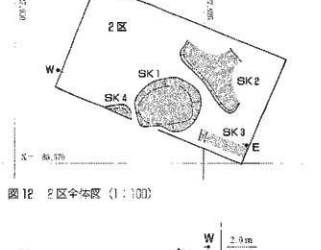


図12　2区全体図(1：100)

1　暗褐灰色、シルト、径2～3程度の炭化物細粒をわずかに含む
2＝黒～暗褐灰色、シルト、径2～3程度の炭化物粒・焼土粒を少なめに含む
3＝炭化物層(黒色の炭化木片が帯い層をなす)
4　黄褐～緑灰色、シルト(粘性強)、径2～3程度の炭化物片、炭化(1cm?)粒子をまばらに含む
5＝暗褐灰～暗褐灰、4と同様、灰色粒子が多いためか色調やや明るい、炭化物もやや多
6　黄・褐灰～灰色の粘土(径1cm前後)が混在
7　一部～緑灰色、シルト(粘性強)、硬さに差い
8＝緑灰～褐灰色、堆出(シルト質ごう)、地山(層は部分的に混合)

A＝黄褐色ソフラン土(十勝川)
B＝注入セメントの流出ラフラン土

図13　2区土層断面図(1：50)

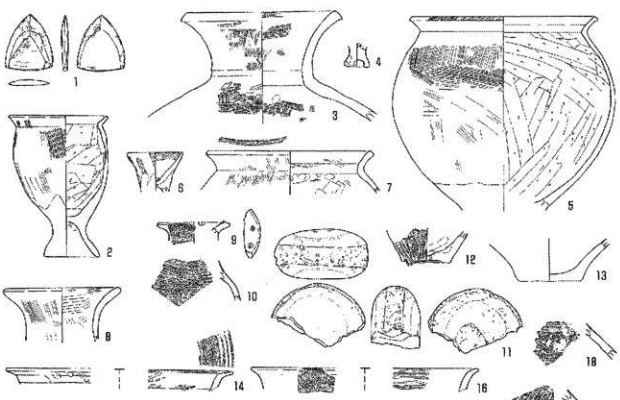


図14　2区出土遺物（1のみ1：2，他は1：4）

写真11　2区出土遺物

No.	器種	出土位置	法量(cm)	遺存部	文様・調整など	写真
1	磨製石斧	2区SK1下層	刃幅3	1/1	重さ2.9g，砂岩か，緻密な石質，片面は3段・裏面は2段の研磨面	○
2	石皿類	2区SK1	口径10	3/5	灰黄色，2mm以下の砂粒やや密，胴部縦ハケのち ナデ，口縁部ナデ	○
3	壺	2区SK1	口径15.9	1/5	灰黄色，1mm程以下の砂粒密，外面縦ハケのち雑な磨き，口唇横ナデ	
4	ミニチュア土器	2区中央部混色土	底幅2.7	1/1	雲？，灰白色，0.5mm径の砂粒をごくわずかに含む，指ナデ仕上	
5	台付甕	2区SK1	口径18.5	1/2	褐灰色，1mm以下の砂粒多く含む，胴部ハケ目，脚部ナデ，スス付着	○
6	ミニチュア土器	2区トレンチ内混色土	口径5.9	2/3	底部？，橙灰色，砂粒まばら，内外面赤彩痕文，指押・ナデ・仕上痕	
7	(台付)鉢	2区SK1	口径17	1/7	黄灰色，砂粒ざばら・緻密，ハケ目のちナデ，口唇部刻み	
8	壺	2区SK2	口径11.5	1/4	灰白色，0.5mm以下の砂粒やや密，胴部不良，内外面ともハケ目	○
9	壺	2区SK2	口径7.5	1/5	灰色，緻細砂粒やや密，外面横位波状文・内面底付文に綿状繊維痕	○
10	壺	2区SK2	—	—	灰色，緻細砂粒やや密，横位波状文，No.9と同一個体と思われる	○
11	敲き石	2区SK3	厚さ3.2	1/1	現重量約420g，安山岩か，灰色，凝縁および片面中央に敲打痕	
12	甕	2区中央部混色土	底径5.1	1/5	橙黄色，2mm径以下の砂粒をやや密に含む，新しい深く荒いハケ目	
13	壺	2区SK1	底径7.5	1/2	灰色，2mm以下の砂粒まばら，焼成不良	
14	高杯	2区トレンチ内混色土	—	—	灰白色，砂粒やや密，内面雑な磨き・外面縦ナデ，口縁と外面に赤彩	
15	高杯	2区トレンチ内混色土	—	—	にぶい黄橙色，砂粒わずか，雑な調整仕上，内外面ともスス(?)付着	
16	高杯	2区トレンチ内混色土	—	—	浅黄橙色，砂粒わずか，内面粗さ・外面縦ナデ，稜部成形文	
17	高杯	2区トレンチ内混色土	—	—	灰黄色，砂粒やや密，やや雑な磨き仕上，稜部赤彩文	
18	壺	2区トレンチ内混色土	—	—	橙灰色，0.5mm径以下の砂粒まばら，横位櫛描・波状文，粘土紐接合	
19	壺	2区トレンチ内混色土	—	—	灰色，1mm程以下の砂粒密，粗雑な内面横ハケによる調整・強	

表2　2区出土遺物観察表

（法量の数値は推算，遺存部は図示部分の全周に対する残存比率）

約10 cmの段を認めたが、北東側では撹乱が著しく、範囲を特定し難かった。南西部の検出高は、1.6 m前後であった。出土遺物は、土器片約50点であるが、すべて小片で、SK2の時期は特定できない。SK1に比べて中期中葉に属するものが多いが、後期と考えられるものも混在している。

SK3は、土層断面でのみ確認し、トレンチ以南しかプランを捉えることができなかった。埋土は、SK1の上層と近似していた。東部の底面付近で、敲石（図14-11）が出土した。

SK4は、SK1の西隣に位置する。確認面は地山であるが、本来の検出面は不明である。肩部標高約1.5 m、深さ10 cm弱で、埋土はSK1の4層に近似していた。調査区の南壁外へ続いており、平面規模は全く不明である。遺物は出土しなかった。

SK1とSK4の間の部分にも、地山ブロックを密に含む埋土の遺構があり、SK1Bとした。図13の6層は、SK1Bの一部である可能性が考えられた。

(4) 3区

東西約5.4 m、南北約3 mの長方形の区画である。2区から東へ約40 m、第5次調査J4区から西へ約25 mに位置する。現況道路面の標高は約3.25 mで、着手時点では地表下1.2 m（標高2 m）前後まで掘削されていた。掘り下げ面を覆った噴出セメント混じりの土を除去したところ、北半では標高約1.9 mで地山面を確認し、南半は撹乱土で埋まっていた。南半を掘り下げたところ、30 cmほどで地山に至ったが、南西隅のみは、黒色土ブロックを主体とする撹乱土が方形にさらに約10 cm落込んでいた。図9の位置関係から、南半は、道路建設に伴う愛知県教育委員会の1978年発掘調査の跡と考えられた。

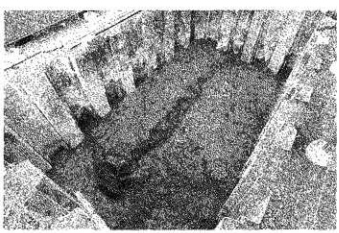


写真12 3区全景（南西から）

図15 3区全体図（1:100）

北半の地山面は、上部を削平されたものと思われ、包含層が存在した可能性もある。西寄りの地山面で、2基の遺構を検出した。

SK1は、痕跡的な状況に加えて、周囲の撹乱の影響が大きく、詳細は全く不明である。図15に示すように、深さは30 cm以上あって、比較的大型の遺構である印象を受ける。ただし断面形も、撹乱や注入セメントの影響を受けており、参考程度でしかない。

北壁際では、SK2とした落ち込みも認められた。検出面は、SK1とほぼ同じ高さの地山面であるが、1 m以上の東西幅があること以外は、不明である。

SK1・2ともに埋土は暗灰色で、弥生時代の遺構である可能性がある。

(5) 小結

朝日遺跡の調査は、遺跡の中心部を縦横に貫く国道22号線と環状2号線部分を中心におこなわれてきたため、これらの路線内については、遺跡範囲の東西南北の端がかなり明確に捉えられている。図9に見るように、第6次調査区より北方では、遺跡調査の機会は少なく、遺跡北東部の状況は明確ではない。1978年に、第5次調査J4区の北北東でおこなわれた朝日遺跡群発掘調査会による調査[注5]では、流路や方形周溝墓と考えられる遺構が捉えられている。この調査は、幅70cmの調査区が遺跡東部に設定されたため、遺跡の北限について明確な情報は得られていない。南方の方形周溝墓群がどこまで展開するのか、河道の正確な位置や遺構・集落との関連はどのような状況か等、大きな課題が残されている。ささやかな調査ではあるが、こうした積み重ねが、遺跡の実態を明らかにしていくはずである。

1区周辺では、現地表下1mに満たない深さに、良好な包含層または遺構が広がっているものと考えられた。弥生時代中期の土器が出土しているものの、わずかな範囲の情報であり、時期や遺構の存在・性格は不明である。1区の地山が標高2.3m前後にあって、2区よりやや高く、間に河道が存在した状況からは、2区以南とは様相が異なる可能性もある。

2区では弥生時代後期の土坑があるものの、周辺の状況はやはり明らかではない。3区との間の小規模な河道より以南では、方形周溝墓が密集するが、両側を河道にはさまれた2区周辺では、方形周溝墓も存在するものの、遺構はまばらな様子である。

3区のSK1は、1978年に愛知県教育委員会が調査した方形周溝墓の溝（SD079）[注6]の一部である可能性がある。5次調査J4区北東の朝日遺跡群発掘調査会による調査の「南区の土坑」[注7]が、方形周溝墓であるならば、少なくとも3区の北側を流れる河道以南は墓域が続いていたものと推定できる。3区のSK2も、方形周溝墓の一部である可能性が考えられるだろう。

第6次調査では、工事の進行と調査時期の関係で、一部の遺構・包含層が調査できなかったのは、遺憾であった。結果として得られた情報をここにまとめて、反省とともに今後の調査に結び付けていきたい。

註　1　愛知県埋蔵文化財センター　1991　『朝日遺跡』Ⅰ・Ⅲ、朝日遺跡群発掘調査会　1979　『朝日遺跡群中沼町地区発掘調査概要報告書』を参考にして作成した。
5　朝日遺跡群発掘調査会　1979　『朝日遺跡群中沼町地区発掘調査概要報告書』
6　愛知県埋蔵文化財センター　1991　『朝日遺跡』Ⅰ・Ⅲ
7　註5に同じ

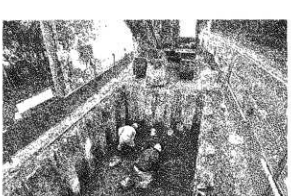


写真13　2区作業風景（西から）

写真14　5次J4区付近から西を見る

第II章　名古屋城三の丸遺跡第11次発掘調査

1　遺跡の概要

名古屋城三の丸遺跡は、市の中心街を南北に連なる台地の北端に位置した近世城郭である名古屋城の「三之丸」範囲を理蔵文化財包蔵地としている。これまでの発掘調査により、台地西側では、弥生時代の住居跡や古墳の周溝が検出されているほか、遺物のみであるが、細石核や縄文土器片も検出されている。また、当遺跡では、大永四年（1524）頃、織河守護今川義元が築き、天正十年（1582）頃廃城になったといわれる「那古野城」に関連すると思われる堀などが、各地点で検出されている。このような、実体が不明確である近世城郭の時期にいたるまでの遺構も、歴史的経緯として重要な当遺跡の特徴となっている。

今回の調査地点は、市教育委員会が行なった第8・9次調査（名城病院地点）の成果や城下絵図などによると、江戸時代初期の屋敷地割にともなって、「三之丸」内に造られた東西道路の「中小路」に重なる位置にあたるものと思われる。

2　調査の経過

今回の調査は、名城病院敷地の南側歩道部分で計画された下水管の埋設工事に伴設して行なわれたものである。基本的な工程は、幅約1.1mで、一日単位10−20mほどの距離を工事関係者の協力を得ながら掘削し、その日の調査記録をとったあとにひき続いて埋設管工事にはいるというものであった。

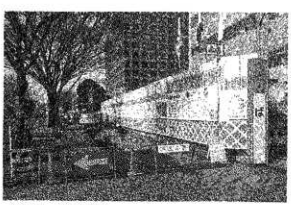


写真1　調査状況

図1　名古屋城三の丸遺跡と調査位置（東丸印）（1：25,000「名古屋北部」による）

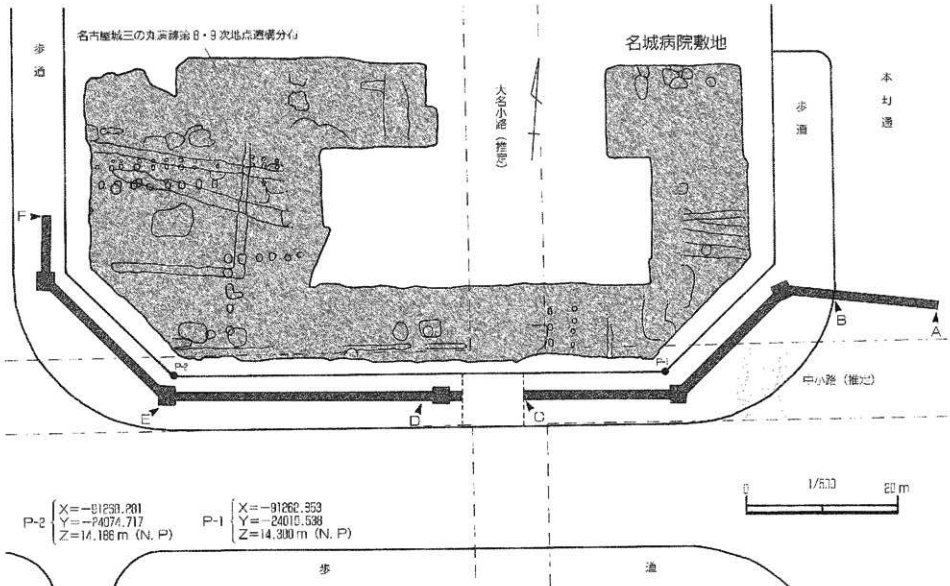

名古屋城三の丸演練第8・9次地点遺構分布
名城病院敷地
歩道
大名小路（推定）
本圦通
中小路（推定）
A
B
C
D
E
F
P-1
P-2
0
1/500
20 m
P-2 X=−91260.281 Y=−24074.717 Z=14.186 m (N. P)
P-1 X=−91262.353 Y=−24010.538 Z=14.300 m (N. P)

図2　調査区位置図(註1)

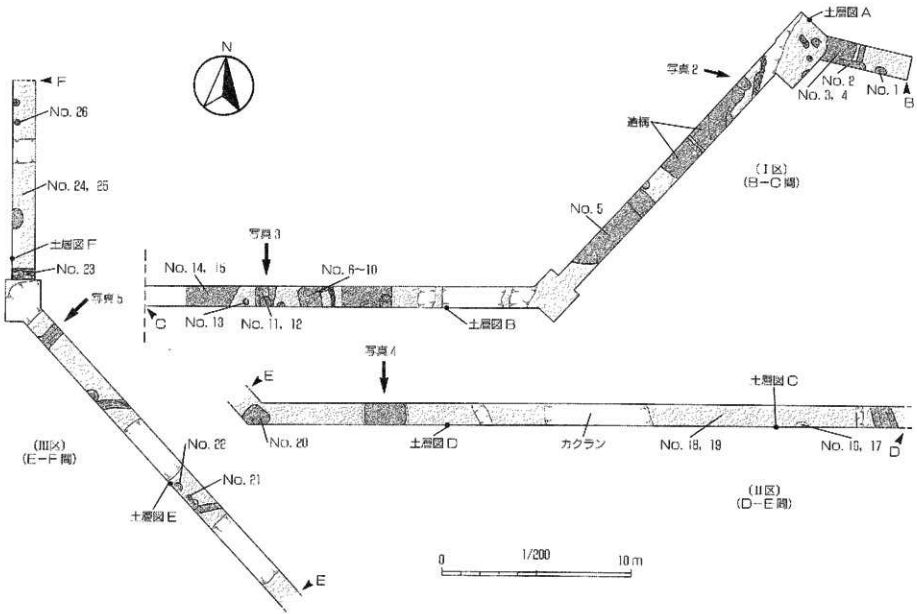


図3　調査区平面模式図（全体をI～III区に分割したもの）（No. 1～26は、表1遺物No. の出土位置を示す）

3　調査の概要

今回の調査区は、工事区の関係で東西に長いトレンチという状況であったが、その基本的な土層の堆積は図4に示したように、状態の良いところでは、地山の熱田層上に暗褐色土層が10～30 cmほど堆積していた。この土層からは、出土遺物がわずかしか検出されなかったが、中世末頃の包含層と推定される。また、図3のなかで、土層図C地点より西側では、熱田層上面部分に淡褐色土層が10～20 cmの厚さでのっている状況であり、これと同様の土層を、当遺跡の4次調査地点で委託分析した結果、降灰層準ではないものの、約6300年前の鬼界アカホヤ火山灰に由来する火山ガラスが検出されている[注2]。おそらく、調査区東側では標高が高く、この淡褐色土層が消失したものと思われる。

今回検出した遺構は、調査区の制約もあって形状や規模の不明なものがほとんどであった。当遺跡の第8・9次調査地点や、他の調査地点の成果を参考にし、17世紀前葉頃と思われる陶器類の破片など少量の出土遺物等からみると、「三之丸」の敷地割に関係すると思われる溝や、用途が不明確であるが、土坑等が検出されたものと思われる。

出土遺物は、平安時代の灰釉陶器椀片が南北方向の溝状遺構から検出され、今回の調査では、もっとも古い時期の遺物であるが、遺構の時期は近世初頭頃かと思われる。中世の山茶椀片も包含層等から出土している。江戸時代では、溝、ピット、各土坑においても遺物の量が大変少ないが、遺構から出土した瀬戸美濃製品の陶器片や土師質鍋類の時期は、17世紀前半頃までの製品と思われる。

写真2　I区

写真3　I区

写真4　II区

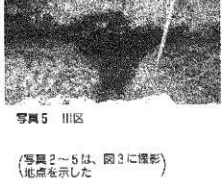
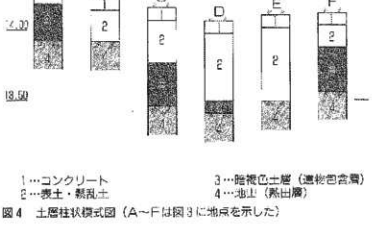


写真5　III区

（写真2～5は、図3に撮影地点を示した）



1…コンクリート
2…表土・攪乱土
3…暗褐色土層（遺物包含層）
4…地山（熱田層）

図4　土層柱状模式図（A～Fは図3に地点を示した）

表1　出土遺物一覧（図3にNo. 1～26として出土地点を示した）

No.	出土位置	器　種	備　考
1	4区 P1	長石粗小碗	（図5の6）志野、底部内外面に目跡、17世紀前半
2	4区 P2	掻落天目茶碗	腰部小片、瀬戸美濃陶器、17世紀
3	4区 P4	丸瓦	（図5の8）17世紀か
4	4区 P4	土師質鍋	底部小片、17世紀か
5	7区 SK01	染付磁器碗	飯茶碗片、明治～大正
6	8区 SK01	鉄釉甕か	瀬戸美濃陶器、17世紀か
7	8区 SK01	土師質鍋	胴部小片、17世紀か
8	8区 SK01	鉄釉大目茶碗	（図5の7）瀬戸美濃陶器、17世紀
9	8区 SK01	土師質鍋	腰部小片、17世紀か
10	8区 SK01	土師質皿	口部、底部小片、ロクロ成形、17世紀か
11	8区 SD02	灰釉陶器碗	（図5の1）猿投窯品竿14号窯式期
12	8区 SD02	土師質鍋	胴部小片
13	8区 P6	土師質羽釜	（図5の4）15～16世紀初か
14	8区 SK04	鉄釉碗か	胴部小片、17世紀
15	8区 SK04	土師質鍋	胴部小片、17世紀か
16	9区 P1	天目茶碗	口部、胴部片、黄白色釉、瀬戸美濃陶器、17世紀か
17	9区 P1	土師質鍋	（図5の5）17世紀か
18	9区包含層か	染付碗	底部片、肥前磁器、17世紀末～18世紀前半
19	9区	染付碗	口部小片、磁器、ガラス質ぎ、18～19世紀
20	9区 SK02	平瓦	（図5の9）17世紀か
21	10区 P2	掻落天目茶碗	胴部小片、瀬戸美濃陶器、17世紀
22	10区 P3	土師質鍋	口部小片
23	11区 SD01	瓦	小片、丸瓦か
24	11区包含層か	山茶碗	（図5の2）北部系、15世紀
25	11区	施利	小片、「お通い施利」か、19世紀後半
26	11区 P1	山茶碗	（図5の3）南部系、13世紀前葉

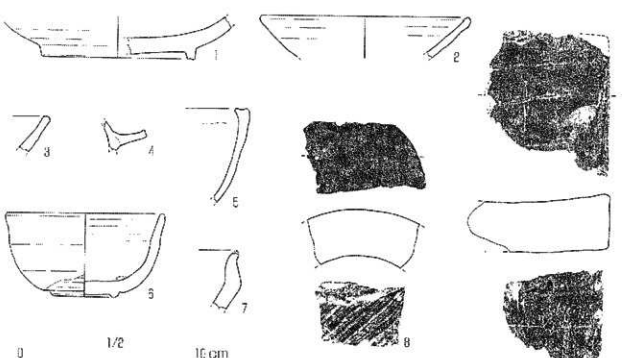


図5　主な出土遺物

4　小結

今回の調査地点は、慶長十五年（1610）に築城が始まった名古屋城の「三之丸」にあった東西道路である「中小路」に重なる部分が多いと思われる。

調査の結果、江戸初期の地割に関係すると思われる溝や土坑などが検出された。これらの土坑などは、同じ頃、屋敷の建築作業などにも関わって造られたものと思われる。同様な例が、「三之丸」の南東隅付近で行なわれた市教委の第１次発掘調査（名古屋市公館地点）[注3]でも検出されている。ここでは、南北の「東御土居通」と東西の「南御土居筋」がぶつかる角地の部分を調査したが、道路部分の地山面にも多数の遺構（土坑や柱穴）が検出された。これらの遺構の時期は、江戸初期のものであり、建築作業に関係する小屋や、足場の跡、土取り坑、廃材の処理等の用途が考えられた。

このように、今回の調査地点においても、近世、近代を通じて道路部分となっていたところでは、江戸初期の遺構、遺物が検出され、その後の時期の遺構が検出されなかったものと思われる。

註　1　名古屋市見晴台考古資料館　1997『名古屋城三の丸遺跡　第８・９次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会の挿図を引用、作成した。
　　2　パリノ・サーヴェイ㈱　1994『名古屋城三の丸遺跡第４次発掘調査　自然科学分析報告』による。
　　3　名古屋市見晴台考古資料館　1989『名古屋城三の丸遺跡　１・２・３次調査の概要―』名古屋市教育委員会
　　4　『尾府名古屋図』、宝永６年（1709）頃写　名古屋市蓬左文庫所蔵古地図複製 No. 1 による。

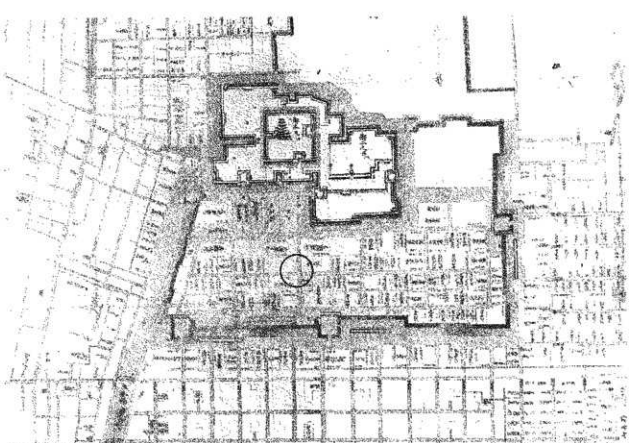
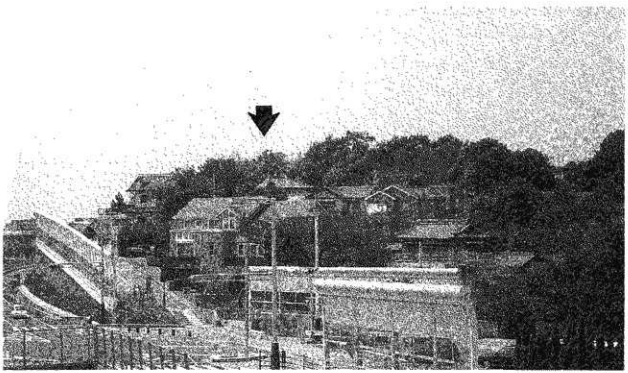


写真８　城下町絵図[注4]による調査位置（丸印）

VI　茶臼山古墳第３次発掘調査



茶臼山古墳遠景（南東から）

もくじ

1．位置と環境 …… 85
2．これまでの調査 …… 86
3．調査の経過 …… 88
4．遺構と遺物 …… 88
5．まとめ …… 88

例　言

1．本編は、名古屋市守山区小幡字北山地内で実施した茶臼山古墳第３次発掘調査の報告である。

2．調査は、下水道の築造に伴い実施した。期間は、2000年７月３日から同年７月28日まで、対象面積は60 m²であった。

3．調査に関する事前の調整は文化財保護室が、現地での調査は見晴台考古資料館が行った。現地調査の担当者は、野澤則幸、村木誠であった。本編の執筆は村木が行った。

名古屋市の地形と茶臼山古墳の位置

1．位置と環境

茶臼山古墳は、守山区小幡字北山に所在する。守山区は、名古屋市の北東部に位置し、北は庄内川に、南は矢田川に画された細長い形である。北は春日井市と接し、南及び東は瀬戸市、尾張旭市と接している。

地形的には、区の北東端の東谷山から連なる尾張丘陵が区域の中央付近までのびている。その南側には、守山台地、小幡ケ原台地という中位段丘が形成されている。茶臼山古墳が所在する小幡は、その台地上にある。茶臼山古墳は、この台地の北東に位置する、標高 50 m 程度の丘陵の先端に立地している。すぐ下の台地面との比高差は 10 m 程である。

周辺には、南西 300 m の地点に全長 65 m の長塚古墳、南東 300 m の地点には、全長 45 m の池下古墳という 2 基の前方後円墳の存在が知られている。茶臼山古墳は、この 2 基の前方後円墳を見降ろす位置に立地している。茶臼山古墳の周辺から古墳の副葬品の可能性の高い鉄製品の出土も知られており、滅失した古墳の存在も想定されている。

3 基の前方後円墳は、池下古墳→長塚古墳→茶臼山古墳の順であると想定されている。

この内、池下古墳は、愛知県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施され、築造過程や出土遺物について詳細に報告されている。また、池下古墳のすぐ南には、直径 20 m 程の円墳である、池下南古墳が所在する。また、この他にも、茶臼山古墳の眼下の台地上には、小幡古墳(小幡小林古墳)、先生塚古墳等があったことが知られているが、既に滅失している。また、古墳時代の集落遺跡については、ほとんどわかっていない。

1-138　茶臼山古墳　　1-135　先生塚古墳　　1-136　大森大塚古墳
1-137　池下古墳　　1-139　長塚古墳　　1-140　小幡古墳（小幡小林古墳）

第 1 図　茶臼山古墳と周辺の遺跡

2．これまでの調査

茶臼山古墳については、1960 年に墳丘測量とトレンチ調査が行われ、「長軸の長さ 63 m、後円部の直径 40 m、高さ 7 m、前方部の幅 35 m、高さ 6 m」というデータが示された。その後、1989 年に名古屋市教育委員会が 2 回にわたって発掘調査を実施している。

その結果、茶臼山古墳については以下の事が明らかとなった。

全長約 60 m、主軸方向は N-55°-E を示す前方後円墳である。前方部は南東側にのびる。前方部から後円部に向かって、右側に造り出しがある。左側については、大きく削られているため、墳丘の本来の姿はわからない。周濠は、後円部で幅 6 m ほどである。

埋葬施設は、後円部の中心から括れ部に向かって開口する左片袖の横穴式石室である。その開口する方向は、ほぼ南を示している。盗掘を受けており、玄室については大きく破壊され、石室の立面については不明な点が多い。平面形については、石材の抜き取り痕等からの推定も含めて、以下のように復元されている。玄室は、幅 2 m 前後、全長 4.8 m 程度の長方形を呈する。羨道は、築造後の継ぎ足し、改造がされているが、本来の規模では、長さ 3.4 m、幅が 1.4 m 程である。玄室内は撹乱を受けていたが、その撹乱土中から出土した加工石材から、組合式家形石棺が置かれていたことが想定されている。

出土遺物は、石室内から土師器、須恵器のほか、鉄刀、鉄鏃、馬具等が出土している。また、金環、銀環、ガラス小玉等もある。周濠では、造り出しの付近から、大型の甕、器台、高杯等の破片が数多く出土している。須恵器等を手掛かりとして、6 世紀中葉頃の年代が想定されている。

〈参考文献〉

名古屋市見晴台考古資料館　1990 『茶臼山古墳発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会

服部哲也　1997 「名古屋市小幡茶臼山古墳の再検討―「陵内の影響」の具体性について―」『古文化論叢―伊達先生古稀記念論集―』 伊達先生古稀記念論集刊行会

樋上昇編　1991 『地下古墳』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

写真 1　茶臼山古墳石室（2 次調査）

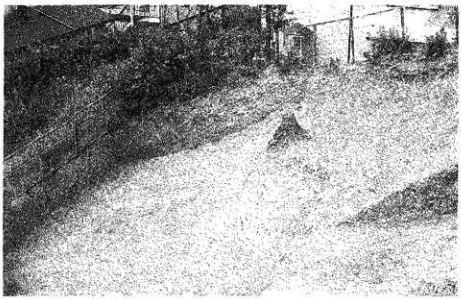


写真２　遺出付近周濠断面
（２次調査）

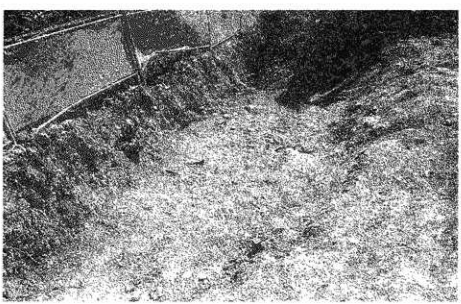


写真３　遺出付近遺物出土
状況　（２次調査）

写真４　石室内遺物出土状況
（２次調査）

3．調査の経過

調査は、下水道の建設に先立って実施した。調査区は、幅1m弱、全長80mのトレンチ状である。下水道工事の進み方と合わせて調査を実施したため、1回の調査単位は5～10m程度の長さであり、それを1日に2～3回繰り返し行った。後述するように、この調査区は、ほぼ古墳の周濠を縦断しているのであるが、工事の都合もあって、周濠埋土上面での遺構検出や周濠埋土の掘削が十分な精度で実施できたとは言えず、主に調査区の断面図の作成を中心とした調査となった。現地での調査は、2000年7月3日から同年7月13日まで実施した。その後見晴台考古資料館で、作成図面や出土遺物の整理作業を実施した。

4．遺構と遺物

今回の調査区は、茶臼山古墳の南東側に沿っており、これまでの調査の成果から、ほぼ周濠内を縦断することが想定された。調査の結果、予想通り、茶臼山古墳の周濠を検出した。第2図に、調査区の墳丘側の断面図を示したが、この内2～8が周濠の埋土になるものと思われる。2層は、橙色の礫混じりの土であるが、本来墳丘の盛土であったものが流出した土であろうと思われ、周濠以外の部分でも堆積していよう。そのため、平面図に示した周濠範囲の北端は、7層がなくなる地点で示した。5、6層は、造り出し付近に見られる土層であるが、6層からは須恵器の甕の破片等が多く採集できた。この造り出し以外の地点では、須恵器等の遺物はまったくなく、遺物は造り出し付近にのみで発見された。周濠の横断面についての情報がほとんどないため、深さについては、あくまで掘削部分の深さに過ぎないが、最も深い部分で、2層（及びそれに類する土）の下から、40cmほどであった。

また、調査は周濠の外にまで及んだが、僅かな表土の下はほぼ地山といった状況で、古墳と関連するような遺構の痕跡は見られなかった。

造り出し付近で出土した須恵器は、何れも細片で、図化できたものはなかった。器種としては、甕や器台と思われるものの破片があり、過去の調査で出土したものと同じ性格のものであろう。

また、この造り出し付近で、周濠内から中世の山茶碗の破片1点（第2図・写真5）も出土している。

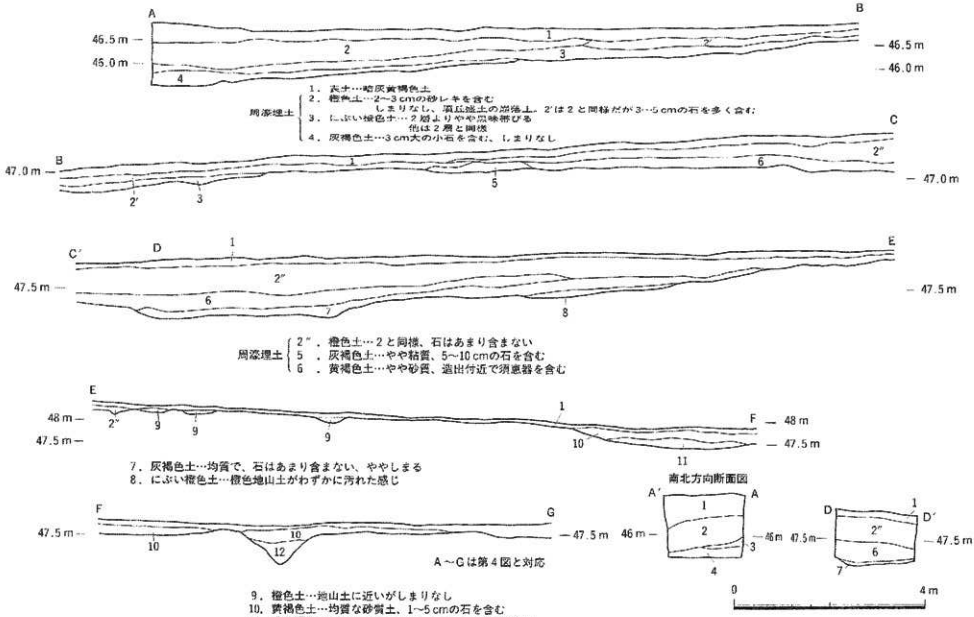
5．まとめ

今回の調査区は、茶臼山古墳の周濠の中央を縦断しており、予定通り周濠を検出した。前回までの調査で、墳丘の裾の水準値が、前方部のほうが後円部より1.4mほど低く、それに応じて、周濠底の水準値も前方部のほうが低い事が指摘されていた。今回の調査でも、断面図から明らかなように周濠の底は前方部から後円部に向かって徐々に上がっていることが確認できた。

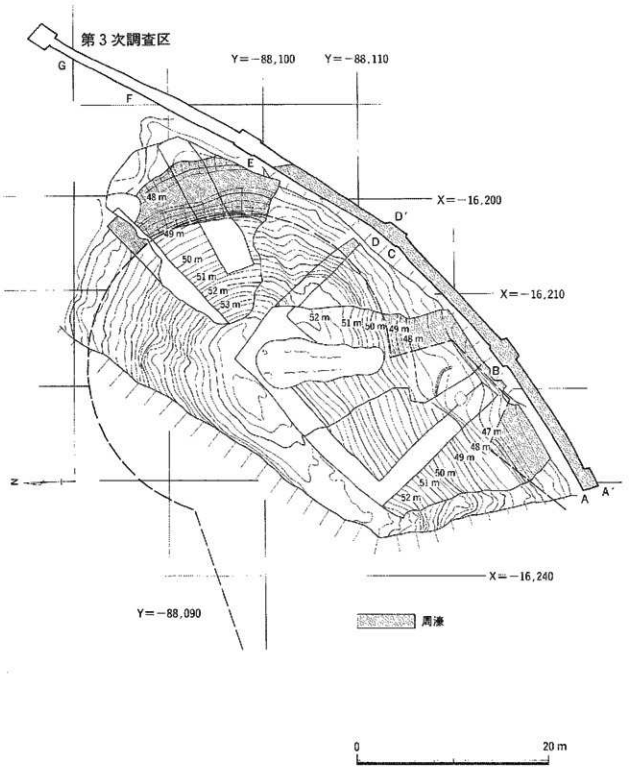
また、周濠を縦断して掘削したが、遺物が出土したのは造り出し付近のみであり、本来須恵器のあった位置を反映しているのだろう。

第2図　出土遺物

写真5　出土遺物(1)



第3図　調査区壁面断面図



第4図　調査区平面図（過去の調査平面図に加筆）

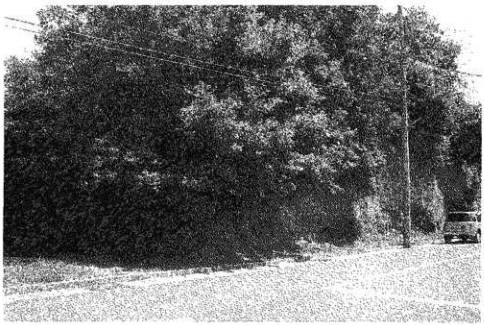


写真6　茶臼山古墳現況（北西から）

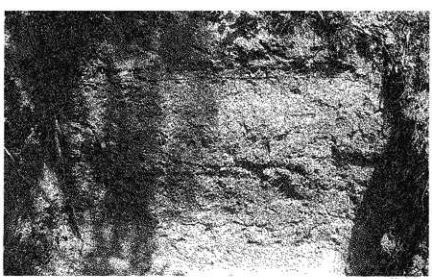


写真7　調査区墳丘側断面
（第4図 A地点付近）

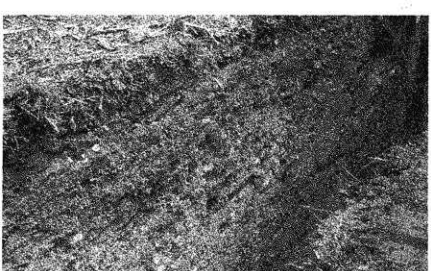


写真8　調査区墳丘側断面
（第4図 A-B中間点付近）

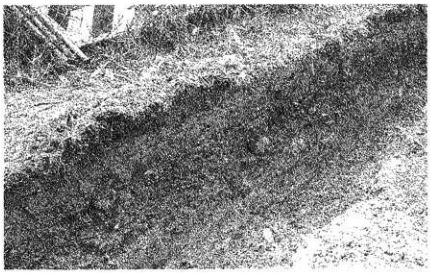


写真9　調査区墳丘側断面
（第4図 B-C 中間点付近）

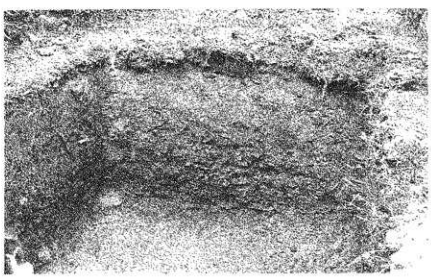


写真10　調査区断面
（第4図 D-D'）

写真11　出土遺物(2)　須恵器

写真12　出土遺物(3)　須恵器

Ⅶ　千音寺遺跡第３次発掘調査

もくじ

1　位置と環境 …… 95
2　調査の経過 …… 97
3　調査の成果 …… 98
4　小結 …… 104

例　言

1　本編は、名古屋市中川区富田町大字千音寺に所在する千音寺遺跡の第３次発掘調査の報告である。

2　本調査は、市営住宅の建築工事に伴うもので、４調査区で合わせて面積約350㎡を対象とした。

3　本調査は、平成12年７月31日から同年９月21日までおこなった。

4　本調査は、名古屋市教育委員会が実施し、見晴台考古資料館学芸員、村木誠、野澤則幸が担当した。

5　発掘調査及び資料整理に関しては、下記の皆様にご指導、ご協力を頂いた。
種田祐司、下村信博、池戸祐子、川原則子、小浦美生、近藤和子、名古屋市住宅都市局、角山造園

6　本編は、館学芸員の協力を得て野澤が執筆した。

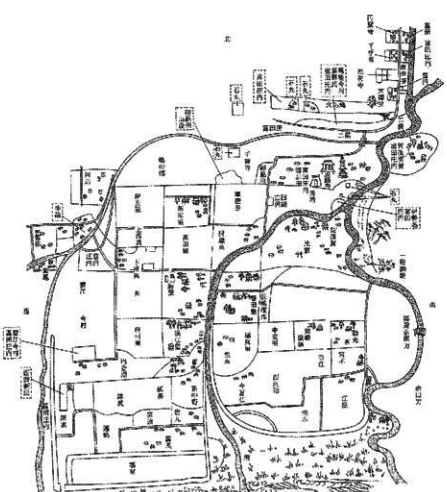


図１　富田荘絵図（上村1986より）

1　位置と環境（図１～４）

千音寺遺跡が所在する名古屋市中川区富田町大字千音寺周辺は、庄内川下流域のデルタ地帯に位置している。旧河道と小規模な自然堤防、そして低湿な三角州から成る当地域は、現在では、わずかな微高地上に集落が位置し、低湿な土地は水田として利用されている（図２）。排水のあまり良くない低湿田は、最近では都市近郊の住宅地として開発が進められている状況である。

当遺跡周辺は歴史的にあまりにも有名な「尾張国富田荘絵図」（図１）に「千音寺」の地名が書き記されており、中世の荘園研究に関連して考古学的な研究の積み重ねが期待されている地域である。遺跡の範囲は南北約１km、東西約600ｍの広範囲に及ぶとされている。過去の１・２次と今回の調査区は遺跡範囲の南端側にあり、微地形（図３）の上では三角州下位面に位置している。遺跡範囲の中央部分は後背湿地にあるので居住地としては不向きで、その痕跡の密度は粗である可能性が高いが、その北側は庄内川の旧河道の自然堤防上に広がっており、濃密な居住の痕跡が推定されるところである。デルタ地帯にある中世の遺跡の立地としては全体的には比較的諸条件に恵まれていたものと考えられる。

本遺跡周辺の遺跡分布を見ると（図４）、荘園開拓時代に前後する頃の遺跡の実態はあまりにも不明である。富田町前田に伏屋遺跡や前田城、助光城跡、富田町戸田で戸田Ａ・Ｂ遺跡や戸田城跡等が知られる程度である。低地であるが故に土に埋もれて日の目を見ていない遺跡が数多くあると見るべきであろう。それらの発掘調査は現在のところ実施されていないので、絵図に記された寺社や屋敷等の建築物、また、堤防や条里遺構等の土木構築物など、マクロ的な視座で考古学的に検証される機会が期待される現在である。

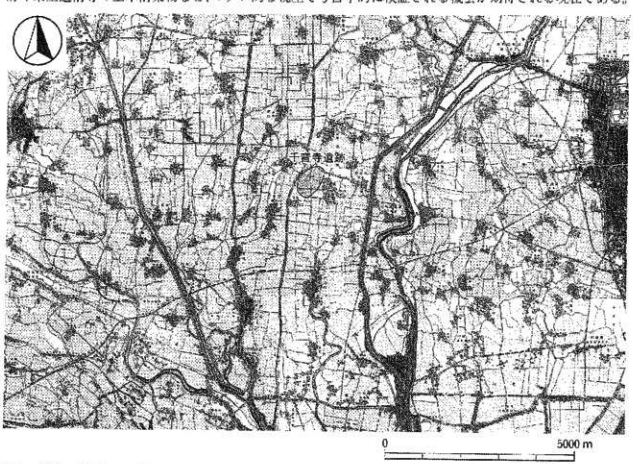


図２　遺跡の位置とその周辺（明治24年）（1：100,000）

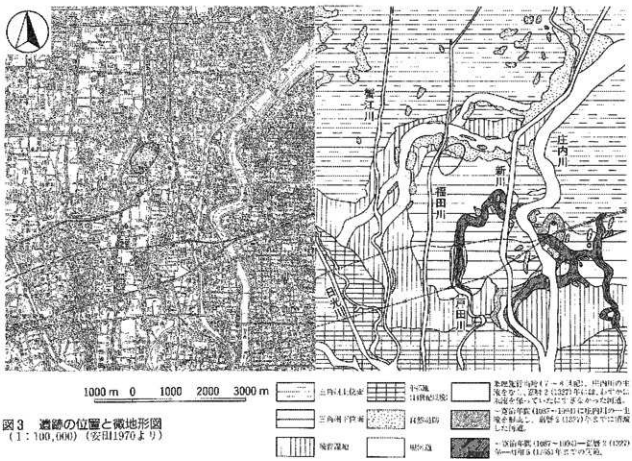


図3　遺跡の位置と微地形図
（1：100,000）（安田1976より）

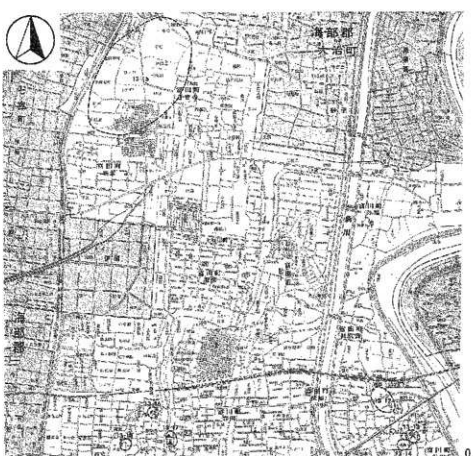


図4　遺跡分布図（1：28,000）

2　調査の経過（図５）

千音寺遺跡では、平成10年度と11年度の２次にわたりすでに市営住宅の建て替え工事による発掘調査が実施されている。その成果としては、中世の屋敷地に伴う溝や土壙などの遺構と共に、土器や山茶碗を主とした出土遺物を得ている。遺跡の主体となるのは12・３世紀であるが、千音寺の地名が書き記された「富田荘絵図」が作成された14世紀前半以降、15世紀まで確実に遺跡が継続することなど、重要な知見が得られている。そこで、平成12年度においても、前回の調査区と直接隣接する地点が市営住宅の関連工事が行われることから、４箇所で合計の面積が350㎡を対象として、７月31日に発掘調査を開始する運びとなった。

７月31日～８月２日（３区）調査区設定、表土除去、包含層掘削。
８月３日～８月８日（３区）遺構検出。写真撮影の後、測量。試掘を行った後、埋め戻し。
８月９日～８月10日（２区）表土除去を行った後、盆休みの為の場内整備。
８月17日～８月24日（２区）包含層掘削。遺構検出、写真撮影、測量。埋め戻し。
８月25日～８月29日（１区）表土除去、包含層掘削。２次調査のF区と一部重複するのを確認。
８月30日～９月１日（１区）遺構検出、遺構掘削、写真撮影、測量、埋め戻し。
９月４日～９月８日（４区）表土除去、包含層掘削、遺構の検出と掘削、写真撮影。
９月11日～９月21日（４区）11日から２日間、大雨のため作業中断。13日から排水を行い、14日測量。
その後、排土の乾燥するのを待って、埋め戻しを行い、完了する。

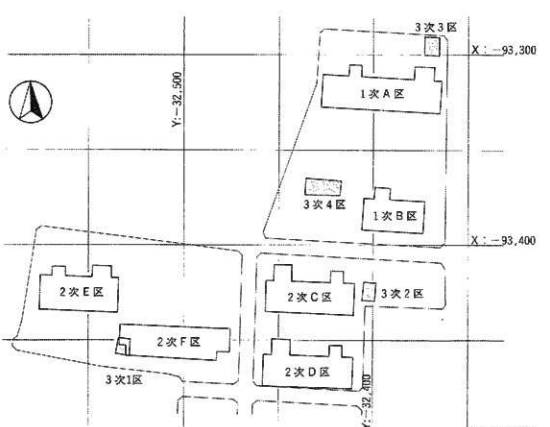


図５　調査区配置図（１～４区）

3　調査の成果

(1)　1区調査区（図6・7）（写真2～4）

6月の事前打ち合わせでは1番初めに発掘して欲しいと言われていた調査区であったので、1区と名付けた。以下の調査区名も同様の意味であったが、実際の順番は調査の経過にあるとおりで、変更があった。

1区はホンプ室の建築に伴う調査区で、面積約60 m²を対象とした。地表面から深さ60 cm程のところまでは砕石や盛土で構成される表土層で、その直下に山茶碗や近世陶磁器片を少量含む黒灰色シルト層がある。出土遺物には中世の山茶碗や近世の陶磁器がわずかに認められている。以下の橙灰色シルト層では古代の須恵器や中世の山茶碗（写真42・7）、常滑の甕（3）、近世以降の施釉陶磁器（4～6）、土師器（8）等が粉々となった状態で少量認められた。それより以下の青灰色シルト層の上面において遺構検出を行った結果、小穴のP1とP2、SD01を確認した。P1とP2は直径が50 cmに満たない規模の小穴で、出土遺物としては、P2で近世の灰釉小皿片1点（1）があったにすぎない。SD01は幅約40 cm、長さ約180 cmを測る規模である。P2を切って、SD01が掘り込まれている。出土遺物は認められなかった。本調

写真2　1区調査風景（西から）

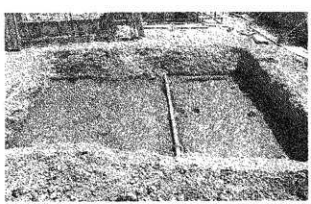


写真3　1区全景（西から）

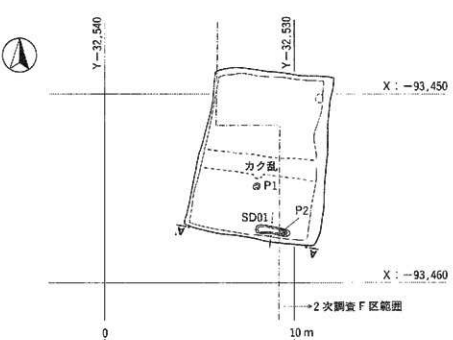


図6　1区平面図

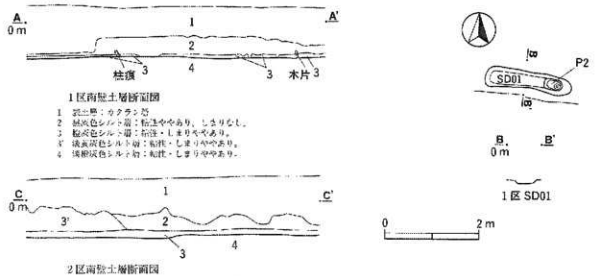


図7　1・2区土層断面図及び1区 SD01実測図

査区では中世にさかのぼる遺構は認められなかった。また、本調査区と２次調査のＦ区と一部重なり合っていることが確認され、結果的に、調査区の北側から東側にかけて約半分ぐらいの範囲が重複部分であることが判明した。Ｆ区では時期不詳の溝や土壙が検出されているが、総じて遺構の密度が少なく、概ね近世以降の土地利用（水田、畠畑）によって、その保存状態を損なったように想定されている。本調査区も同様の状況が追認できたと言える。出土遺物も相応してごくわずかで、いずれも小破片で摩滅していることから、二次的な再堆積の状況が想定される状況であった。なお、青灰色シルト層まで掘り下げると、水がじわじわと湧き出る状況で、水汲み作業をしながらの発掘作業を強いられることとなった。

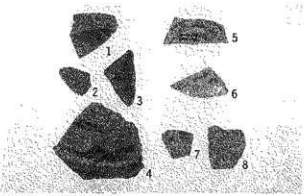


写真4　1区出土遺物

写真5　2区調査風景（西から）

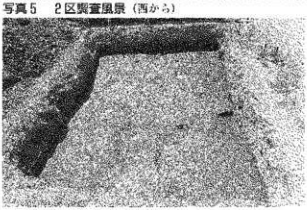


写真6　2区全景（北から）

(2)　2区調査区（図7・8）（写真5～8）

2区はポンプ室の建築に伴う調査区で、面積約70㎡を対象とした。地表面から深さ1m程の範囲までは砕石や盛土で構成される表土層で、その下位に黒灰色シルト層があり、山茶碗(写真8-1・3）や土師器（2）、近世陶磁器（4～6）、さらには現代のビニール片等が混ざる状況であった。

加えて、腐敗臭がするなど、近年の盛土であることが理解された。調査区の東側では黒灰色シルト層の堆積がなく、替わりに淡茶褐色シルト層が認められた。粘性・しまり共に強く、乾くとカチカチに固まる土質である。山茶碗の小片をわずかに認めている。それより下位には褐灰色シルト層が厚さ15cm前後で水平堆積している。出土遺物には古代の須恵器（9）や中国陶磁の青磁（7）、山茶碗（8）、近世の施釉陶器（10）まで混在する状況であった。いずれも小破片で摩滅しており、二次的な再堆積が想定される状況であった。それより下位の淡褐灰色シルト層の上面において遺構検出を行った結果、遺構は認められなかった。本調査区と近接する2次調査のC区でも、山茶碗を伴う土壙や溝が若干あるものの、遺構の密度は同じように稀薄であった。近世以降の土地利用（水田、畠畑）によって、その保存状態を損なったことが推定される。

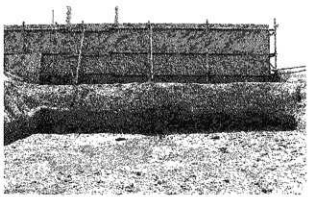


写真7　2区土層断面

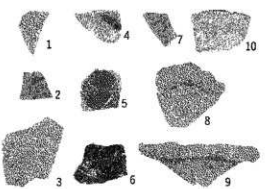


写真8　2区出土遺物

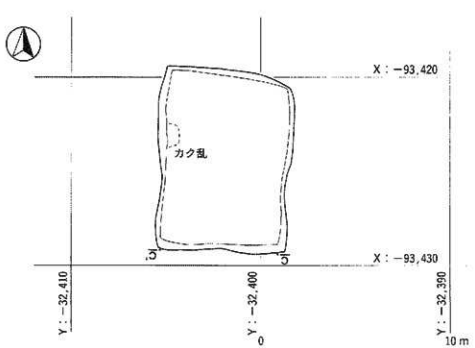


図8　2区平面図

(3)　3区調査区（図9～11）（写真9・10）

3区はポンプ室の建築に伴う調査区で、面積約70 m²を対象とした。地表面から深さが80 cmから1m程の範囲までは砕石や盛土で構成される表土層で、その下位に黒灰色シルト層がある。山茶碗（写真10-1・3）や土師器（2）、近世陶器（4～6）等が混在する状況であった。およそ2・30 cmの厚さで水平に堆積しており、以下の橙灰色シルト層に続く。ここでは中国陶磁の白磁玉縁碗（5）（図9-1）や常滑の甕（写真10-9）、山茶碗（6）、土師器（7）、灰釉小皿（4）、近世の施釉陶器（4）等が混在する状況が見られた。より下位の淡橙灰色シルト層の上面で遺構の検出作業を行ったが、小穴ひとつ認められなかった。淡橙灰色シルト層において水が湧き出る状況であった。本調査区と近接する1次調査のA区では、山茶碗を主とした12世紀から14世紀代の遺物を伴う土壙や溝が比較的多く検出されている。3区における出土遺物の様相も基本的に変わることはなかった。

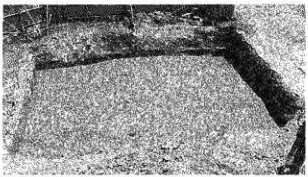


写真9　3区全景（西から）

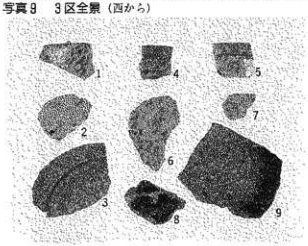


写真10　3区出土遺物

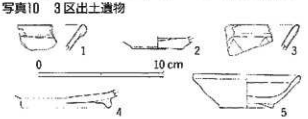


図9　遺物実測図（3・4区）

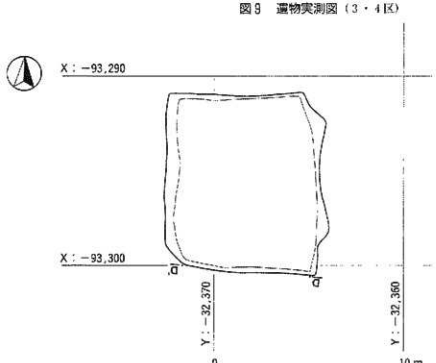


図10　3区平面図

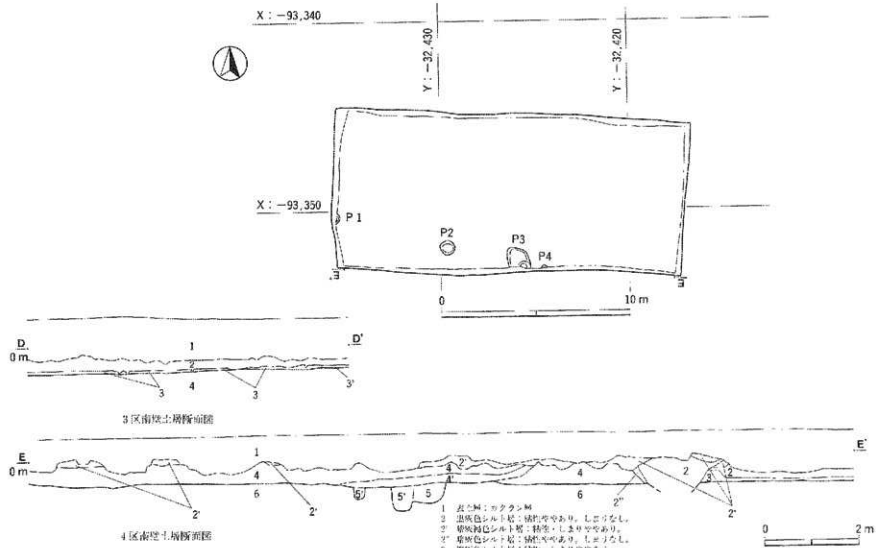


図11　4区平面図及び3・4区土層断面図

(4)　４区調査区（図 11・12）（写真 11～13）

４区は集会室建築に伴う調査区で、第３次調査の内では最も広く面積約 150 m² を対象とした。地表面から深さが浅い所で 50 cm、深い所では１m 近くまでが表土層で、砕石や盛土で構成されている。その下位に黒灰色シルト層が部分的に遺存する状況で、出土遺物としては古代の須恵器や中世の山茶碗、土師器（写真 13-4）、近世の施釉陶器（１～３）等が混在して認められた。（５）（図 9-5）の小皿は４区付近での採集品である。以下の淡茶褐色シルト層は比較的厚く堆積しており、厚い所で約 50 cm 遺存している。ここでも出土遺物の様相はあまり変化がなく、中世の中国陶磁の青磁（７）（図 9-3）や山茶碗（９・10）（図 9-2・4）、土師器（６）、常滑の甕（11）、近世の施釉陶器（８）等が混在して出土している。これより下位の淡青灰色シルト層上面で遺構検出作業を行った結果、小穴を４基確認している。うちＰ３は短径で１m 強を測る比較的規模の大きなものである。他の３基は部分的な調査に留まるものもあるが、おそらくは比較的小規模なものであろう。Ｐ１で山茶碗の小片１点、Ｐ２とＰ３で中世の土師器の小片が１点ずつ出土しており、おそらくは中世の遺構と思われるが、明確な時期は特定しにくい。４区に近接した１次調査のＢ区では、調査区の西側では柱穴が密に分布し、東側では井戸や溝が検出されており、溝で区画された中世の屋敷地であることが想定されている。西側に近接する本調査区の状況は、大きく異同がなく、屋敷地の続きがあると理解できる状況であった。

写真11　４区調査風景（東から）

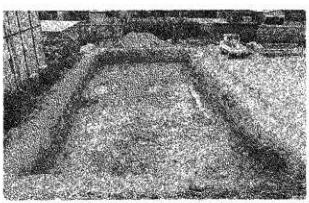


写真12　４区全景（東から）

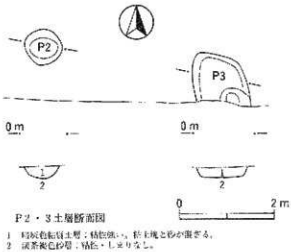


図12　４区遺構実測図

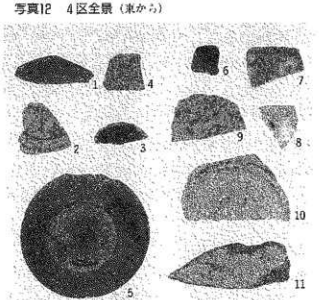


写真13　４区出土遺物

4　小結

第3次調査は、4調査区合わせて約350 m²と面積が狭小ではあるが、過去の2次にわたる調査の成果を追認する意味で有益な機会であったと思われる。結果として、中世にさかのぼる可能性のある遺構としては、4区で検出した掘立柱建物跡の存在がうかがわれる遺構が若干ある程度で、出土遺物も相応する内容であった。しかしながら、1次調査のB区で確認された屋敷地の存在が単的に示しているように、12・3世紀代を主体とする痕跡がまばらに広範囲にわたって遺存していることが想定できそうである。何故、遺構や遺物の密度が少ないかについては、本遺跡を取り巻く歴史地理的な背景を念頭に置く必要がある。当地周辺は庄内川下流域のデルタ地帯にあり、遺跡範囲の北側部分では旧河道の形成した自然堤防上にあるものの、その南側では後背湿地となり、さらに南側の本調査区周辺は三角州下位面となっている。その歴史的な解釈としては、荘園開拓時代に大規模な堤防が築かれ、河道が固定された結果、洪水による土砂の堆積が周囲より少ないことが、土地の低湿化につながる主要因と考えられている。また、歴史時代を通して恒常的に地盤沈下している地域でもある（安田 1970）。加えて、後世において様々な土地利用で土取りが行われることもしばしばあったことが想定される。荘園研究史上、世に知られる「尾張国富田荘絵図」の中で「千音寺」の地名が記された地域は、富田荘の荘域外ではあるものの、荘園の中核を成す十二ケ里の北側に隣接しており、また、その東西両側には領家分の管理地が推定される「御品田」の領域がある。さらにその東側には、当時は天台系の官僧寺院であった「成願寺」の堂塔が威容を誇っている。現在の真言宗智山派の自性院に法灯が受継がれており、その創建年代は「円覚寺文書目録」や「自性院縁起」等にあるように、13世紀以前には確実にさかのぼり得るのである。これらの絵図にある「千音寺」から「御品田」、「成願寺」にかけての地域一帯は、当地周辺にあっては土地開発の上で先進的な地域であったことが知られるのである。円覚寺の支配領域図として作成された絵図（上村 1986）には、荘内については寺社や家屋等の多くの情報が盛り込まれているのであるが、荘外の多くは地名のみにとどまっている。「千音寺」についても同様であるが、発掘調査によって、絵図の作成年代（14世紀前半）をさかのぼる頃に比較的規模の大きな屋敷地があったことが知られた。これを絵図と比較すれば、多数散在する百姓在家と推定される小規模な家屋より、一回り規模の大きな名主屋敷クラスであったことが推定される。これらのことを踏まえて絵図を眺めると、村落領主と在家のセットで捉えられる家屋や神社の建築群、庄内川の渡舟場に成立した新仏教の寺院が立ち並ぶ「萱津宿」、絵図にはない対岸にあったはずの宿（中村区宿跡町）等の多くの遺跡群の存在が認識されるのであるが、現在のところ埋蔵文化財包蔵地として周知されている所はあまりにも少ない。地籍図を見ながら現地を踏査してみると、遺物散布が濃密に認められる所であったり（萱津宿周辺）、中世城館の名残をとどめる地割であるとか（千音寺行雲寺周辺）、それと解る地名が案外多く残っているのである。今後の各種開発に備えて、意識的にその存在を注視していく必要が強く求められよう。

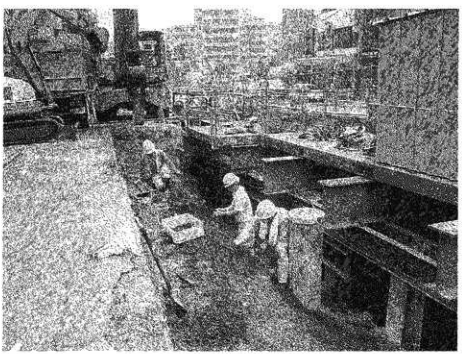
主な引用・参考文献

安田喜憲　1970　「尾張国富田庄の歴史地理学的研究」『立命館文学』第303号

上村喜久子　1986　「絵図にみる富田荘の開発と形成」『名古屋短期大学研究紀要』第24号

名古屋市教育委員会　2000　『千音寺遺跡（第1・2次）』埋蔵文化財調査報告書35

Ⅷ　H-113号窯立会調査



調査風景

もくじ

第1章　調査の経過 …… 107
第2章　古窯の位置と立地環境 …… 108
第3章　調査概要 …… 110
　1　灰原 …… 110
　2　遺物 …… 112
第4章　まとめ …… 123

例　言

1．本編は、H 115号窯の立会調査報告である。

2．調査に係わる調整事務は、市教育委員会文化財保護室が、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。

3．所在地、調査期間、調査原因、調査面積、担当者は以下の通りである。

所 在 地　名古屋市昭和区山手通三丁目

調査期間　平成12年6月8日・12日・21日

調査原因　地下鉄工事

調査面積　18 m^2

担 当 者　伊藤厚史・伊藤正人・藤井康隆

4．出土遺物の洗浄、接合復元、実測は、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木佳子、山本雅代、稲田富子による。

5．本編は、伊藤厚史が執筆した。

第1章　調査の経過

本窯は、名古屋市昭和区山手通三丁目、山手通地内に位置する。山手通では、名古屋市交通局によって、地下鉄4号線の工事が進められており、今回報告することとなった窯跡は、その工区内で検出された。検出されたのは、灰原の一部である。

2000（平成12）年6月8日、名古屋市交通局高速度鉄道建設部第三工事事務所から、教育委員会文化財保護室に対して、工事現場から陶器が出土する旨連絡があった。そのため、文化財保護室と見晴台考古資料館から職員3名が現地に向かい、現状を調査した。

現地は、地下鉄八事日赤駅建設予定地で、山手通の車道部分を地下約3mまで掘削しており、道路面には覆鋼板をかけて道路として使用している状況であった。調査の結果、出土遺物は灰釉陶器であること、遺物は窯跡の灰原から出土し、灰層の一部は残存していることが確認された。残存している灰層は、道路ほぼ中央部分の下約3mの部分と、そこから約8.4m西方下約1mの部分の2か所に分かれていた。すなわち灰原は、西から東に向かって傾斜する地形に堆積していたことが明らかとなった。

丘陵地の開発に伴う山手通の築造工事では、谷筋にあたる部分は埋め立てられたため、本窯は知られることがなかったものである。隣近には H-20（東山第20）号窯（時期不明・滅失）が周知されていたが、別の窯と思われるため、新規の窯として H-113（東山第113）号窯とした。

地表下3mに直上に直径1100mmの上水本管が走っており、掘削が一時的に止められたことから、灰層中の陶器が工事関係者の目に留まったものである。灰層は厚さ約20cm、幅約4.6mにわたって残存していた。協議の結果、この灰層部分の掘削を工事関係者の協力を得て当日中に掘削し、西方の灰層部分については、12日に土層断面図を作成し、覆鋼板の位置を移動する関係から、21日以降月末までの予定で調査を実施することになった。実際には、長さ約1m、幅約13mと残存範囲が僅かであったため、6月21日で完了することができた。

第1図　H-113号窯の位置（S＝1：25,000）　国土地理院2万5千分の1地形図「名古屋南部」

本窯は、全国有数の古代窯業生産地帯である、猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）に含まれる。猿投窯は、名古屋市東部から豊田、刈谷、大府一帯 20 km 四方に広がる丘陵地を指すため、東山（略記号Ｈ）、黒笹（同Ｋ）、岩崎（同Ｉ）、折戸（同Ｏ）、井ケ谷（同ＩＧ）、鳴海（Ｎ）に区分され理解されている。

本窯は、名古屋市東部、東山丘陵に立地していることから、東山窯跡群に属していることになる。東山窯跡群は、猿投窯の中で最も早く焼き物（須恵器）の生産が開始された地区で、古墳時代中期にまで遡る。今のところ判明している最古の窯は、昭和区伊勝町に所在する Ｈ 111 号窯である。以後、東方に向かってより丘陵奥地へ窯が築造されていく。奈良時代後半以降平安時代前期までは、この地区での操業は確認されていないようである。平安時代中期以降、須恵器に代わって灰釉陶器の生産が開始される。11 世紀末には山茶碗の生産が始められ、中世窯へと転換した。

本窯は、出土遺物から平安時代の灰釉陶器を焼成した窯跡であるので、東山地区における灰釉陶器焼成窯について概観してみよう。

昭和区では、Ｈ-103、Ｈ-53、Ｈ-102、Ｈ-1、Ｈ-90、Ｈ-41、Ｈ-80～84、Ｈ-91、Ｈ-89 号窯が、千種区では、Ｈ-51、Ｈ-9、ＩＩ-72 号窯が、名東区では、Ｈ-101 号窯が知られている。隣接する天白区の灰釉陶器窯は、天白川、植田川左岸に位置するため岩崎、鳴海地区に属している。

時期別にみると東山地区では、Ｏ-53 号窯期に再興し、その中心はより北方の瀬戸地区に移動していくと指摘されている。山手通附近の窯では、Ｈ-1 号窯、Ｈ-102 号窯、Ｈ-89 号窯（南山瘟窯古窯）は、Ｏ-53 号窯期、ＩＩ-72 号窯は、ＩＩ-72 号窯期、ＩＩ-53 号窯は、百代寺窯期といわれている。

また東山地区の灰釉陶器窯の立地状況をみると、山手通四丁目附近と、山手通一丁目から、四谷通にかけて多く構築されている。山手通一丁目から四谷通附近に所在する灰釉陶器窯は、丘陵の分水嶺から西方へ派生する尾根を開析した谷の奥まった位置に立地している。千種区日和町に所在する Ｈ 51 号窯、昭和区隼人町に所在するＩＩ-89 号窯は、やや離れた地点の丘陵末端に立地しているが、丘陵西縁を南流する山崎川流域という点で共通する。

ところが、山手通四丁目に所在するＩＩ-80～84 号窯は、立地を異にしている。これらの窯は、分水嶺鞍部に位置し、あえていうならば東方に開析する谷頭に立地している。丘陵分水嶺より東方は、天白川の支流植田川流域である。また、分布調査の結果として、５基が南北に並列したように分布地図に記載されている。一般に灰釉陶器窯は単独で構築されているのに対して、後世の山茶碗窯の如く密集しているとすれば異質なことである。遺物が散布していることから何らかの遺跡であったことは間違いなく、例えば北東約 720 m の丘陵頂部末端には、八事小堂址があり、瓦、火舎香炉、緑釉二彩盤、灰釉三足盤、花瓶、緑釉陶器等が出土している。これは、11 世紀前半の密教に係わる堂址といわれている。また、北方約 180 m、同一尾根上には、近世天保年間に下るものの、川名山妙見堂（現妙見山浄昇寺）が開山している。明治 24 年地形図には、田代村から八事小堂址や妙見堂の脇を通り、飯田街道に抜ける山道が記載されており、尾根筋を行き交う人々がいたことを示している。当地はまた西方に対してもやや規模の大きい谷が開いており（現八事山興正寺が建つ）、飯田街道を望む点でも立地のよい所である。従って、平安時代に遡る宗教的な施設などがあったのではないかと思われる。

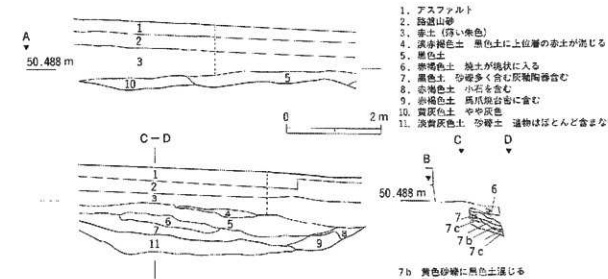
第２図　灰釉陶器窯の分布（S＝１：15,000　大日本帝国陸地測量部１万分の１地形図「東山」昭和14年

1　灰原

今回の工事範囲では、灰層のみが検出されたことから、窯体は、西方に存在したと思われる。道路西側は、丘陵斜面を削平してマンションが建設されているため、すでに滅失していると思われる。

検出された灰層は、丘陵斜面に堆積した灰層の上位部分（第4図中A）と、下位部分（同B）であった。標高は47 m～50 mである。上位部分は、幅約13 m、長さ約1 mのわずかな範囲が残っていた。アスファルト道路面より約50 cm下（路盤砂利層下）に朱色に近い赤土が60～70 cm堆積している。この土層は、丘陵（八事層）を崩して道路を築造した時の造成土である。灰層は、この土層で密封されたように残っていた。灰層の中央上位層は、焼土を含む黒色土で、灰釉陶器を多く含む。その下位層には、黒色土で砂礫を多く含む上層で、灰釉陶器を含む。北端部には、赤褐色土で馬爪焼台を密に含んでいる部分があった。基盤層は淡黄灰色土である。出土遺物は、灰釉陶器、馬爪焼台がコンテナケース8箱分出土した。

下位部分は、上位部分より約2 m下に、幅約4.6 m、厚さ20 cmほどが残っていた。残存する灰層の上には水道本管がのっており、また周囲の土はセメントで固化されているため、東へどれほど広がっているか明らかにはできなかった。しかし、黒色土は、礫を含まず細密な砂シルト質であり、灰原末端の様相を呈していた。出土遺物は、灰釉陶器、窯道具、須恵質土器等がコンテナケース3箱分出土した。



第3図　土層図（S＝1：80）

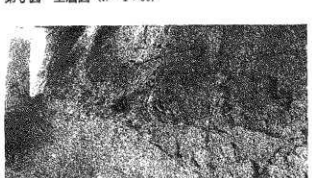
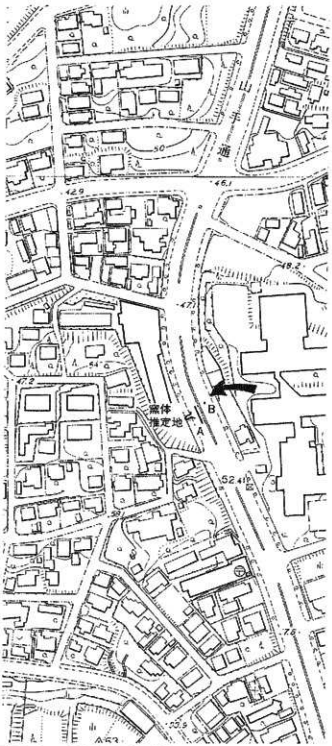
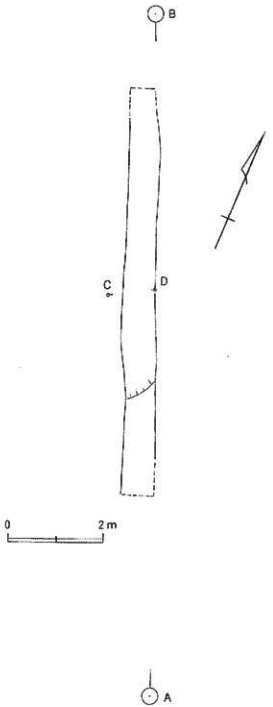


写真1　検出された灰層（北から）

写真2　調査風景（南から）



第4図 H-113号窯の位置 2 (S=1:2,500)



第5図 平面図 (S=1:80)

写真3 灰原検出状況

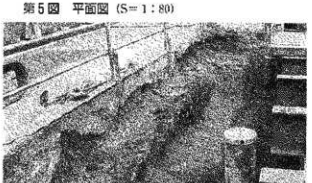


写真4 灰原完掘状況

2　遺物

出土遺物の大半は、灰釉陶器である。そのほかに須恵質の土器、窯道具、窯体内にあった馬爪焼台が若干ある。

灰釉陶器

人工的な施釉がみられない無釉の遺物についても灰釉陶器と同形態、同胎土であるものは灰釉陶器として述べる。

椀（第6図、第7図、第8図1～6・写真5－1～9）

口縁部から高台部まで残っていたのは68点である。このうち重ね焼きしていた状態のまま融着しているものは3点である。法量は、口径14.8cmから17.2cmで、平均値は15.8cmである。底径は6.6cmから8.2cmで、平均値は7.6cmである。大半はほぼ同程度の法量であるが、内面部が比較的浅い、おおよそ5cm以下の椀が少し認められる。

形態的には、体部は緩やかに内弯し、口縁部は強く外反せず斜め上方にのびるものである。第8図4、5は、口縁端部を上方へ摘み上げているものである。底部には、断面形が三角形又は、端部が平坦になった梯形（逆台形）の高台が付く。三日月高台は認められない。底部には糸切り痕がそのまま残されているものが多いが、不定方向のナデ調整、または高台貼り付け部に沿ってナデ調整されているものもある。また、数は少ないが高台端部に糠殻痕が付くものがある。

体部は内外面ともヨコナデ調整を施す。第6図19、第7図13は、体部下半に回転ヘラケズリ調整を施している。中には外面がなめらかでなく、強いナデ調整によって器壁に凹凸が顕著になっているものがある。

施釉は、口縁部の内外面を漬け掛けしているものがあるが、多くは自然釉がかかり人工釉と区別できない。釉薬は、透明で緑灰色、黄灰色に発色している。無釉のものもある。器壁の色調は、全般に灰色を呈し、胎土はやや粗である。焼成はおおむね良好である。

輪花椀（第8図7、8）

小片2点に輪花が認められた。口縁端部を摘み、外面を縦方向に指ナデしたもの（7）と、単に指ナデしたもの（8）がある。

小椀・輪花小椀（第8図9～16・写真6－1、2）

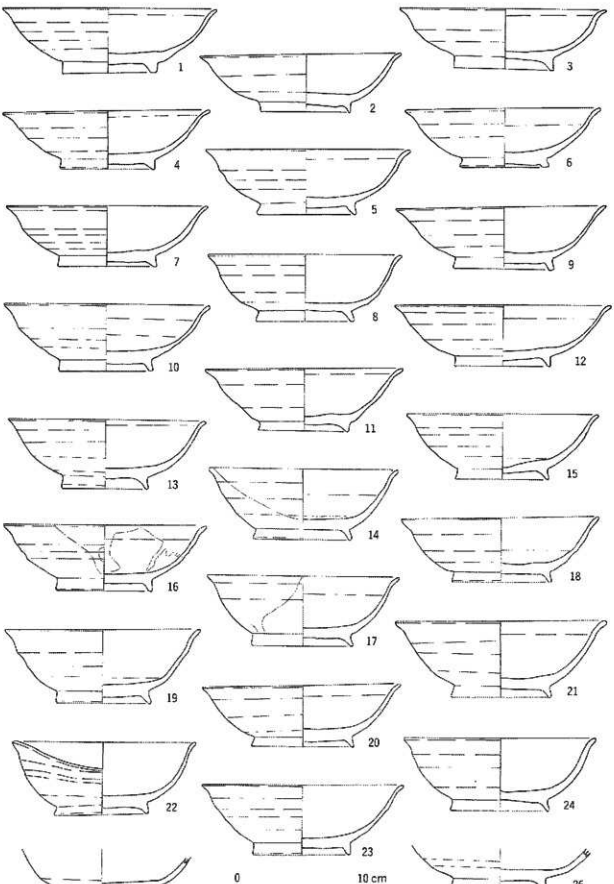
第8図9は、体部上半を強いヨコナデ調整により、体部半ばに稜をもつ。底部は、回転糸切り痕を一部ナデ調整で消し、高台を付ける。高台は、外面にわずかな稜をもつ三日月高台である。12は、内面に沈線が巡る。11は、口縁部が外反する。小椀と皿の中間的な様相をもつ。14、15は、輪花椀である。

皿（第8図17～33・写真6－3～7）

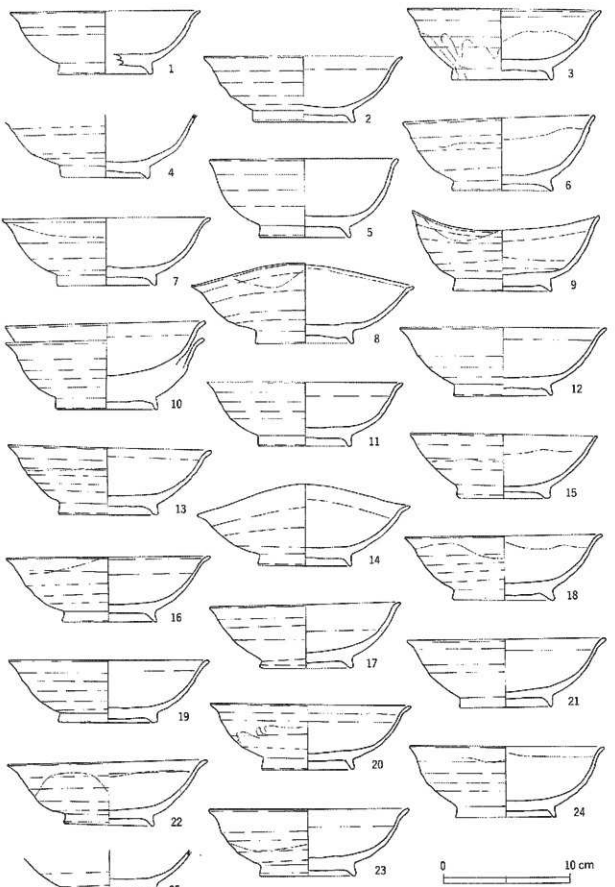
法量的には器高が3.1cm未満のものを皿とした。口径9.6～10cmの小皿と口径12.1～13.9cmの皿に分けられる。体部は内弯しているが、口縁部は外反する。底部は回転糸切り後、ナデ調整を施す。高台は、三日月高台を付ける。18は、口縁部が内弯し、上方へ立ち上がる。内面にわずかな屈折をもつ。糸切り痕をナデ消す。22は、高台の断面形は方形で、高台径も4.7cmと小さい。施釉は、口縁部を漬け掛けする。皿類は、椀と異なり、底部はナデ調整を施し三日月高台を付けている。

折縁皿（第8図34、35）

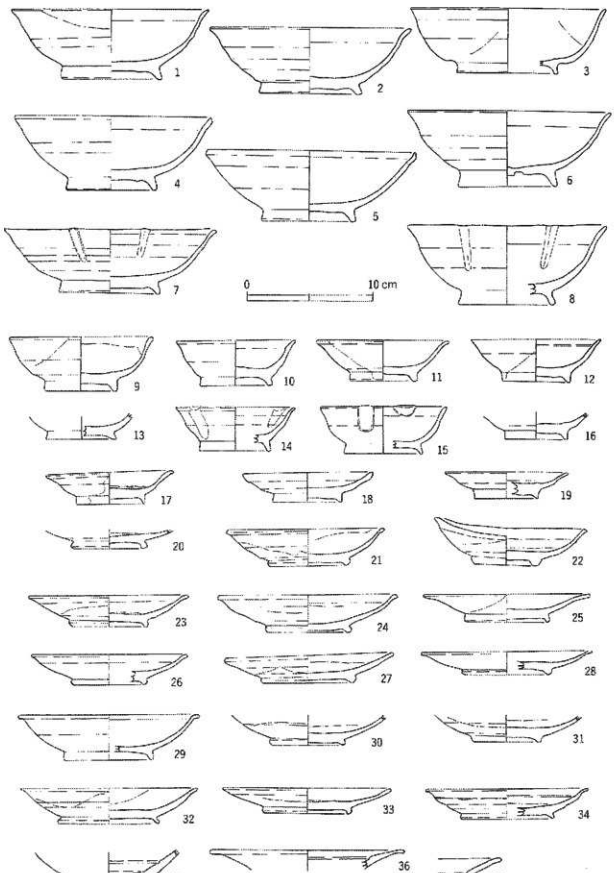
口縁部が外方へ折れ、内面に沈線が巡る。高台は三日月高台で外方へ開く。



第6図　出土遺物(1) (S=1:3)



第7図　出土遺物②（S－1：3）



第8図　出土遺物③ (S=1:3)

段皿（第８図36、37）

口縁部は、外方へ開く。体部が屈曲し、段を作る。高台は、三日月形高台で外方へ開く。糸切り痕はナデ消す。

瓶類（第９図１～14・写真６－８、９）

頸部から口縁部にかけての破片と、底部の破片が多く、全体を伺う資料はない。頸部はラッパ状に開き、口縁部は直角に外方に折れ、内面に平坦面を作り、端部は垂直に立ち上げる。２は平坦面が少ない。３は口縁外面に稜をもつ。底部高台は、接地面の幅が広いのものと狭いものがある。

鉢（第９図15）

口縁部の小片である。口縁端部を折り曲げる。

短頸壺（第９図16・写真６－10）

口縁部の小片である。口縁部はごくわずか立ち上がる。

窯道具

匣鉢（第９図17・写真６－11、12）

粘土紐の輪積み痕が明瞭に残る容器の口縁部片と体部片である。口縁端部は面をもち、外方に折れる。内外面及び断面にも自然釉が付着する。粘土紐の輪積み痕が明瞭に残ることから、製品ではなく匣鉢としたが、焼成した製品は不明である。

焼台

馬爪焼台である。

須恵質の土器

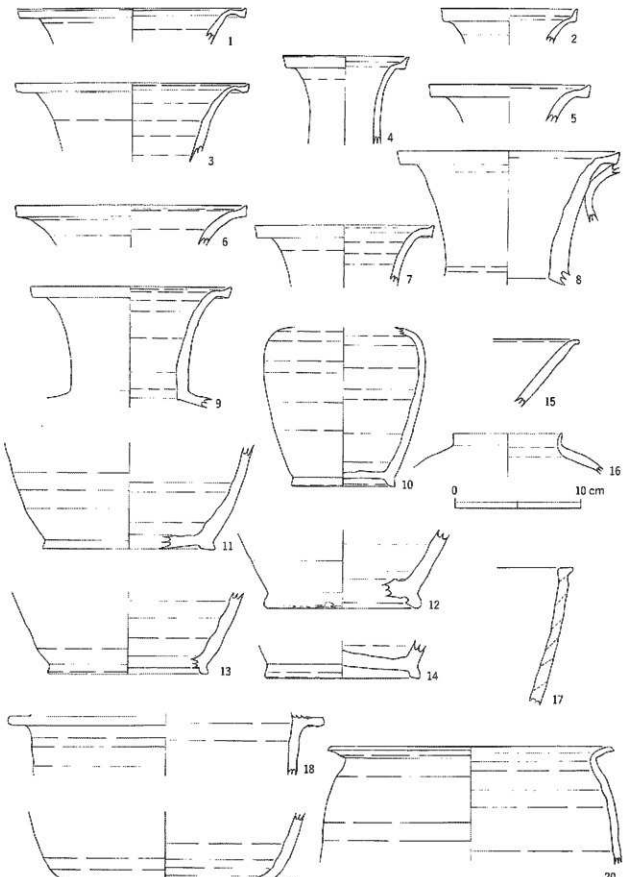
灰釉陶器とは異なり、胎土に砂粒を含み、無釉で青灰色を呈する。須恵器の質感をもつものであるが、その器形は土師器のものである。

羽釜（第９図18、19・写真６－13）

鍔の部分が残る。断面形は方形を呈し、上面は水平であるが下面は丸みをもつ。青灰色を呈し、砂粒を多く含む。19は羽釜又鍋の体部下半部の破片である。ヘラケズリ調整を施す。

甕（第９図20・写真６－14）

口縁部は逆Ｌ字状に直角に折れる。体部破片は、平行タタキ痕が明瞭である。淡青灰色を呈する。



第9図　出土遺物(4) (S－1：3)

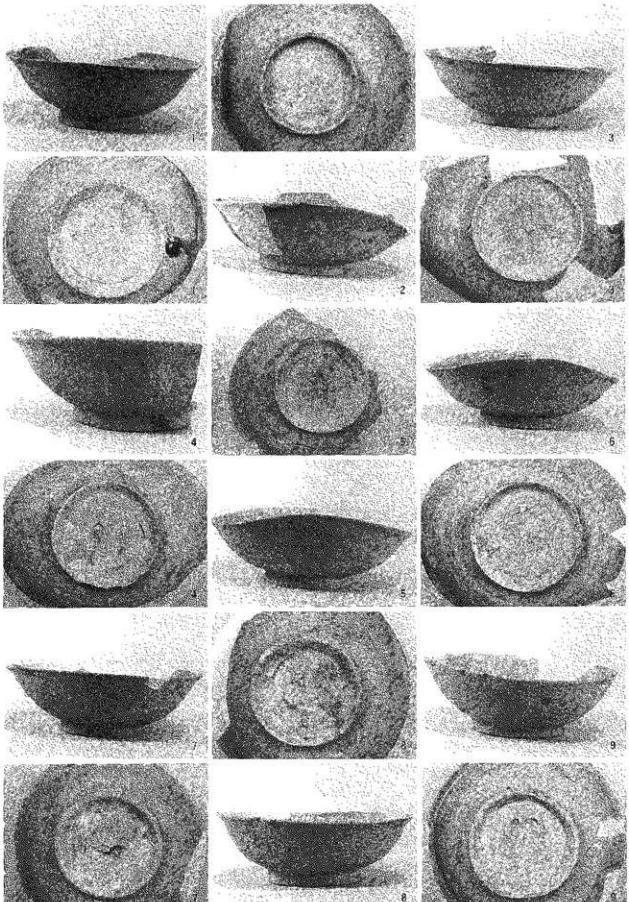


写真5　出土遺物(1)

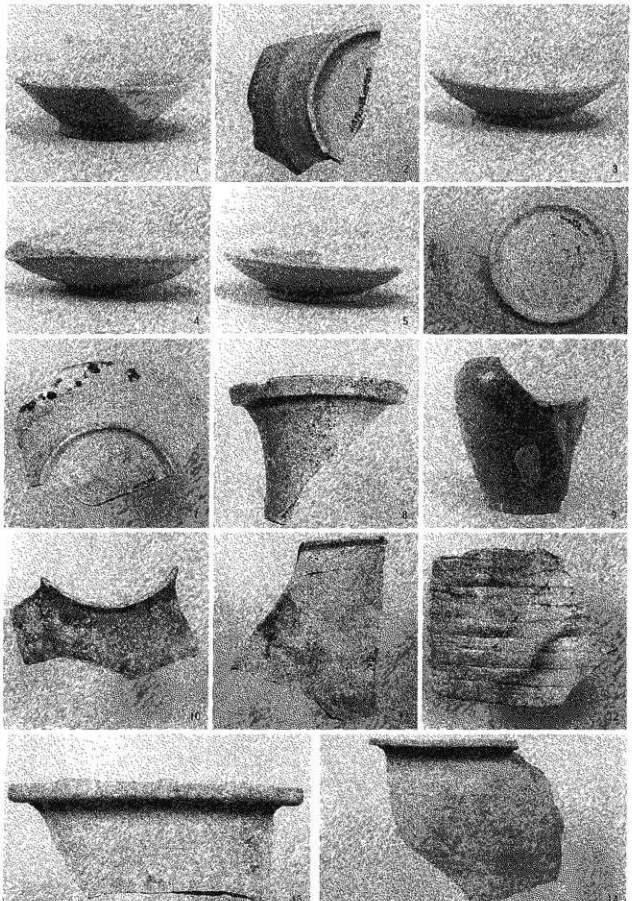


写真6　出土遺物(2)

図版番号	器種	写真番号	口径	器高	高台径	色調	備考	出土位置
第6図1	椀	—	(16.85)	5.0	7.1~7.4	灰	自然釉、口縁部、高台歪む、回転糸切底	北端8層
第6図2	椀	—	16.0	4.4	7.1	灰	自然釉、口縁歪む、回転糸切底	灰5層北端
第6図5	椀	—	(16.35)	4.85	(7.8)	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整、土具痕	灰5層北端
第6図4	椀		(16.3)	4.75	7.5	灰	施釉、自然釉、回転糸切後ナデ消す	灰5層北端
第6図5	椀		(16.2)	5.1	7.7	灰	外面回凸、回転糸切痕、見込みナデ調整	灰6層
第6図6	椀		(15.3)	4.7	7.0	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整	灰6層
第6図7	椀	—	(15.85)	4.8	7.8	灰	施釉、自然釉、回転糸切痕	灰6層
第6図8	椀	—	(15.4)	5.3	(7.8)	灰	施釉不明、回転糸切後ナデ調整	灰6層
第6図9	椀	—	(16.6)	5.1	8.0	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整か	灰7層
第6図10	椀	—	(16.2)	5.15	7.4	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整	灰7層
第6図11	椀	—	(15.7)	5.0	7.1	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切痕	灰5層
第6図12	椀	—	(17.2)	4.85	(7.6)	灰	口径最大品、施釉、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰6層南端付近
第6図13	椀	写真5-1	15.5	5.5	6.6	灰	施釉、回転糸切痕	灰5層
第6図14	椀	—	(15.0)	5.6	7.7	灰	施釉、口縁部、高台歪む、回転糸切痕	灰5層
第6図15	椀	—	(15.3)	5.2	(7.4)	灰	施釉、自然釉、回転糸切痕	灰5層
第6図16	椀	—	(16.0)	7.6	5.2	灰	施釉、回転糸切痕	灰5層
第6図17	椀	—	(15.2)	5.45	8.0	灰	施釉、自然釉、回転糸切痕	灰5層
第6図18	椀	—	(15.6)	5.15	7.8	灰	施釉、自然釉、回転糸切痕	灰5層
第6図19	椀	—	(15.4)	5.9	7.5	灰	無釉か、回転糸切後雑なナデ調整、体部下半ヘラケズリ調整	灰5層
第6図20	椀	写真5-2	15.6	4.9	8.0	灰	施釉、自然釉、口縁部やや歪む、回転糸切痕	灰5層
第6図21	椀	—	16.8	6.1	7.9	灰	無釉、回転糸切痕	灰5層
第6図22	椀	写真5-3	14.4	5.8	7.4	灰	施釉、口縁部歪む、回転糸切痕	灰5層
第6図23	椀	—	(16.0)	5.6	7.6	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切痕	灰5層北端
第6図24	椀	—	(15.2)	5.75	(7.7)	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切痕	灰5層北端
第6図25	椀	—			7.85	灰	回転糸切痕	灰6層
第6図26	椀	—	(15.85)	4.8	7.8	灰	施釉、自然釉、回転糸切痕	灰6層
第7図1	椀	—	(15.0)	5.0	(7.4)	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切痕	灰5層北端
第7図2	椀	—	(15.7)	5.2	7.9	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切後雑なナデ調整	灰5層北端
第7図3	椀	—	(15.7)	5.4	7.95	灰釉	施釉、回転糸切痕	灰5層北端
第7図4	椀	—			6.9	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰5層北端
第7図5	椀	—	(12.9)	6.3	7.0	灰	口縁部歪む、回転糸切痕	灰5層北端
第7図6	椀	写真5-4	(15.2)	6.0	8.0	灰	施釉、自然釉、回転糸切痕	灰5層北端
第7図7	椀	—	(16.5)	5.3	(7.8)	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切痕	灰5層北端
第7図8	椀	写真5-5	17.7	4.8~6.4	7.7	灰	施釉、口縁部著しく歪む、回転糸切痕	灰北端8層
第7図9	椀	写真5-6	14.7	4.8~5.4	7.8	灰	施釉、口縁部著しく歪む、回転糸切痕	灰北端8層
第7図10	椀	—	15.65 (口)	5.3~5.6 (下)	7.9 (下)	灰	2個体接着	灰北端8層

表1　H-113号窯出土遺物観察表(1)

図版番号	器種	写真番号	口径	器高	高台径	色調	備考	出土位置
第7図11	椀	—	(15.5)	5.05	7.3	灰	施釉、回転糸切底	灰走塚8層
第7図12	椀	—	(16.35)	5.45	7.8	灰	無釉、自然釉、回転糸切底	灰走塚8層
第7図13	椀	—	(16.1)	5.05	7.8	灰	施釉、高台端面に櫛状痕	灰走塚8層
第7図14	椀	—	(16.9)	4.8	7.3	灰	口縁部著しく歪む、回転糸切痕	灰走塚8層
第7図15	椀	—	(14.8)	4.9	7.4	灰	施釉、回転糸切底	灰走塚8層
第7図16	椀	写真5-7	16.2	5.2	7.4	灰	施釉、回転糸切底	灰走塚8層
第7図17	椀	写真5-8	15.1	5.05	7.3	灰	無釉、回転糸切底	灰6層
第7図18	椀	—	15.6	5.1	7.95	灰	外面白色、施釉、自然釉、回転糸切底	灰6層
第7図19	椀	—	(15.9)	5.0	7.9	灰黄	無釉、回転糸切痕	灰6層
第7図20	椀	—	(15.9)	5.0	7.3	灰	口縁部歪む、見込みが窪む、回転糸切痕	灰6層
第7図21	椀	—	(15.7)	5.3	7.3	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰6層
第7図22	椀	—	15.8	5.1	7.0	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整	灰5層
第7図23	椀	写真5-9	15.8	5.3	7.5	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰7層
第7図24	椀		(15.4)	5.6	7.9	灰	無釉、口縁部歪む、回転糸切底	灰7層
第7図25	椀		15.8	5.1	7.0	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整	灰6層
第8図1	椀	—	15.6	5.6	7.8	灰	施釉、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰西端
第8図2	椀	—	(16.0)	5.3	8.2	灰	高台径最大、無釉、回転糸切後ナデ調整	灰西端
第8図3	椀	—	(15.2)	(6.1)	(7.8)	灰	小片、施釉	灰東端
第8図4	椀	—	15.4	5.95	7.1		口縁部つまみ上げる、回転糸切底	灰走塚8層
第8図5	椀	—	(16.5)	5.4	7.4	灰	施釉、口縁部歪む、口縁部つまみ上げる、回転糸切後ナデ調整	灰走塚8層
第8図6	椀	—	(15.1)	5.8	7.7	灰	無釉、高台が少し高い、回転糸切痕	灰7層
第8図7	輪花椀	—	(16.8)	5.1	7.85	灰	施釉不明、自然釉、回転糸切底	灰5層
第8図8	輪花椀	—	(15.8)	5.3	(7.7)	灰	小片、施釉	灰走塚8層
第8図9	小椀	—	11.4	4.3	5.7	灰白色	施釉、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰走塚8層
第8図10	小椀	—	(9.4)	3.6	5.0	灰	自然釉、底部ナデ調整	灰西端
第8図11	小椀	写真6-1	10.5	3.2	5.25		施釉、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰5層
第8図12	小椀		(10.3)	3.4	5.4		内面に沈線、施釉、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰走塚8層
第8図13	小椀	—	—	—	(5.6)		自然釉、底部ナデ調整	灰西端
第8図14	輪花小椀	—	(9.4)	3.45	(5.5)	灰		灰西端
第8図15	輪花小椀	写真6-2	(10.0)	3.7	6.00	灰	自然釉、底部ナデ調整	灰走塚8層
第8図16	小椀	—	—	—	4.8	灰	底部、小片、施釉、回転糸切後ナデ調整	灰5層
第8図17	皿	—	(10.0)	2.65	5.4	灰	施釉、内面に沈線、回転糸切後ナデ調整	灰5層
第8図18	皿	—	(10.2)	2.3	5.4	灰	施釉、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰5層
第8図19	皿	—	(9.8)	2.1	(5.0)	灰	施釉不明	灰5層
第8図20	皿	—	—		(6.0)	灰白	自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰東端
第8図21	皿	写真6-3	12.1	3.1	6.1	灰白	施釉、自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰走塚上位第4

表2 H-113号竪出土遺物観察表 (2)

図版番号	器種	写真番号	口径	器高	高台径	色調	備考	出土位置
第8図22	皿	写真6-4	12.1	2.3~(3.7)	5.0	灰白	施釉、口縁部著しく歪む、回転糸切痕	灰北壇8層
第8図23	皿	写真6-5	12.7	2.4	5.9	灰白	施釉、口縁部著しく歪む、回転糸切り後ナデ調整	灰北壇8層
第8図24	皿	写真6-6	13.8	3.0	6.5	灰白	施釉、回転糸切後ナデ調整	灰北壇8層
第8図25	皿	写真6-7	(13.1)	2.2	(6.5)	灰白	自然釉、回転糸切痕	灰東壇
第8図26	皿	—	(12.3)	2.4	(5.8)	灰	施釉	灰東壇
第8図27	皿	—	(13.0)	2.0~2.5	7.1	暗灰	全体に歪む、施釉	灰東壇
第8図28	皿	—	(13.5)	1.85	(6.5)	灰	施釉か、回転糸切後ナデ調整	灰東壇
第8図29	皿	—	(14.3)	3.55	(7.0)	灰	浅い底か、施釉不明	灰表採
第8図30	皿	—	—		5.7	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整か	灰表採
第8図31	皿	—	—		5.3	灰	施釉、回転糸切後ナデ調整	灰東壇
第8図32	皿	—	(11.0)	2.9	8.0	やや暗灰	施釉、回転糸切後ナデ調整	灰東壇
第8図33	皿	—	(13.3)	2.0	6.6	灰	施釉、回転糸切痕	灰表採
第8図34	折縁皿	—	(12.85)	2.4	7.1	灰	施釉、自然釉	灰東壇
第8図35	折縁皿	—	—		(7.0)	灰黄色	自然釉、回転糸切後ナデ調整	灰北壇8層
第8図36	段皿	—	(15.4)			暗灰色	自然釉	灰東壇
第8図37	段皿	—	—			灰	自然釉	灰東壇
第9図1	瓶	—	(18.0)			灰白	施釉か	灰東壇
第9図2	瓶	—	(10.8)			淡灰	施釉か	灰東壇
第9図3	瓶	—	(18.4)			灰白	自然釉	灰東壇
第9図4	瓶	写真6-8	(10.0)			灰白	自然釉	灰東壇
第9図5	瓶	—	(12.7)				施釉か	灰東壇
第9図6	瓶	—	(18.2)				施釉か	灰東壇
第9図7	瓶	—	(14.2)	—			施釉か	灰表採
第9図8	瓶	—	(17.6)	—			口縁部歪む、自然釉	灰表採
第9図9	瓶	—	(15.8)	—			歪みあり、施釉か、自然釉	灰表採
第9図10	瓶	写真6-9	—	—	8.1		施釉か	灰5層北壇
第9図11	瓶	—	—	—	(13.6)	灰白		灰10層
第9図12	瓶	—	—	—	(12.4)	灰白	自然釉	灰北壇8層
第9図13	瓶	—	—	—	(12.7)	淡灰	歪みあり、施釉か	灰表採
第9図14	瓶	—	—	—	(12.7)	淡灰	歪みあり	灰東壇
第9図15	鉢	—	—	—	—	灰	自然釉	灰東壇
第9図16	擂鉢壺	写真6-10	(8.6)	—	—	灰白	自然釉	灰東壇
第9図17	擂鉢	写真6-11	—	—	—	灰	輪積み痕明瞭	灰東壇
第9図18	羽釜	写真6-13	—	—	—	青灰	須恵質	灰表採
第9図19	羽釜	—	—	—	—	青灰	須恵質	灰表採
第9図20	甕	写真6-14	(22.1)	—	—	青灰	須恵質	灰表採

表3　H-113号竪出土遺物観察表(3)

第4章　まとめ

今回の調査は、地下鉄工事中に発見されたこともあり、灰原のごくわずかな範囲に留まった。しかし、平安時代の東山窯において明らかにされている資料は少なく、貴重な資料を得た。

遺物は、コンテナケース11箱にのぼり、その内容は灰釉陶器、窯道具、須恵器質土器である。灰釉陶器の多くは椀である。椀は、比較的見込みが浅い一群が見とめられるものの、ほぼ同じ形態をしている。製作技法を観察すると、体部下半にヘラケズリ調整を施すものは少なく、ナデ調整のみのものがほとんどであった。また、底部糸切り未調整のものが多く、貼り付け高台の断面形は、三角形または逆台形である。

このように椀では、製作の簡略化、また法量の単一化の傾向が顕著である。対して皿類は、三日月形高台で、底部は糸切り痕をナデ調整して消しているものが大半である。椀と皿類では製作技法に違いが認められ、皿類は古式の技術が看取されるものの、皿類の中には小椀と皿の中間的な形態を示すものがあった。以上の特徴から、本資料の編年上の位置は、灰釉陶器最末期の百代寺窯式期に比定されると考えられる。

一方、粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る匣鉢と思われる破片が出土している。これを使用して焼成した製品については不明である。また須恵器質の土器とした一群のうち、甕は本来、土師器として焼成されるものである。また、羽釜は、この頃から中世窯、特に常滑窯で焼成が顕著にみられるものである。初出は、東山72号窯式期に瀬戸窯において出土した資料で、それに続く資料は初期山茶碗(H-G-105号窯期)の千種区揚羽町古窯出土資料である。本資料は、その間隙を埋める資料となった。

東山地区では、次期には初期山茶碗を焼成するようになる。東山地区においては百代寺窯期の窯は1基のみで、内容はほとんど明らかになっていないため、瀬戸窯の資料を代替して理解してきた。今回の出土資料は、一部の灰原調査という制約はあるものの、東山地区での百代寺窯期の内容を知ることとなった。東山地区において灰釉陶器から初期山茶碗への転換を考える上でも重要な資料となろう。

参考文献

斎藤孝正　「無投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル 211』　1982年
斎藤孝正　「東海地方の施釉陶器生産―猿投窯を中心に」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3施釉陶器』　1994年
中野晴久　「常滑羽釜」『鍋と甕　そのデザイン』　1996年

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	朝日遺跡（第7～10次）　茶臼山古墳（第3次）　千音寺遺跡（第3次）　H-113号窯
巻次	36
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	49
編著者名	伊藤厚史・伊藤正人・野口泰子・野澤則幸・藤井康隆・村木誠・新山雅広・鈴木茂
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026　愛知県名古屋市南区見晴町47　TEL (052)823-3200　FAX (052)823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508　愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号　TEL (052)972-3268　FAX (052)972-4178
発行年	西暦2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 m²	調査原因
あさひいせき 朝日遺跡	にしくかがきちょう 西区長先町地内	23100	3-4	35°12′57″ ～13′5″	136°51′34 ～47″	2000.1.11 ～2000.3.30	240	下水道工事
あさひいせき 朝日遺跡	にしくかがきちょう 西区中沼町地内	23100	3-4	35°13′9 ～20″	136°51′32 ～44″	2000.4.5 ～2000.5.31	130	下水道工事
あさひいせき 朝日遺跡	にしくかがきちょう 西区長先町地内	23100	3-4	35°13′3～5″	136°51′35 ～39″	2000.6.26 ～2000.7.14	160	下水道工事
あさひいせき 朝日遺跡(東南部)	にしくあがりちょう 西区見寄町地内	23100	3-6	35°12′58″ ～13′2″	136°51′58″ ～52′1″	2001.1.9 ～2001.2.23	11	下水道工事
ちゃうすやまこふん 茶臼山古墳	しゅうやくおくたのどうたやま 守山区小幡字北山地内	23100	1-138	35°12′20″	136°59′19″	2000.7.3 ～2000.7.28	60	下水道工事
せんのんじいせき 千音寺遺跡	はがのしとみだしょうがいちがりてんしょう 中川区富田町大字千音寺	23100	13-15	35°09′40″	136°48′40″	2000.7.31 ～2000.9.21	350	市営住宅建設
H-113号窯	しゅうあくやまてりがり 昭和区山手通三丁目	23100	9-61	35°8′32″	136°58′2″	2000.6.8 ～6.21	18	地下鉄工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝日遺跡	集落遺跡	弥生～古墳時代	溝・土坑・旧河道	弥生土器・土師器	第7次調査
朝日遺跡	集落遺跡	弥生～古墳時代	溝・土坑・旧河道	弥生土器	第8次調査
朝日遺跡	集落遺跡	弥生～古墳時代	溝・ピット	弥生土器・土師器	第9次調査
朝日遺跡(東南部)	集落遺跡	弥生時代	土坑？	弥生土器	第10次調査
茶臼山古墳	古墳	古墳時代	周濠	須恵器	第3次調査
千音寺遺跡	集落遺跡	中世	小穴（ピット）	陶器・土師器	第3次調査
H-113号窯	古窯	古代	灰原	灰釉陶器	立会調査

（付載分の抄録は、p.60を参照）

名古屋市文化財調査報告49
埋蔵文化財調査報告書36
2001年3月30日　発行

編集　名古屋市見晴台考古資料館
発行　名古屋市教育委員会
印刷　株式会社　クイックス